

図42 C・D区掘立柱建物跡配置図

表1 標立柱建物跡柱穴観察表

団番号	遺構	南北	番号	SP番号	深さ (mm)	南北	遺構	南北	SP番号	深さ (mm)	南北	遺構	南北	SP番号	深さ (mm)		
団41	SB1	位置：CD - E-31・32 母屋：三間×三間 三面庇 用途：仏堂	a2	SP128	500	59411	S85	位置：GF - G-31 母屋：二間×五間 庇柱 用途：倉庫	a1	SP234	295	59412	S89	位置：GP - Q-29 母屋：二間×六間 用途：不明	a1	SP171	179
			a3	SP110	617		a2	SP300	179				a2	SP163	351		
			a4	SP530	562		a1	SP306	213				a1	SP175	397		
			a5	SP538	626		a1	SP462	36				a2	SP363	162		
			b1	SP117	638		a2	SP256	180				c2	SP153	118		
			b2	SP257	609		a2	SP287	213				c3	SP941	27		
			b3	SP310	733		a1	SP158	813				c2	SP949	210		
			b4	SP277	726		a5	SP194	253				c1	SP948	213		
			b5	SP596	519		a2	SP478	253				c3	SP901	231		
			c1	SP115	533		a2	SP215	969				c1	SP978	38		
			c2	SP187	243		a2	SP275	360				c2	SP936	129		
			c3	SP178	473		a4	SP271	411				c3	SP921	696		
			c4	SP129	609		a5	SP275	314				c4	SP176	339		
			c5	SP409	382		b6	SP485	83				c5	SP186	889		
			d1	SP531	377	59411	S86	位置：GF - H-32 母屋：二間×五間 庇柱 一庇庇 用途：倉庫	a2	SP915	601				d1	SP160	852
			d3	SP594	492		a3	SP312	535				d1	SP347	325		
			d4	SP518	516		a4	SP467	152				d3	SP331	138		
			d5	SP518	263		a1	SP231	417				d1	SP340	229		
			e2	SP101	551		a2	SP726	419				d2	SP336	169		
			e3	SP102	523		a3	SP223	413				d1	SP356	216		
			e5	SP551	283		a4	SP219	320				d3	SP426	313		
			f1	SP122	254		a5	SP314	287	59412	SB1	位置：GY - 29 + 30 母屋：二間×三間 庇柱 用途：倉庫	a1	SP971	159		
			f2	SP225	265		a6	SP416	415				a2	SP947	199		
			f3	SP221	583		a1	SP140	378				a3	SP1038	518		
			f4	SP516	567		a2	SP247	103				a1	SP960	359		
			f5	SP112	441		a3	SP293	583				a2	SP938	180		
							a4	SP304	593				a5	SP1635	101		
							a5	SP448	725				a4	SP917	697		
							a6	SP474	661	59412	SB12	位置：DA - 29 母屋：一間×三間 庇柱 用途：倉庫？	a2	SP995	365		
団41	SB2	位置：CD - 31 母屋：二間×四間 一面庇 用途：住宅？	a2	SP110	673		a2	SP251	361				a2	SP993	233		
			a3	SP112	657		a3	SP465	310				a3	SP859	320		
			a4	SP106	283		a4	SP205	340				a4	SP388	322		
			b1	SP257	316		a5	SP272	437				a2	SP857	242		
			b3	SP274	131		a6	SP781	313				a3	SP836	263		
			b4	SP103	582		b1	SP342	818				b4	SP835	230		
			c1	SP211	273		b2	SP408	116								
			c3	SP174	336		b3	SP376	323								
			c4	SP128	109	59411	S87	位置：GF - G-30 母屋：一間×四間 用途：倉庫	b4	SP471	291						
			d1	SP106	162		b5	SP493	593								
			d3	SP521	456		b6	SP476	405								
			d4	SP520	656		b7	SP282	223								
			d5	SP525	145		b8	SP515	145								
			e2	SP513	231		c1	SP329	310								
			e3	SP101	387		c2	SP128	323								
			e4	SP110	323		c3	SP132	330								
			e5	SP110	231		c4	SP125	310								
			e6	SP110	231		c5	SP132	340								
			e7	SP106	386		c6	SP389	360								
			e8	SP141	169		c7	SP1381	471								
			e9	SP104	358		c8	SP1375	469								
			f1	SP97	360		c9	SP1411	150								
			f3	SP126	326		d1	SP1483	280								
			f4	SP447	237		d2	SP1621	470								
							d3	SP1632	209								
団41	SB3	位置：CD - E-31 母屋：三間×三間 東側 - 四間 用途：住宅	a3	SP111	365		a3	SP176	373								
			a4	SP067	646		a5	SP159	271								
			a5	SP134	253		a1	SP196	520								
			b1	SP154	631		a2	SP165	594								
			b2	SP118	541		a3	SP1655	269								
			b3	SP105	500		a4	SP1832	163								
			b4	SP178	593		a5	SP1562	640								
			b5	SP588	809		a6	SP1816	843								
			c1	SP127	807		a7	SP1760	310								
			c2	SP134	916		a8	SP1514	223								
			c3	SP114	823		a9	SP1741	710								
			c4	SP107	466		a10	SP1735	819								
			c5	SP113	370		a11	SP1765	153								
			c6	SP221	636		a12	SP1056	320								
			c7	SP138	210		a13	SP1308	330								
			c8	SP136	569		a14	SP1731	230								
			c9	SP124	341		a15	SP17170	363								
			c10	SP119	361		a16	SP1732	181								
			c11	SP98	529												
			c12	SP166	579												
			c13	SP136	569												
			c14	SP116	430												
			c15	SP532	340												

* 母屋規範は調査区内で確認できた範囲のものである。

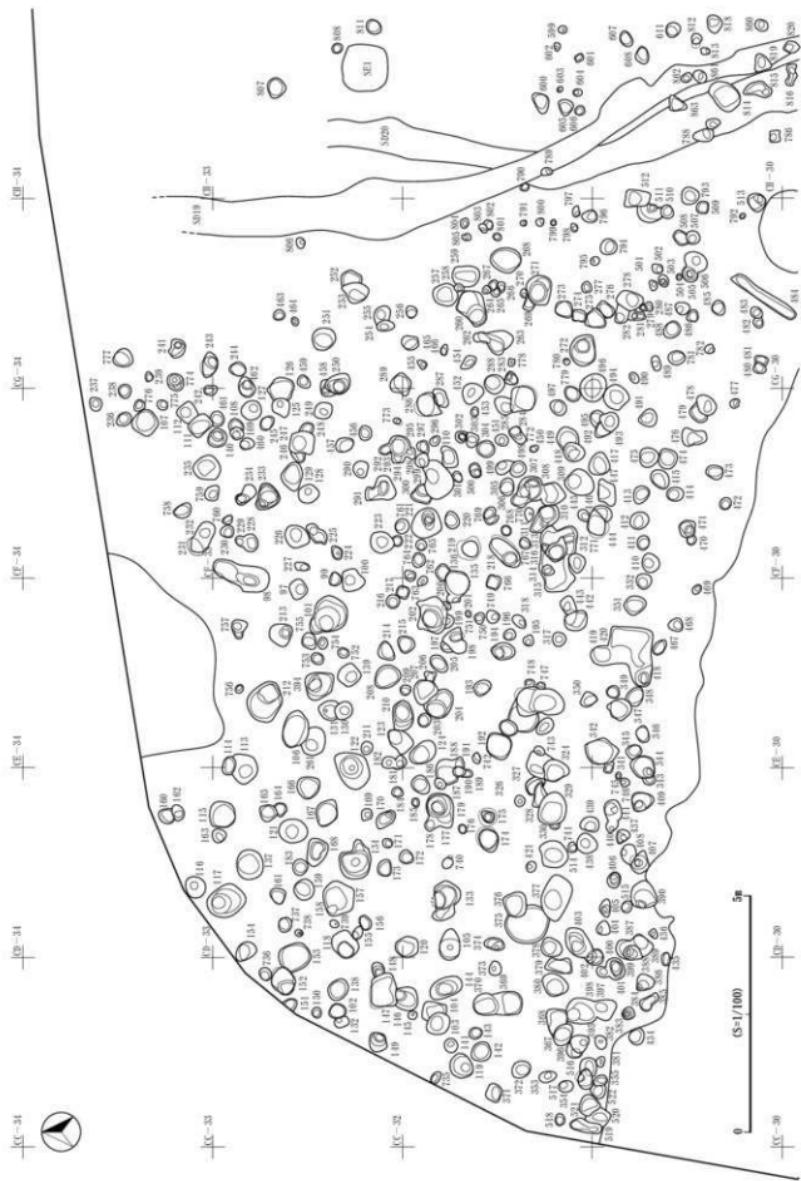


図43 B区ピット集中区

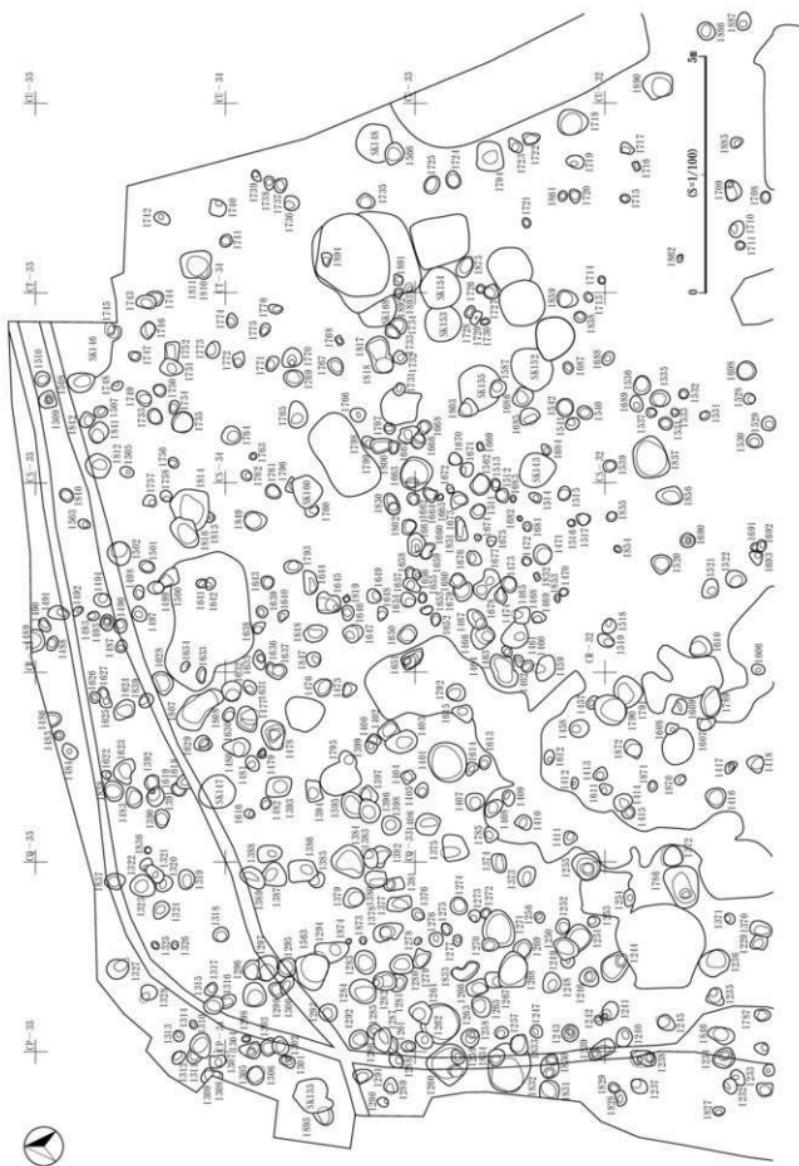


図44 C区ピット集中区(1)



図45 C区ピット集中区（2）

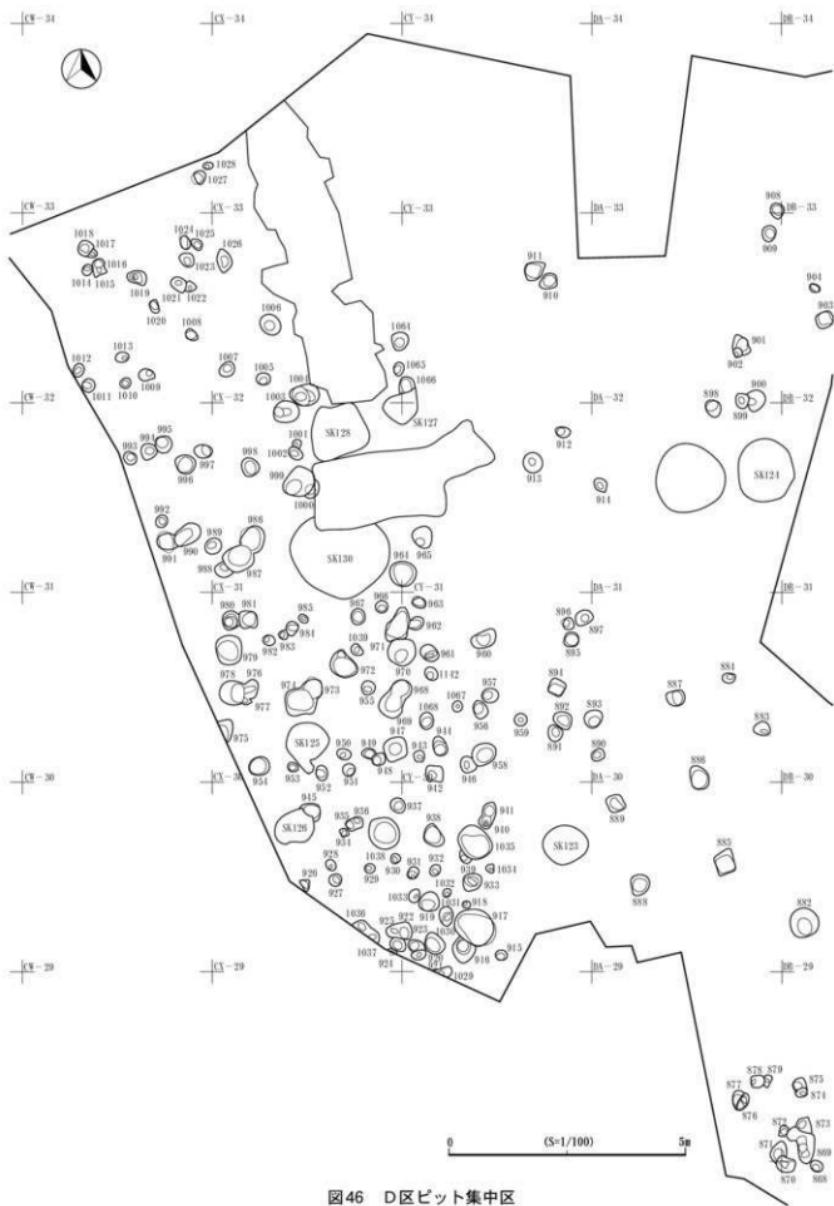


図46 D区ピット集中区

第2節 土坑

第138号土坑（図47）

【位置と確認】 C Q - 30グリッドに位置する。第IX層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】 第1357号ピットと重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】 長軸118cm、短軸97cmの楕円形を呈し、深さは42cmである。

【堆積土】 3層に分層した。2層は暗褐色土と黄褐色ロームとの混合土であり、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央がやや窪んでいる。

【出土遺物】 堆積土中から大堀相馬産の土瓶が出土した。

【小結】 出土遺物から、19世紀中葉のものと考えられる。

第145号土坑（図47）

【位置と確認】 D F - 24グリッドを中心に位置する。第III層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【平面形・規模】 残存長軸135cm、残存短軸126cmの円形を呈すると考えられる。深さは113cmである。

【堆積土】 8層に分層した。1～7層は堆積土中にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がるが、途中に屈曲部を持ち、そこから開口部にかけてはやや外反しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】 堆積土中及び底面から古銭、煙管の雁首が出土した。古銭は錢種の判明したものはいずれも新寛永である。図48－6は煙管の雁首である。肩が付かず、脂返しはほとんど渦曲しない。火皿は小型化しておらず、補強帯も見られない。図48－7も煙管の雁首であるが、火皿を欠損している。また、3層からはガラス片が出土した。

【小結】 人骨は出土しなかったが、近世以降の墓と考えられる。しかし、1～7層の状況及びガラス片の出土から、後世に改葬されている可能性も考えられる。

第160号土坑（図47）

【位置と確認】 C R - 30グリッドに位置する。第IX層を精査中に確認した。

【重複】 第1760・1796号ピットと重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】 長軸60cm、短軸58cmの円形を呈する。深さは61cmである。

【堆積土】 断面図を作成しなかったため不明である。

【壁・底面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

【出土遺物】 堆積土中から肥前系と考えられる中挽が出土した。

【小結】 出土遺物から19世紀代のものと考えられる。

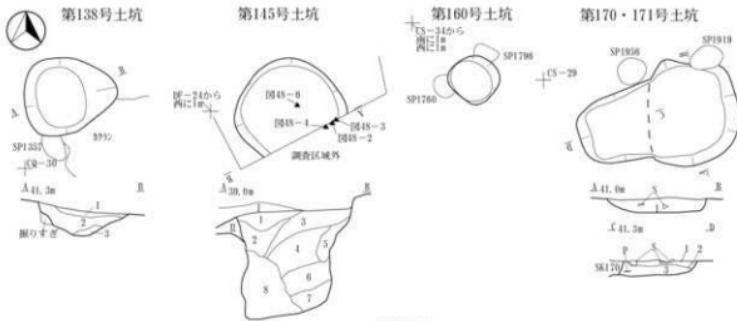
第170号土坑（図47）

【位置と確認】 CS-28・29グリッドに位置する。第X層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】 第171号土坑、第1919号ピットと重複し、前者より新しく、後者より古い。

【平面形・規模】 長軸128m、残存短軸114mの方形を呈すると考えられる。深さは22cmである。

【堆積土】 黒褐色土を主体とする。層中には礫が含まれ、人為堆積と考えられる。



第138号土坑		第145号土坑		第160号土坑		第170・171号土坑	
第1層	10YR 5/3 粘褐色土。灰白色浮石(0~1~20mm)、明黄色砂±1粒(0~1~10mm)。 炭化物(0~1~2mm)微量。	第1層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。暗褐色土微量。	第1層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。暗褐色土微量。	第1層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。暗褐色土微量。
第2層	10YR 3/3 粘褐色土。灰白色浮石±1粒の混合土。 灰白色浮石(0~1~10mm)微量。碳化物。	第2層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~10mm)少量。碳化物。	第2層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。明黄色砂±1粒(0~1~3mm)微量。	第2層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。明黄色砂±1粒(0~1~5mm)微量。
第3層	10YR 5/6 灰褐色土±1粒。小穢泥炭。	第3層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~10mm)中量。	第3層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)中量。	第3層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)中量。
第4層	10YR 2/2 灰褐色土。明黄色砂±1粒(0~1~10mm)少量。 炭化物±1粒(0~1~2mm)微量。碳泥炭。活性あり。	第4層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。炭化物微量。	第4層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。炭化物微量。	第4層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。炭化物微量。
第5層	10YR 2/3 粘褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。 灰白色浮石(0~1~2mm)微量。碳泥炭。	第5層	10YR 2/4 粘褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。	第5層	10YR 2/4 粘褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。炭化物微量。	第5層	10YR 2/1 灰褐色土。灰褐色土少量。黄褐色砂±1粒(0~1~2mm)微量。
第6層	2. 3YI 7/4 灰褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。	第6層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。	第6層	10YR 2/1 灰褐色土。灰褐色土少量。黄褐色砂±1粒(0~1~2mm)微量。	第6層	10YR 2/1 灰褐色土。灰褐色土少量。黄褐色砂±1粒(0~1~2mm)微量。
第7層	10YR 4/2 灰褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。 灰白色浮石(0~1~2mm)微量。碳泥炭。	第7層	10YR 2/2 灰褐色土。灰白色浮石±1粒(0~1~2mm)少量。	第7層	10YR 2/1 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。	第7層	10YR 2/1 灰褐色土。灰白色浮石(0~1~2mm)少量。

第5号用途不明遺構

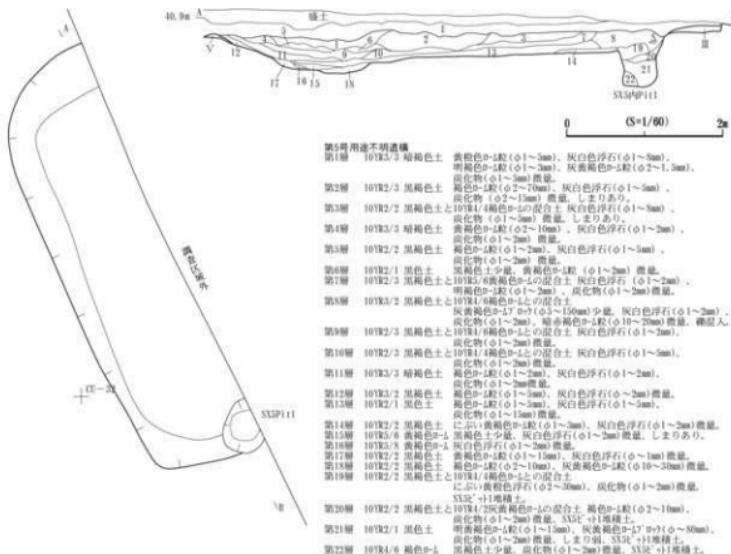


図47 中・近世の土坑・用途不明遺構

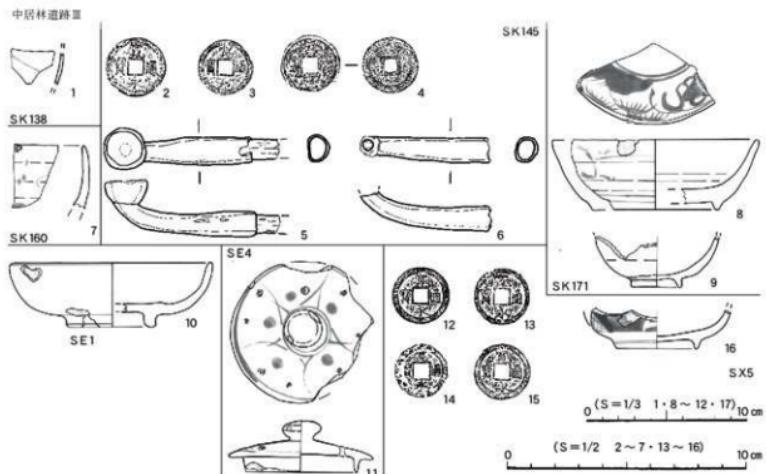


図48 中・近世の土坑・井戸跡・用途不明遺構出土遺物

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

【小結】遺物は出土しなかったが、第171号土坑との重複関係より近世以降のものと考えられる。

第171号土坑（図47）

【位置と確認】CS-28・29グリッドに位置する。第X層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】第170号土坑と重複し、本遺構が古い。

【平面形・規模】残存長軸128cm、短軸88cmの長方形を呈すると考えられる。深さは23cmである。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土を主体とする。層中には礫やロームブロックが含まれ、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】残存する壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

【出土遺物】3層から肥前産の皿、大堀相馬産の小椀が出土した。

【小結】出土遺物から18世紀代のものと考えられる。

第3節 用途不明遺構

第5号用途不明遺構（図47）

【位置と確認】CU-32グリッドを中心とし、第VI層で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【平面形・規模】平面形は楕円形もしくは長方形を呈すると考えられるが、東側が調査区域外に延びるため不明である。規模は、長軸561cm、残存短軸145cm、深さ56cmである。

【堆積土】堆積土は22層に分層した。層中にローム粒、灰白色浮石及び炭化物を含み、人為堆積と考えられる。また、2・3・15層はかたく締まっている。19~22層はピット1の堆積土である。

【壁・底面】残存する壁は緩やかに立ち上がる。底面は北側の壁際が緩やかにくぼんでいる。

【出土遺物】堆積土中から古銭、瀬戸产の大椀が出土した。古銭はいずれも新寛永である。

【小結】平面形、壁の立ち上がり、堆積土の状況など他の遺構との相違点が見られることから用途不明遺構とした。また年代は、出土遺物から19世紀代のものと考えられる。

(葛城)

第4節 沢・溝跡

沢1、沢2はA・B区から検出された。はじめにB区で検出された沢はその平面形から、下流側は調査区域外へ、上流側は調査区西側のBK-29グリッド付近へ向かって延びると予想された。その後の調査で、BE-31グリッドから沢頭が、BK-29グリッド付近から沢の上流部が、またBS-31グリッド付近から沢の一部と考えられる落ち込みがそれぞれ確認された。沢とその上流部は、区域が離れていたため、下流を沢、上流部を沢2と呼称して調査を行ったが、整理作業時に沢を沢1に変更した。これ以外の区域については調査対象区域から外れていたため全体形を明らかにすることはできなかった。しかし、その検出状況から、沢頭から沢2そして沢1へと続く1条の沢であったと考えられる。

第16号溝跡は、沢1と一部重複して検出された。遺物の出土状況、堆積土の状況、そして第1号木組遺構の年代測定結果などから、沢1の埋没後に構築されたものであると考えられる。

沢1、沢2は、出土遺物から縄文時代～近世以降まで断続的に利用されたと考えられる。第16号溝跡は、出土遺物などから中世末～近世初頭には機能していたと考えられる。以下、沢1、沢2、第16号溝跡について述べる。なお、沢1から検出された第3号木組遺構は縄文時代の遺構であるため第3章第4節で記載した。

沢1（図49～52）

【位置・確認】 CB～L-26～30グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。検出面は主に第IX層である。また、CC-29グリッド及びCI-27グリッド付近からは、現代のものと考えられる用途不明の掘り込みが検出された。

【重複】 時期不明の第15・18号溝跡及び後述する中・近世の第16号溝跡と重複し、沢1が古い。

【平面形・規模】 平面形は、上流側のCE-29グリッド付近でやや屈曲するが、北西～南東方向にはほぼ直線的に延びる。規模は、長さ37.4m、幅4～7.7m、最大深114cmである。なお、沢頭から沢1東端までの高低差は約17mである。

【堆積土】 堆積土は、ABラインは56層、CDラインは15層、EFラインは32層にそれぞれ分層した。ABラインの46～56層が沢1の堆積土と考えられる。1～5層は近世以降の堆積土、11～13・14層は平面では確認できなかったが近世以降の溝跡と考えられる。6～10・15～45層は後述する第16号溝跡の堆積土と考えられる。CDラインの2・9～13・15層は別構造の堆積土と考えられる。しかし平面的な広がりを確認できなかったため、ここでは付近の第18号溝跡との関連を指摘するに留める。また、沢の最下層であるABラインの53層、CDラインの8層、EFラインの24層は、いずれも疊層である。この疊層からは、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器が出土し、これ以外の時期の遺物は出土しなかった。また、堆積土中には砂及び砂質土層がレンズ状に堆積している箇所が複数見られる。これらは総じて自然堆積であり、埋没過程において小規模な水の流れが数時期にわたって存在したと考えられる。

【壁・底面】 壁は屈曲部までは緩やかに外傾しながら立ち上がり、屈曲部から開口部まではさらに大きく外傾し、テラス状の平場を有する箇所も見られる。しかし水流の影響や、その後の第16号溝跡などの構築によって壁の形状は一様ではない。底面は下流である南東側に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は1.2mである。

【出土遺物】 底面及び堆積土中から、縄文土器、石器、土師器、鉄製品、木製品、古銭、煙管、陶器が出土した。これらの詳細については後述するが、CC～F-29・30グリッドの範囲で、縄文時代に堆積し

たと考えられる礫層を除く底面及び堆積土中から出土したものの大半は、沢1を掘り込んで構築された第16号溝跡に伴うものと考えられる。

〔小結〕沢1は出土遺物及び木組造構の年代から、縄文時代中期後葉にはすでに利用されており、後期前葉までには最下層である礫層が堆積したと考えられる。その後、第16号溝跡との重複関係から、中世末～近世初頭まではほぼ埋没したと考えられる。ただし、第16号溝跡と重複しない下流側の堆積土上層及び検出面からは近世・近代の陶磁器が出土しており、完全に埋没したのは近代以降と考えられる。また、砂層がレンズ状に複数堆積することから、埋没過程において小規模な水の流れが数時期にわたって存在していたと考えられる。近世以降は第16号溝跡の他にも小規模な溝跡などが沢1を掘り込んで構築されたようであるが、土層断面のみでの確認であり平面形など詳細は不明である。

沢2（図54）

〔位置と確認〕BH～M-29～31グリッドに位置する。第VI層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕第1号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕天満宮跡地の基礎及び地下水のくみ上げ施設の影響で全体形は不明である。確認できた規模は、長さ22.1m、幅2.2～4.7m、最大深224cmである。さらに上流側のBE-31グリッド付近からは沢頭が検出された。沢頭は直径7.8mの半円状を呈し、確認できた深さは128cmである。下流側は削平によって失われている。また、BS-31グリッド付近からも長さ4.9m、幅3.9mにわたって沢の一部と考えられる落ち込みが検出された。

〔堆積土〕9層に分層した。黒色土及び黒褐色土を主体とする。壁際に堆積する3・4層を除き自然堆積と考えられる。9層は礫層である。最下層に礫層が堆積する状況は沢1と類似する。

〔壁・底面〕壁は外傾しながら立ち上がる。しかし、壁面は水流などの影響によって一様ではない。底面は下流である東側に向かって傾斜し、その高低差は2.9mである。

〔出土遺物〕底面及び堆積土中から縄文土器、石器、弥生土器、土師器、木製品が出土した。また、沢頭からは縄文土器が出土している。詳細については後述する。

〔小結〕沢2の全体形は不明であるが、沢1との連続性が伺えることから、両者は同一の沢と考えられる。また、堆積土上層から近代の陶磁器片が出土していることから、沢2が完全に埋没したのは近代以降と考えられる。

第16号溝跡（図49～53）

〔位置と確認〕CB～J-26～30グリッドに位置し、第IX層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕沢1と重複し、本造構が新しい。

〔平面形・規模〕調査段階では、重複関係が確認できた第2号木組造構から東側を第16号溝跡として調査を行った。しかし整理段階で、遺物の出土状況、沢1の堆積土の状況、第1号木組造構の検出状況とその年代測定結果などを検討した結果、第1号木組造構の検出されたCC-30グリッドからB区東端のCK-26グリッドまでを本造構の範囲とした。平面形は、北西～南東方向に緩やかなS字状を呈する。確認できた規模は、長さ34m、幅1.1～5.4m、最大深76cmである。また、幅は上流側で広く、下流側では極端に狭くなる。

〔堆積土〕ABラインでは、6～10・15～45層が本造構の堆積土と考えられる。黒色土及び黒褐色土を主体とし、総じて自然堆積と考えられる。また、ABラインの9・10・16～19・24・27・29～34・36・38・40～43・45層、CDラインの6a・9・10・12・14・16・17層は砂及び砂質土層であり、埋没過程で小規模な水の流れが数時期にわたつ

て存在したと考えられる。CDラインの19～21層中には杭列に伴う木材が多量に含まれる。

【壁・底面】下流側の幅の狭い部分の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がるが、上流側では一様でなく、一部にテラス状の平場を持つ。底面は全体的に下流である南東側に向かって傾斜しているが、第2号木組造構から杭列周辺で大きく窪み、そこから下流にかけては浅くなる。またCH-26グリッド付近の底面からは、自然礫がまとまって出土した。

【その他の施設】底面から第1・2号木組造構と杭列が検出された。

第1号木組造構はC C-30グリッドを中心に位置する。調査時は沢1に伴うものと考えたが、整理時の検討の結果、本造構に伴うものとした。本造構は直径5cm程度の杭を列状に複数打ち込み、そこに横木を長さ約280cmにわたって配置しており、周辺からは自然礫も出土している。なお、本造構出土木製品を用いた放射性炭素年代測定の結果、 170 ± 20 yr BPとの値が得られている。また同試料を用いて樹種同定も行っており、マツ属との結果が得られている。詳細は第8章を参照されたい。

第2号木組造構はC F-29グリッドを中心に位置する。第16号溝跡を精査中に、杭と横木と考えられる木材を確認した。直径5cm程度の杭が、北東-南西方向に約290cmにわたって打ち込まれている。これに横木が渡されるが、釘や紐などで固定した痕跡は確認できなかった。また、打ち込まれた杭は下流側の南東方向に傾いているものが多い。この他に本造構の周辺からは、木製品、板材などの加工木、自然木、自然礫などがまとまって出土した。

杭列は、C F-G-28・29グリッドに位置する。第2号木組造構から連続するように延びる杭列と横木と考えられる木材を確認した。杭は直径5cm程度で、南東-北西方向に12.1mにわたって打ち込まれている。杭列は、比較的遺存状態が良く南西側に大きく傾くもの(杭列A)と、根元付近のみ残存し傾きが不明なもの(杭列B)に分けられる。調査時にはこれらを単に遺存状態の差と考え、同一時期のものとした。しかし杭列Aは溝跡に対して内側、杭列Bは外側に分布している。また、杭列Aの杭の傾きは土圧によるものと考えられる。これらのことから、はじめに杭列Bが構築され、その後内側に杭列Aが構築された可能性が考えられる。しかし、このことを証明する十分な調査ができなかつたため、ここでは可能性の指摘に留めておく。また、杭列Aの杭を用いた放射性炭素年代測定の結果、 330 ± 30 yr BPとの値が得られている。また同試料を用いて樹種同定も行っており、マツ属との結果が得られている。詳細は第8章を参照されたい。

【出土遺物】底面及び堆積土中から縄文土器、石器、石製品、木製品、古銭、陶磁器が出土した。詳細については後述する。

【小結】本造構は、すでに埋没していた沢1を、何らかの理由で再度開削する必要が生じて構築されたものと考えられる。第1号木組造構及び杭列は、その検出位置と構造から沢1の堆積土の崩落を防ぐための土留めの可能性が考えられる。杭列と直行するように分布する第2号木組造構は構造が杭列と類似する。しかしその位置関係から、沢1の堆積土の崩落を防ぐためのものとは考えにくく、水流の調節及び漂流物の遮断という一種の水利施設の可能性が考えられる。本造構が構築された年代は、出土遺物及び杭列の杭を用いた年代測定結果から16世紀末葉から17世紀前葉と考えられる。また、第1号木組造構の年代測定結果から、18世紀後半から19世紀に至るまで継続して機能していた可能性が高い。(葛城)

出土遺物（図55～65）

沢1、沢2、第16号溝跡からは多量の遺物が出土した。調査時には、第16号溝跡を第2号木組造構か

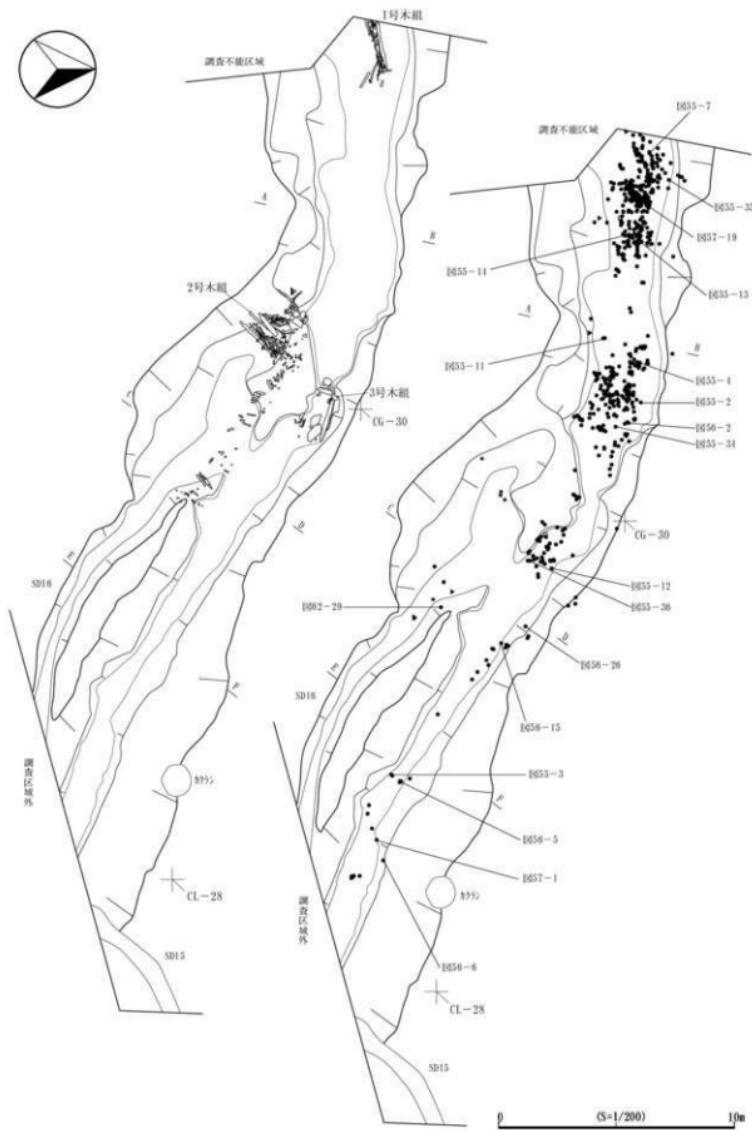


図49 沢・溝跡（1）

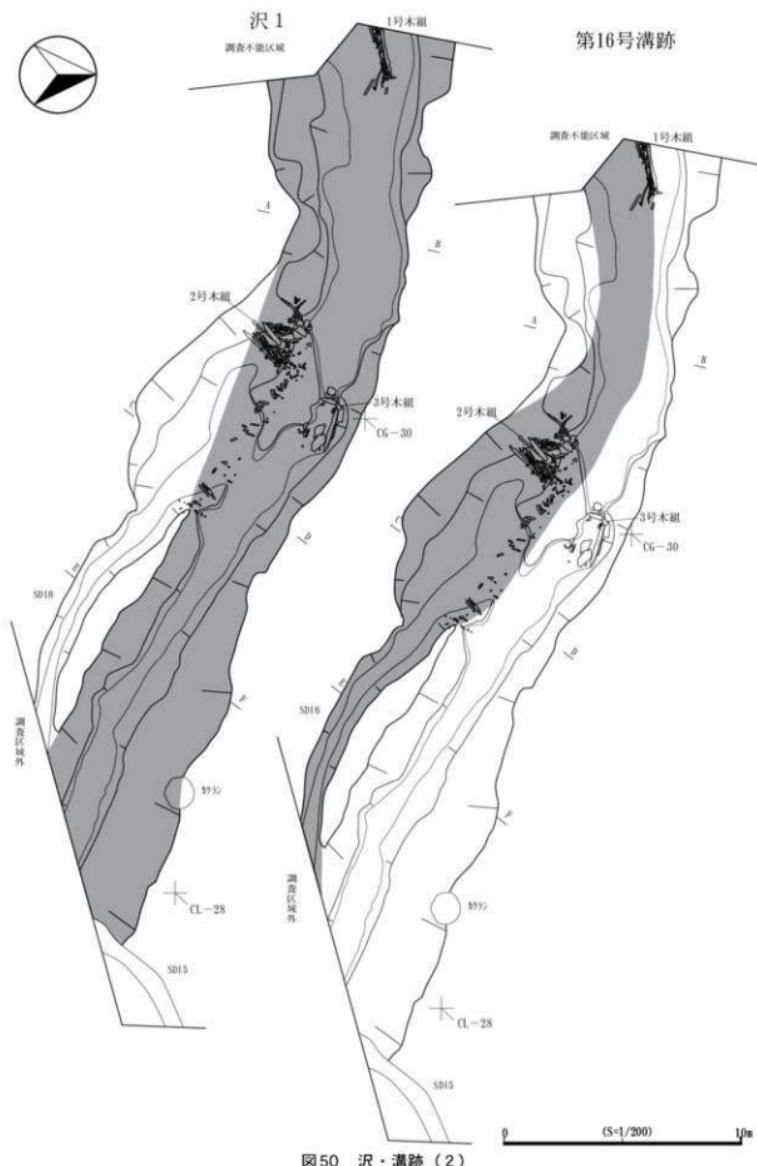
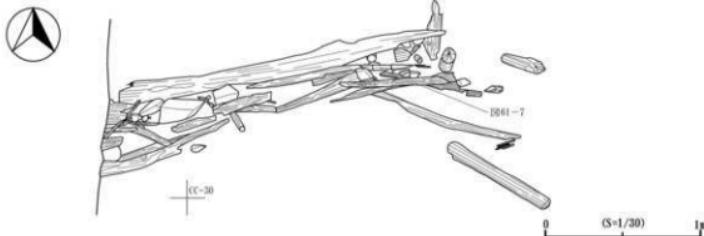


図50 澤・溝跡（2）

211(注)-F24)			
212層 101R2/1 黒褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第20層 101R2/2 黒褐色砂	織縫混入。
213層 101R2/1 黒褐色土	灰褐色浮石(Φ1~3mm)少量。織縫混入。	第21層 101R2/3 黑褐色砂	織縫混入。
214層 101R2/2 黑褐色土	灰褐色沙(Φ1~3mm)少量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。 やや強。	第22層 101R2/4 黑褐色砂	織縫混入。
214層 101R2/1 黑褐色土	灰褐色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第23層 101R2/5 黑褐色砂	織縫混入。
215層 101R2/1 黑褐色土	明黄色色砂(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。	第24層 101R2/6 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。
216層 101R2/2 黑褐色土	黄褐色沙(Φ1~3mm)少量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。	第25層 101R2/7 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。
217層 101R2/2 黑褐色砂	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第26層 101R2/8 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
218層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第27層 101R2/9 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。
219層 101R2/1 黑褐色土	明黄色色砂(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。	第28層 101R2/10 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。
219層 101R2/2 黑褐色砂	灰褐色沙(Φ1~3mm)少量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。 しまり強。	第29層 101R2/11 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。しまりやや強。
219層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。しまりやや強。	第30層 101R2/12 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/2 黑褐色砂	灰褐色沙(Φ1~3mm)微量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。 しまり強。	第31層 101R2/13 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第32層 101R2/14 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/2 黑褐色砂	灰褐色沙(Φ1~3mm)微量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。 しまり強。	第33層 101R2/15 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第34層 101R2/16 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/2 黑褐色砂	灰褐色沙(Φ1~3mm)微量。灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。 しまり強。	第35層 101R2/17 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。しまり強。	第36層 101R2/18 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。
219層 101R2/1 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。	第37層 101R2/19 黑褐色土	灰白色浮石(Φ1~3mm)微量。小織縫混入。

第1号木組遺構



第2号木組遺構

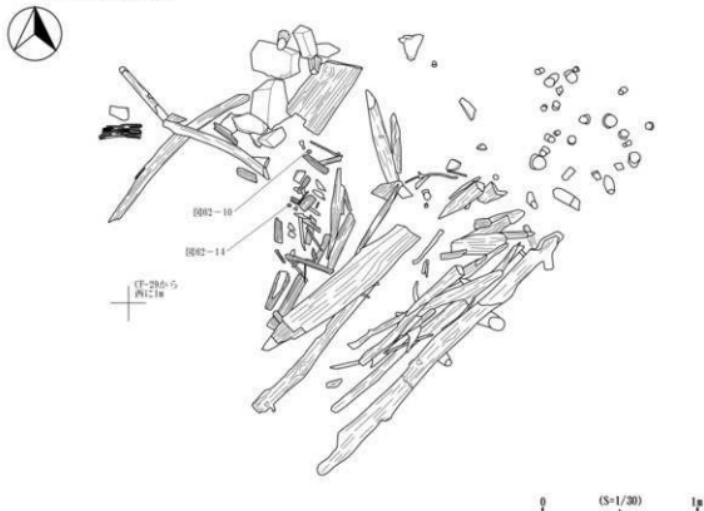


図52 第1・2号木組遺構

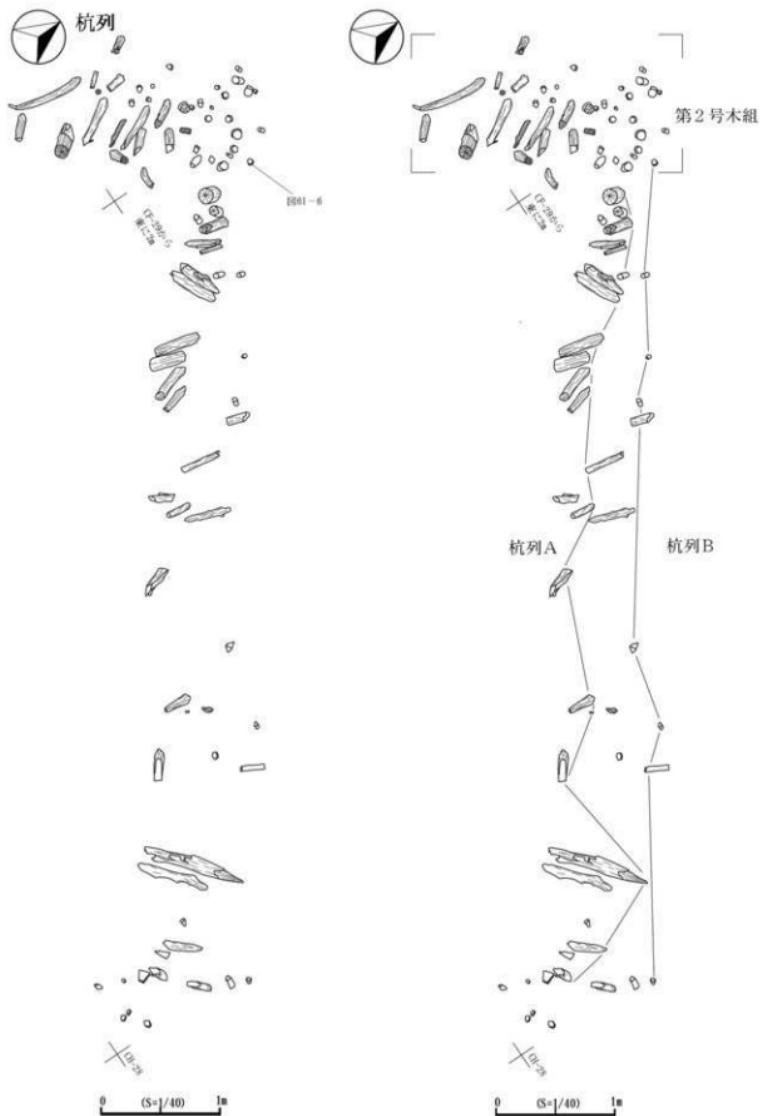


図53 杭列

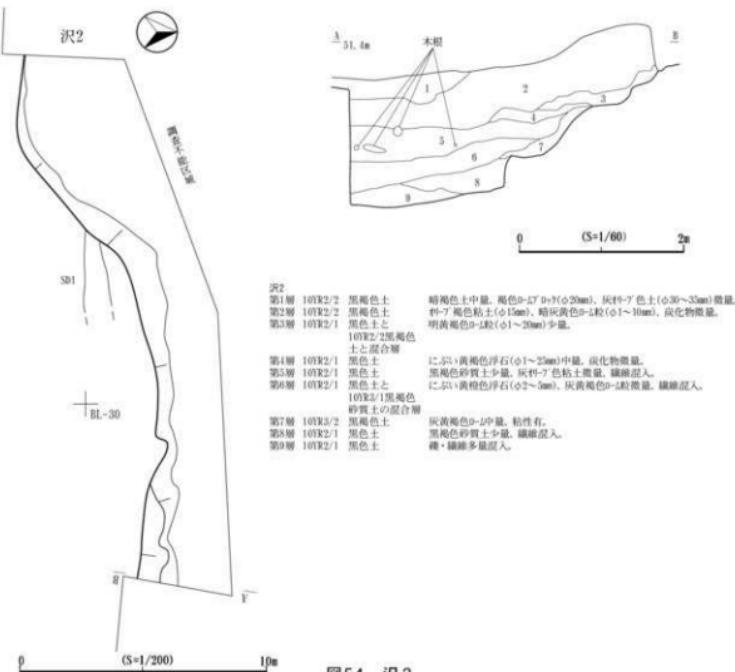


図54 沢2

ら東側と判断したため、本来第16号溝跡出土遺物として取り上げるべき遺物を、沢1出土遺物としたものが相当数存在する。ここでは、沢1、第16号溝跡出土遺物を一括して掲載し、出土位置及び層位から第16号溝跡に帰属する可能性のあるものはその旨記載する。

縄文土器（図55～57-1～32・図64・図65-1～8）

沢1・沢2・沢頭からは約47kgの縄文土器が出土し、内134点を掲載した。その大半は小破片で、磨滅しているものが多い。

縄文土器は、後述する陶磁器などとともに沢の堆積土のはば全層から出土した。縄文時代の堆積土と考えられる沢最下層の礫層からは、縄文時代中期後葉から後期初頭に相当する土器が出土している。その分布をみると、第1号木組造構周辺のC C-30グリッドや第2号木組造構の西側であるC E-29グリッド、第3号木組造構の東側のC G-29グリッド付近からまとまって出土していることがわかる(図49)。沢全体から出土した縄文土器は、中期初頭～中葉のものもわずかにみられるが、中期後葉～後期初頭のものが主体となっている。次いで後期前葉のものが多い。礫層から出土した土器の時期から、縄文時代中期後葉にはすでに沢として機能していたと考えられる。また、少量だが後期前葉以降のものも出土している。沢1が検出されたB区では、後世の削平によって縄文時代の造構がほとんど検出されなかつたが、沢の出土遺物から考えると、調査区東側であるB～D区も縄文時代の生活域であつた。

た可能性が高い。なお、第16号溝跡からもわずかに土器の小破片が出土しているが、溝跡の構築年代から、これらは後世の流れ込みであると考えられるため、ここでは記載しない。土器は、文様や形態から縄文時代中期のものと後期のものに分類した。上記以外で時期の判断が困難なものは縄文時代中期～後期のものとして一括して記述する。

・縄文時代中期の土器

中期初頭～中葉のものがわずかにみられるが、大半は中期後葉～末葉のものである。器種は、そのほとんどが深鉢の破片である。図55-1～5は初頭～中葉の破片である。口縁が波状を呈すると考えられ、貼り付けによる隆帯が施される。図55-1は突起部がやや肥厚する。図55-4・5は口縁部・胴部破片である。貼り付けによる隆帯が施され、半截竹管などの棒状工具で刺突文が施される。地文は、図55-1～3・5には隆帯上及び隆帯・刺突文間に無節Lまたは単節LRの側圧が施される。土器の胎土には纖維が混入している。時期は図55-1～3が円筒上層a式、図55-4・5が円筒上層c式に相当すると考えられる。

図55-6・7・11、図56-2、図64-2・6・7・9は中期後葉～末葉の破片である。図55-7や図64-9のように口縁部が無地文となり、内反しながら立ち上がるに考えられるものや、図55-6・11や図64-2のように隆帯や彫り込みによって梢円状・満巻状の文様が施されるもの、図64-6・7のように磨消縄文によって文様が施されるものがある。図64-6には縄文部に沿うように磨消部に円形の刺突文が施される。地文は単節LR・RLが縦方向に回転押圧され斜走縄文となるものが多い。時期は最花式～大木10式並行に相当すると考えられる。

・縄文時代後期の土器

後期初頭～前葉のものが大半を占める。多くが深鉢の口縁部及び胴部の破片である。縄文時代後期初頭のものについては一括して取り扱った。図55-8～10・13・14、図64-3・8・10～12・17のように刺突文・隆帯文・ボタン状突起が施されるものや、図55-15～24・38、図64-18・21のように磨消縄文によってコ字状・クランク状などの方形文が施されるもの、図55-25～33・34・37、図56-1・3、図64-19のように微隆帯と沈線で装飾が施される波状口縁を持ち、磨消縄文によって入組文が施されるものがある。地文は単節LRが主体となり、縦・横方向の回転によって斜走縄文となる。中には図56-26のように隆帯と沈線によって文様が施され、頸部に橋状突起をもつ壺の破片もある。

前葉のものは深鉢・鉢・壺の破片がみられる。図56-14～24、図64-16のように、口縁部が波状口縁または平縁となり、口縁部～胴部にかけて微隆帯と沈線によって入組波状文が施される。地文は、ナデやミガキによって無地文となる。図64-14のように無地文となり幅が狭い長梢円文が連続して施される深鉢や、図56-27～29のように、ヒゴ切断痕がみられる切断壺と考えられるものもある。時期は十腰内I式に相当すると考えられる。

・縄文時代中期～後期の土器

無地文または縄文地で時期の判断が困難なものを一括した。深鉢の口縁部・胴部・底部破片が多数を占める。口縁部の形態をみると、図57-1・2などのように胴部付近から口縁部にかけて内反しながら立ち上がるるものや、図64-15などのように緩やかに外傾するもの、図56-8・11などのように口縁部付近で外側に屈曲するものがみられる。緩やかに外傾するものの中には図56-6・7のように口縁部が折り返され、断面形が段状に張り出すものもある。地文は単節LRや無節しが縦方向の回転によっ

て斜走縄文となるもの、無節Rの短軸絡条体第1類や単節LRや無節Rの短軸絡条体第5類が縦方向に施されるものがみられる。口縁部付近で外側に屈曲するものにはその屈曲部に単節LRの側面押圧が施される。図57-28のように底部に網代痕がみられるものもある。胎土は輪積痕や破損面の状況から外傾接合となるものが多い。時期は縄文時代中期後葉～後期に相当すると考えられる。図56-30は壺の口縁部～胴部の破片である。無地文となりナデ調整が施される。時期は縄文時代後期のものと考えられる。(澤田)

石器(図57-33～37、図58-1・2、図65-11・12・14)

図57-33～36は沢1から、37は沢2から出土した。33は平基、34は凸基の石鏃である。35～37はスクレイバー類である。図58-1は大型の石皿、2は敲石である。図65-11は2面に敲打痕を持つ敲石である。12は磨石で先端部に機能面を持つ。14は3面を砥面とする砥石である。

土製品(図58-3・4、図65-13)

3点出土した。図58-3・4は円盤状土製品である。いずれも土器の底部を再加工している。図65-13は外底面に3条の沈線文が同心円状に施される。スタンプ形土製品としたが、ミニチュア土器の可能性も考えられる。

石製品(図58-5～8)

4点出土した。図58-5～7は第16号溝跡、8は沢1から出土した。いずれも両面の縁辺を打ち欠いている。

(葛城)

弥生土器(図65-9・10)

沢2中流部であるBK-J-31グリッドの底面及び堆積土から少量出土した。時期の判断が可能な破片2点を掲載した。図65-9・10は丸みを帯びて外傾する甕の破片であると考えられる。装飾・文様をみると、口唇部に縄文による回転押圧が施され、内外面には交互に刻み目列が巡る。口縁部外面には、単節RLによって縦走縄文が施され、並行沈線や連弧状文が施される。これらは同一個体の可能性が高く、同様の特徴をもつものが造構外からも出土している(図33-14)。時期は弥生時代中期後葉～後期前葉である念仮間式以降に相当すると考えられる。

(澤田)

土師器(図58-9～17)

111点、2938.1g出土した。大半が破片資料である。これらのほとんどが沢1のCH-28より東側から出土していることから、沢1の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。9・10・13は堆積土上層から出土した、口縁部が内湾する土師器壺である。いずれも内面には黒色処理が施される。9は外外面に段差を有する。調整は外外面ミガキであるが、外面にはミガキの前にハケメが施される。10・13は同一個体である。外面には二段の段差を有し、内面にも段差を有する。また、底面から胴部下半にかけて赤色顔料が帶状に付着している。11・12は口縁部が内湾する土師器鉢である。11は胴部下半に段を有し、内面には黒色処理が施される。12は口縁部にナデ、胴部下半にはヘラケズリが施されるが、胴部は磨滅している。15も外面が磨滅しているが、鉢と考えられる。14・16・17は土師器甕である。14は口縁部が外反し、歪んでいる。外面は口縁部にナデ、胴部にミガキが施され、頭部には弱い段を有する。内面にはハケメの後ミガキが施される。16・17は甕の底部破片である。17の外底面には木葉痕が見られる。9～11・13・14はその特徴から宇部則保氏の言う第2段階に相当し(宇部2002)、7世紀中葉のものと考えられる。その他については詳細な年代は不明であるが、器形及び調整からおおよそ8～9世紀代のものと考えられる。

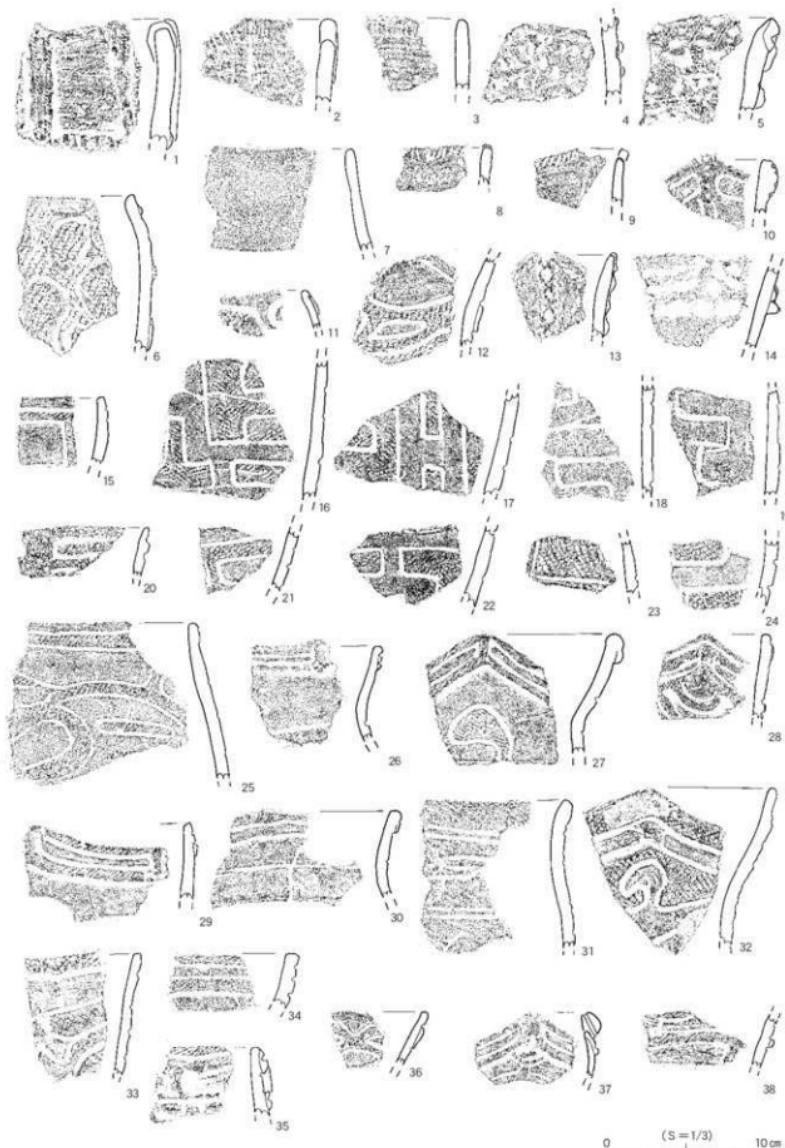


図55 第16号溝跡・沢1出土遺物（1）

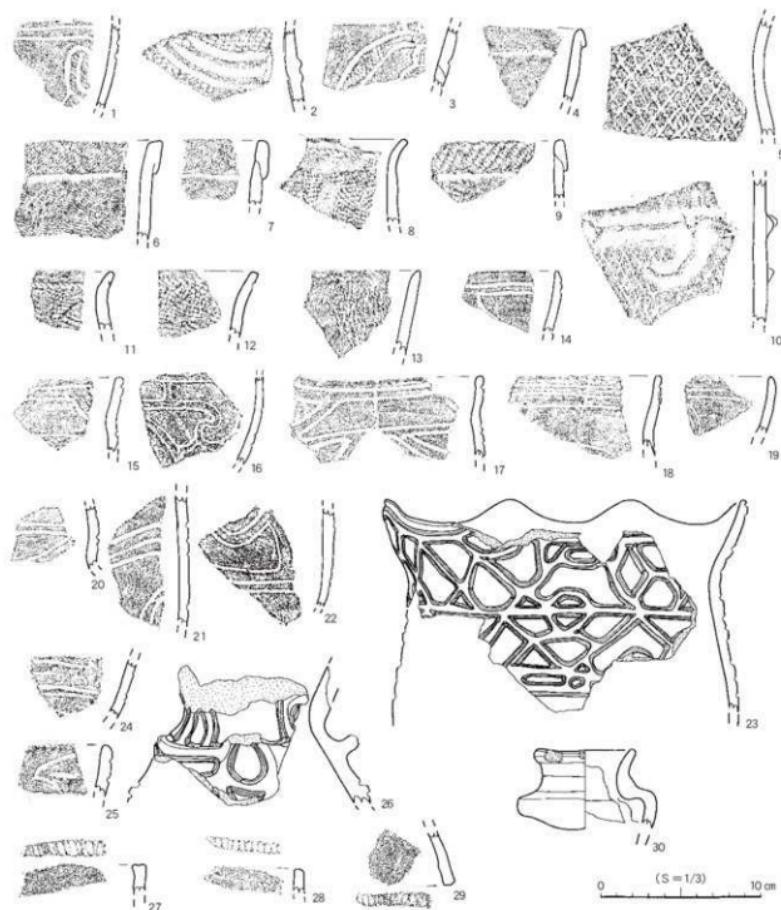


図56 第16号溝跡・沢1出土遺物（2）

鉄製品（図58～18・19）

2点図示した。図58～18は刀子である。19は胴部が棒状を呈し、先端部が強く屈曲する。いずれも沢1の疊層上面から出土した。出土位置から第16号溝跡に伴う可能性も考えられる。

木製品（図59～61）

木製品は、C F・G-28・29グリッドからまとまって出土した。沢1出土としたものもあるが、その出土状況から第16号溝跡に伴う可能性が高い。大半が堆積土中からの出土であることから、第16号溝跡の埋没過程で廃棄されたと考えられる。これらの詳細な年代は不明であるが、沢1出土陶磁器の

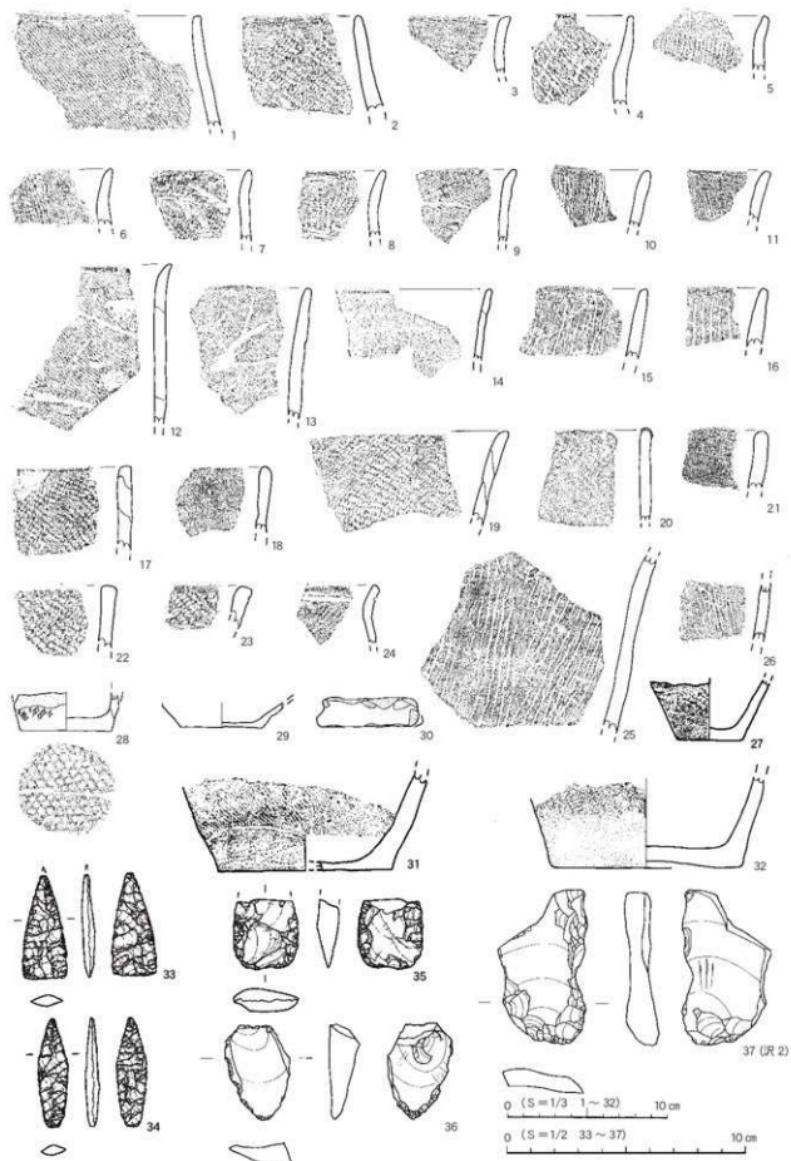


図57 第16号溝跡・沢1出土遺物（3）

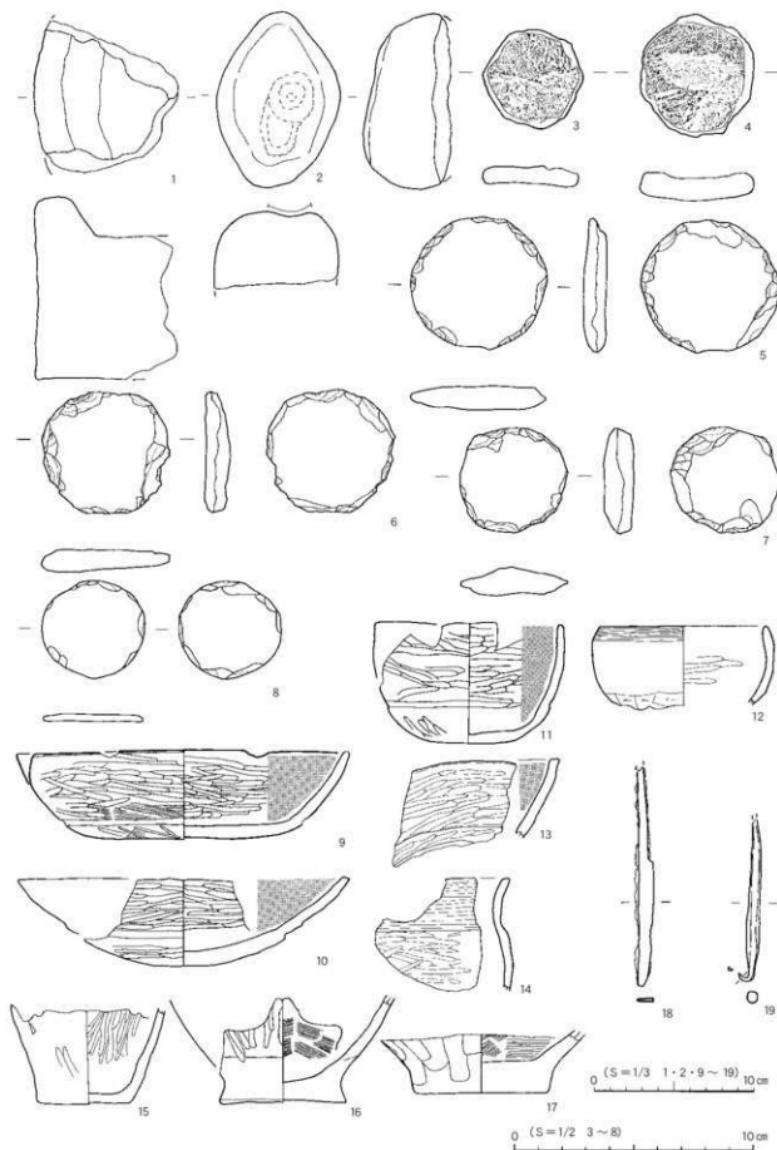


図58 第16号溝跡・沢1出土遺物(4)

年代から17世紀後葉から19世紀前葉にかけてのものと考えられる。以下、器種ごとに述べる。

挽物（図59-1～9）全て漆器椀であるが、7～9は蓋の可能性も考えられる。器形では、高台が高いもの（2～6）、低いもの（8・9）、高台のないもの（1・7）がある。また、6・7には外面に文様が施され、7～9には底面にも文様が施される。2は下地に漆が用いられている。樹種は全てブナ属である。なお、2・3・6・8・9は塗膜分析を行った。詳細は第8章を参照されたい。

底板（図59-10～12）3点出土した。直径が10cm程度のもの（10・11）と20cm程度のもの（12）がある。樹種はいずれもアスナロ属である。

曲物（図59-13～15）3点出土した。13は中央に木釘穴と考えられる穿孔が施される。樹種はいずれもアスナロ属である。

下駄（図60-1～4）4点出土した。1・2は連齒下駄、3・4は露卵の差歛下駄である。全て後緒穴が後歛の内側に施される。1は台の後歛付近に段差が見られる。後緒穴は台側縁から斜位に穿たれる。3は台後部が欠損するものの、後歛が伴っている。4は台前部が欠損する。樹種は1と3の歯がクリ、2がマツ属、4がケヤキである。

下駄歯（図60-5・6）2点出土した。差歛下駄歯と考えられる。樹種はいずれもクリである。

把手（図60-7）1点出土した。両端が一部欠損する。樹種はアスナロ属である。

鍼（図60-8）1点出土した。鍼の頭部と考えられる。頭部先端を扁平に整形している。

櫛（図60-9）1点出土した。材質はイヌノキである。イヌノキは関東以西に分布し、東北地方には存在しないことから、他地域からの搬入品と考えられる。

箸（図60-10）1点出土した。両端を細く整形し、棒状を呈することから箸とした。樹種はアスナロ属である。

刀形（図60-11）1点出土した。刀身部分は17.4cmで断面は三角形状に整形されるが、刃部はそれほど銳利ではない。柄は柄頭から刀身に向けて細く整形されている。形状から刀形としたが、玩具の可能性も考えられる。樹種はコナラ属である。

木槌（図61-1）1点出土した。長さ64cmの大型のものである。樹種は頭部がミズキ属、柄がカエデ属である。

杭（図61-6・7）第1・2号木組造構及び第16号溝跡に伴う杭列からは多数の杭が出土した。この内2点を樹種同定及び年代測定用のサンプルとして取り上げ図示した。6は第16号溝跡の杭列のものである。直径4.8cm、長さ43.1cmで、先端を削り出している。樹種はマツ属である。7は第1号木組造構出土の杭である。直径4.7cm、長さ44.6cmである。樹種はマツ属である。6・7は年代測定も実施した。詳細は第8章を参照されたい。

用途不明（図61-2～5・8・9）用途不明なものを一括した。2・3・9は有孔のものである。2は2ヶ所に穿孔が施される。曲物の可能性も考えられる。3は3ヶ所に穿孔が施されるが、この内上下2ヶ所は盲孔である。5は沢2から出土した。板状を呈し頭部付近には抉りが見られる。先端部は尖るが磨滅している。9は楕円形で表裏とも波状を呈する。中央には穿孔が施され木釘が残存する。

（葛城）

古錢（図62-1～19）

第16号溝跡・沢1・沢2から近・現代のものも含めて25点出土した。錢種は、洪武通寶、永樂通寶、

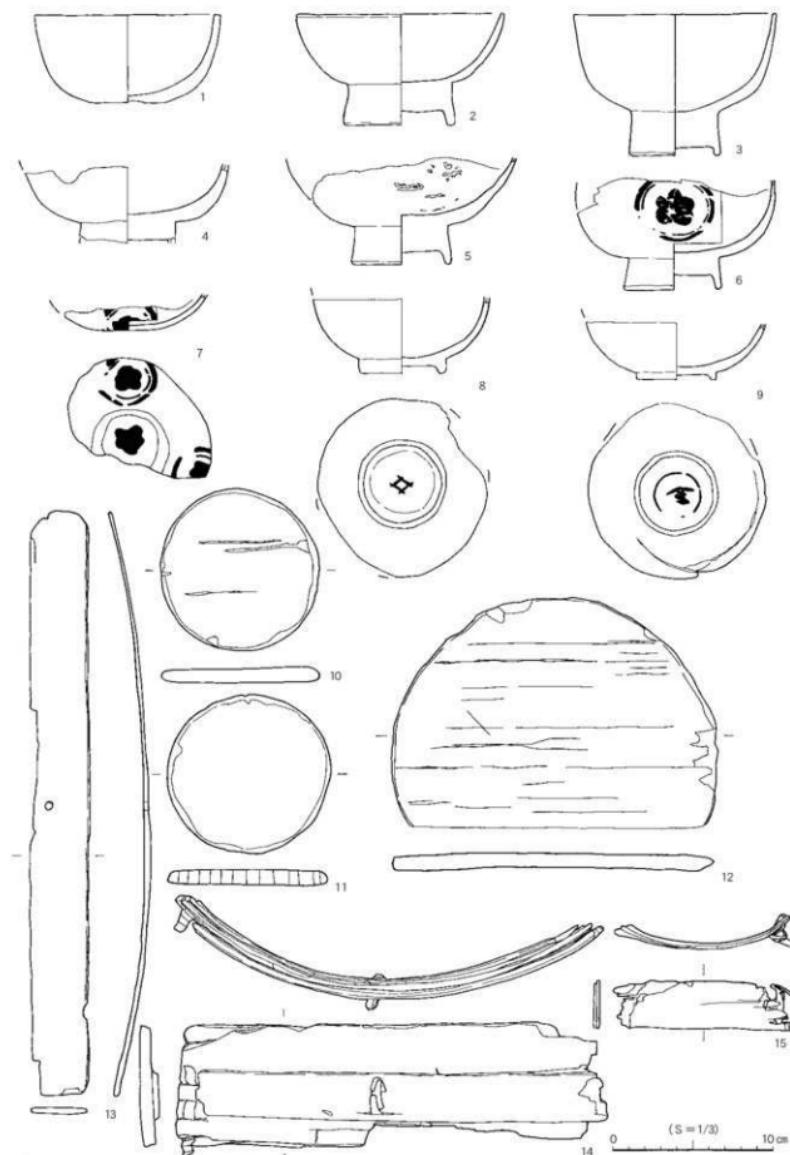


図59 第15号溝跡・沢1出土遺物（5）

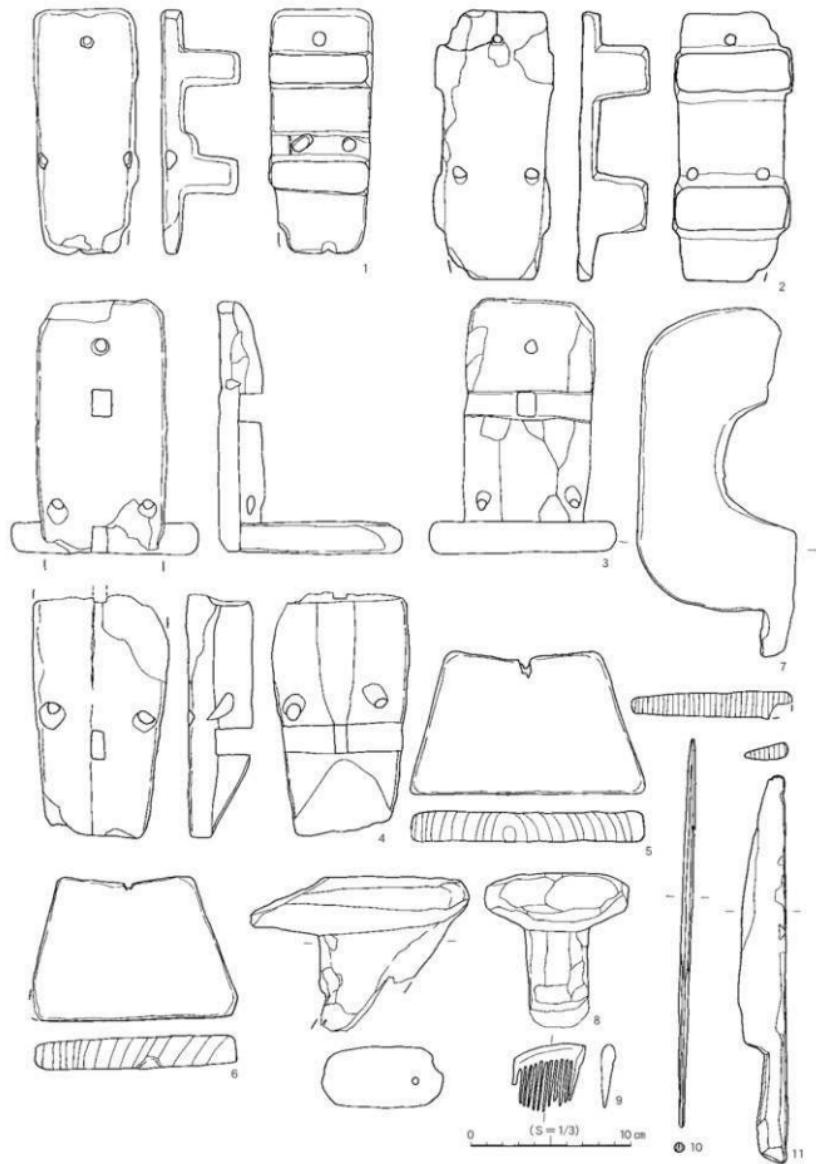


図60 第16号溝跡・沢1出土遺物（6）

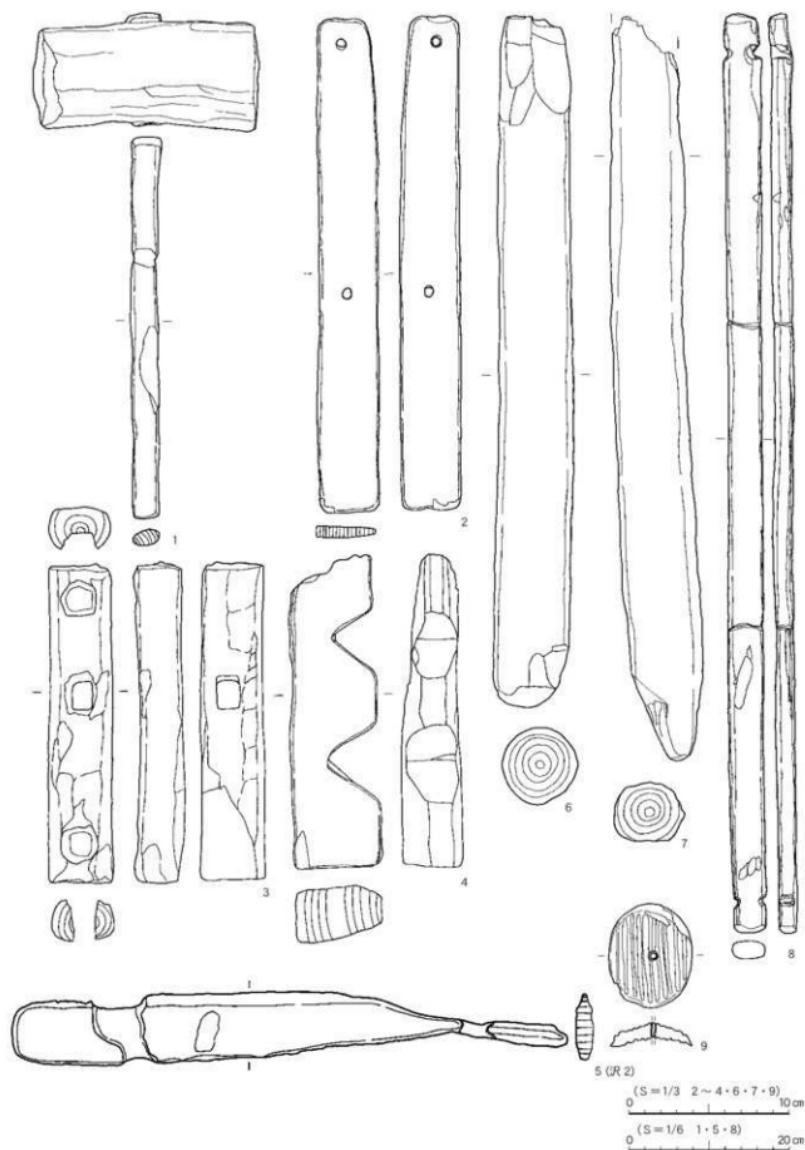


図61 第16号溝跡・沢1出土遺物（7）

古寛永通寶、新寛永通寶、大正以降のもの、錢種不明のものである。内19点を掲載した。第16号溝跡や共伴する第2号木組造構からは、底面及び底面直上より洪武通寶・永樂通寶・古寛永通寶が出土している。図62-5は歪んでおり、廃棄錢の可能性がある。出土状況は、溝幅が広く膨らむC G - 27グリッド付近にまとまってみられる。沢1の堆積土からは、古寛永通寶が主体となって出土している。洪武通寶や新寛永通寶もみられるが、それらは検出面・搅乱層から出土しているため、後世の流れ込みである可能性が高い。分布が沢1の上流部にのみみられ、推定される第16号溝跡の流路と概ね重なることから、調査時に沢1出土錢貨としたものは、第16号溝跡に伴う可能性が高い。また、掲載はしないが、沢2 B J - 31グリッド付近の堆積土より大正時代以降の一銭及び十銭が4点出土した。

煙管（図62-20～22）

沢1に伴う第1号木組造構付近の底面・底面直上及び第2号木組造構付近堆積土から3点出土した。すべて真鍮製で20・21は雁首、22は吸い口である。形態から21は17世紀、20は18世紀のものと考えられる。22は潰れており、詳細な時期は不明である。

陶磁器（図62-23～35・図63-1～8・図66-21～29・図67）

近・現代も含め約120点出土した。本遺跡における陶磁器の鑑定は、弘前大学の関根達人氏の協力を得た。近代以降のものと考えられる陶磁器については年代や産地等の分類は行わず、掲載しない。中・近世のものは84点で、内22点を掲載した。第16号溝跡と沢1出土陶磁器を併せて掲載する。沢1及び第16号溝跡では16世紀～近代まで時期幅がみられる。沢2出土陶磁器については19世紀中葉の瀬戸産の磁器の小破片がわずかにみられるが、そのほとんどが近代以降のものであった。以下時期ごとに概要を述べる。

16世紀～17世紀前葉のものは、沢出土陶磁器の中でもその出土量は少ない。産地ごとにみると、中国産磁器や国産の肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産、信楽焼、越前産陶器が出土している。中国産の磁器には図62-23のように見込みに溝字文が描かれるものや、図62-24・陶2・4・7のように竜文が描かれる染付小皿がみられる。図62-24と陶4、陶2と7はそれぞれ同一個体である可能性が高く、図62-24・陶4には高台に漆縁がみられる。国産のものは図63-8のような瀬戸・美濃産の肩衝茶入、図62-28のような大窯I期に相当する天目碗や図62-25のような大窯IV期に相当する折線小皿が見られる。中には図63-4・5のような信楽焼の茶壺と考えられるものも出土している。その他図63-1のような越前産、図63-2のような肥前産の擂鉢の破片も出土している。16世紀～17世紀前葉の陶磁器には、小皿・中碗などの食膳具や擂鉢といった調理具、茶入や天目碗、茶壺といった茶の湯との関連が伺えるものが出土している。

近世の陶磁器は、沢出土陶磁器の中で最も多く出土している。17世紀後葉～18世紀前葉と18世紀後葉～19世紀前葉にややまとまりをもって出土している。産地を見ると、瀬戸産の陶磁器がわずかにみられるものの、肥前産の染付がその大半を占める。図62-27は口紅が施される肥前産の中皿である。牡丹唐草文が描かれ、高台内には「大明年製」の銘が描かれ、4力所のハリ支え痕が見られる。その他肥前産染付には、図62-31のように草花文が描かれるものや図62-33の様に網目文が描かれるもの、陶9の様にコンニャク印判によって井桁文・葛の葉文を描き、高台内に「満福」銘がみられるものなどがある。その他、図62-30のような呂器手と呼ばれる肥前産陶器の大碗や、図62-35や陶14のように鉄絵が描かれる瀬戸・美濃産陶器の大鉢、図63-3のように泉州堺で作られたと考え

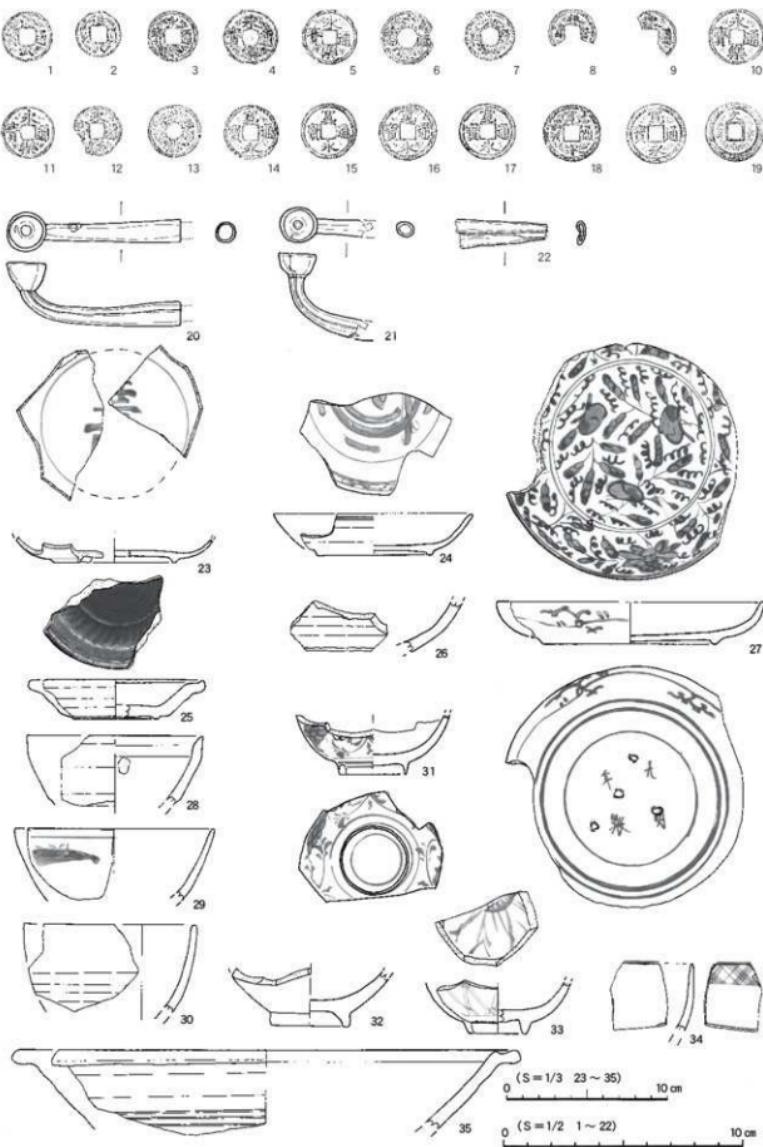


図62 第16号溝跡・沢1出土遺物（8）

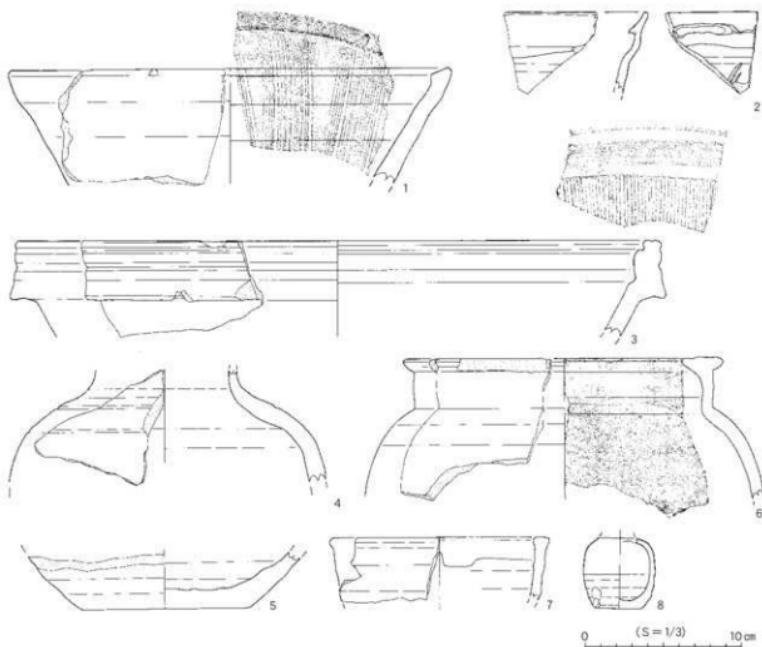


図63 第16号溝跡・沢1出土遺物（9）

られる擂鉢、内面に叩き痕がみられる肥前産陶器の壺・甕も出土している。19世紀中葉のものは、出土した近世陶磁器の中でもその出土量は少ない。産地をみると、瀬戸産磁器の小破片がわずかに出土するが、そのほとんどが産地不明の陶磁器である。器種は、小皿・中碗・小碗・鉢・土瓶などである。近世の陶磁器は、中皿・小皿・中碗などの食器具の他に壺・甕などの貯蔵具や擂鉢といった調理具が目立つ。また、食器具の中にも大鉢といった盛り皿としての用途が高いもの、火入・香炉なども出土している。

先述したように沢及び第16号溝跡からは中世末～近代に至るまで幅広く出土している。出土分布についても、第16号溝跡と沢1の合流部であるCG-27・28グリッド付近からまとまって出土する他、ほぼ全域から出土する。しかし、第16号溝跡及び沢1の底面及び底面直上の出土陶磁器をみると、第16号溝跡の推定流路に沿うような出土状況となり、時期も16世紀～17世紀前葉のものにはば限定される。このことから繩文時代に形成された沢がある程度埋没した後、流路を変えるように第16号溝跡が構築されたと考えることができる。また、近代以降の陶磁器が沢のほぼ全域から出土していることから、近・現代に至るまで完全には埋没していなかったと考えられる。

(澤田)

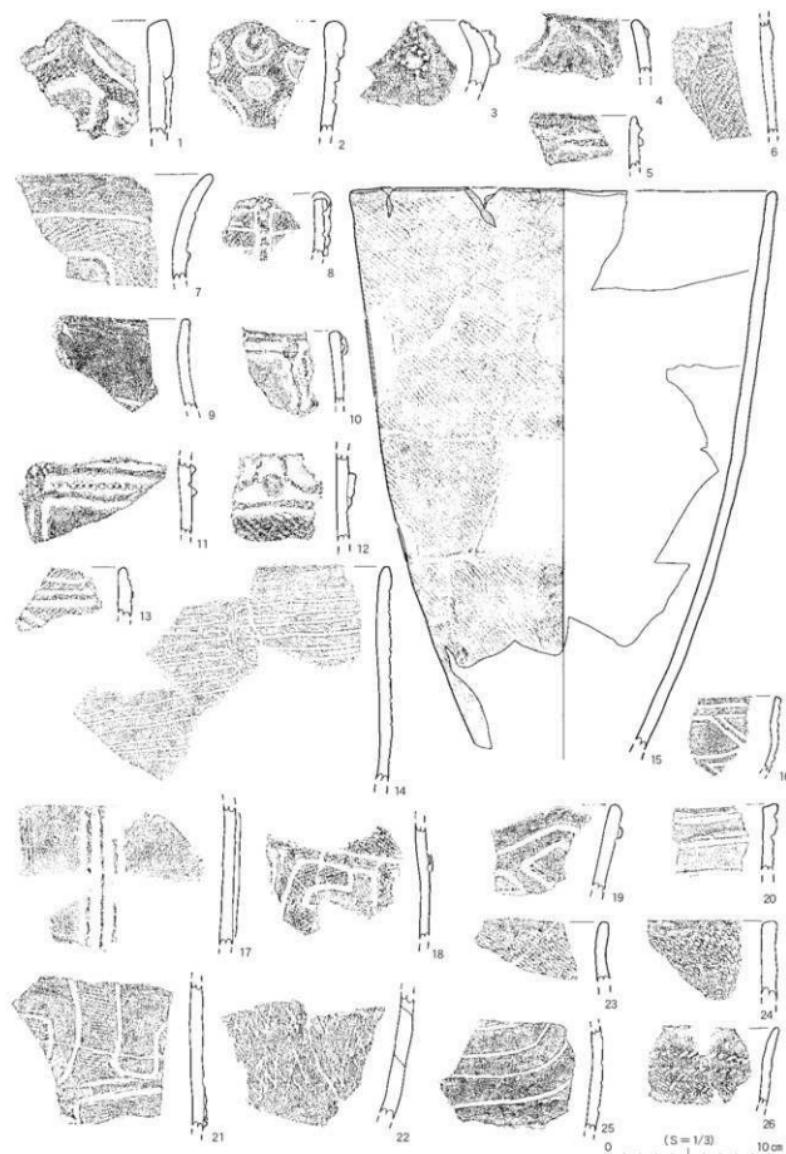


図64 沢2・沢頭出土遺物（1）



図65 汚2・沢頭出土遺物(2)

第5節 遺構外出土遺物

砥石・古銭・煙管・陶磁器等が出土した。ここでは時期不明の溝跡や中・近世のピット内出土遺物についても併せて記載する。また、図示しなかったが第371・487・507・509・629号ピットからは、柱の一部が出土した。

砥石（図66-1・2）

砥石が2点出土した。ともに端部が欠損している。図66-1は頁岩製で胸部がやや括れる棒状となる。使用面は側面4面である。図66-2は凝灰岩製で胸部が大きく括れる撥形となる。側面4面に加え、破損面も底面として使用されたと考えられる。それぞれ第1615・120号ピット内から出土した。

古銭（図66-3～16）

A～C区から、近・現代のものも含めて34点出土した。第6号溝跡や第1384・1805号ピットから出土するものもあるが、その大半は第I層や搅乱層、盛土から出土している。

銭種は、天慶元寶・永楽通寶・古寛永通寶・新寛永通寶・常平通寶・明治以降のもの、銭種不明のものである。内14点を掲載した。古銭は、江戸時代中頃の寛永通寶が約半数を占め、中でも新寛永通寶の出土が目立つ。また寛永通寶とほぼ同時期に朝鮮で鋳造された常平通寶も出土している（図66-12）。銭種不明のものについては、その大半が明治以降のものと考えられるが、中には寛永銭が銹着したと考えられるものもある。

煙管（図66-17～20）

沢1及び沢2付近から4点出土した。すべて搅乱層より出土している。真鍮製で図66-17～19は雁首、20は吸い口である。時期は18世紀～19世紀のものと考えられる。

陶磁器（図66-21～29、図67）

調査区A～C区から散発的に出土した。出土点数は約300点である。B～D区のピット内や一部A区斜面上方の第II層にもみられるが、そのほとんどが表土である第I層から出土している。近代以降のものと考えられる陶磁器も相当数出土したが、年代や産地等の分類は行わず、掲載しない。中・近世の陶磁器は約150点で、内30点を掲載した。時期は16世紀から19世紀中葉までと幅広く出土している。

16世紀～17世紀初頭のものは中国産の磁器、国産の肥前・瀬戸・美濃の陶磁器が少量出土している。器種は小皿・皿・碗といった食膳具で、図66-21のような中国産青磁や、22のように白釉下に菖蒲文と考えられる鉄絵を描いた絵唐津の皿もみられる。中には図67-3のように茶道具である瀬戸・美濃焼大窯IV期に相当する天目碗もある。17世紀前葉のものは、瀬戸・美濃焼登窯I期に相当するもので、中には図66-25のように雑器である志野織部の小皿も出土している。調理具である肥前産の擂鉢もみられる。

近世の陶磁器は、その出土量が17世紀後葉～18世紀前葉と18世紀後葉～19世紀前葉にやまとまっている。瀬戸・美濃焼などがわざかにみられるが、肥前産の染付がその大半を占める。17世紀後葉～18世紀前葉には肥前産陶器であるいわゆる京焼風陶器が目立ち、内野山窯のものや、18世紀後葉～19世紀前葉の大堀相馬産陶器がわざかにみられる。肥前産染付には、図66-26の見込みに蛇ノ目輪剥ぎがみられるもの、図66-29のたこ唐草文が描かれるもの、図67-8の波濤文が描かれる青磁染付、図17の矢羽根文が描かれるもの。陶18のコンニャク印判によって蕉の葉文が描かれるものなど多彩である。図66-27は重ね焼痕がみられ、牡丹唐草文が描かれる中皿で、焼繼がみられる。器種は食膳具で

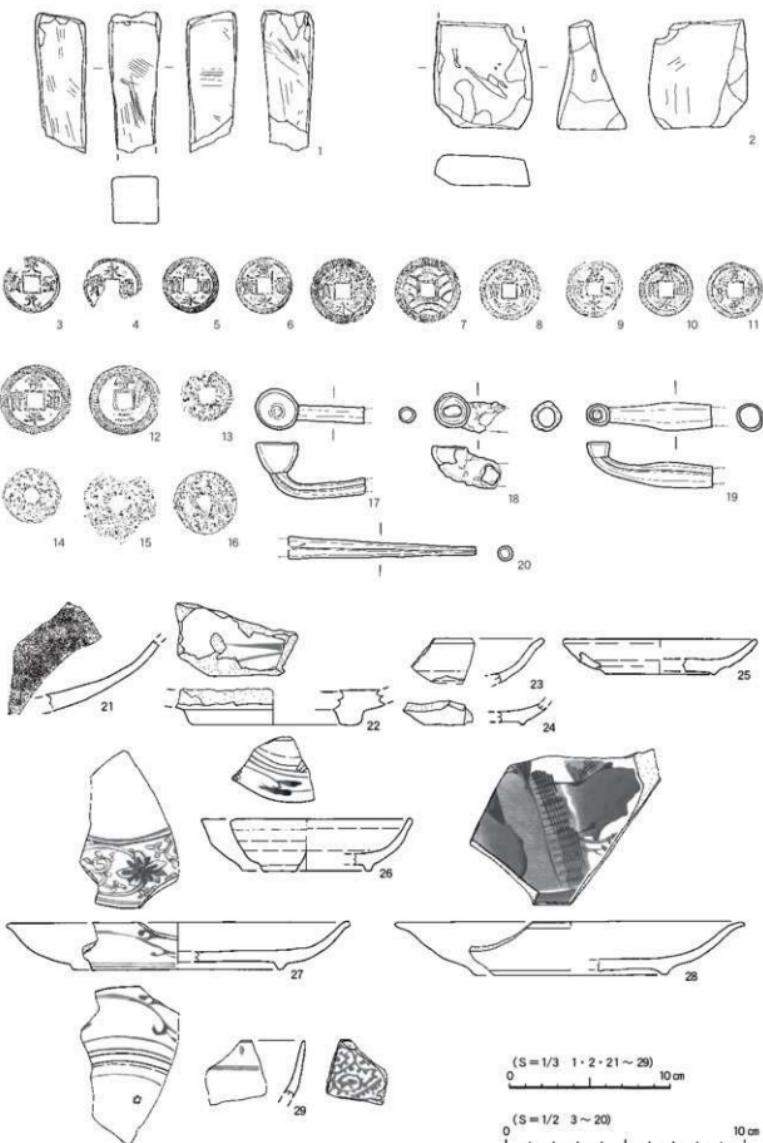


図66 中・近世の遺構外出土遺物 (1)

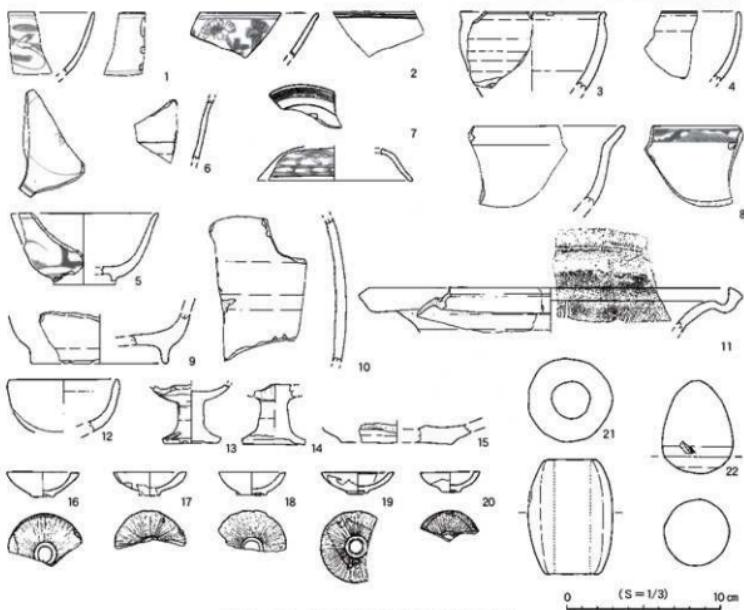


図67 中・近世の遺構外出土遺物（2）

ある中皿・小皿・小坪・小碗・中碗・鉢などがほとんどである。中には陶16のように焼継がみられる肥前産染付の大皿の小片も出土している。18世紀後葉～19世紀前葉になると、食膳具の中にも、蓋・徳利・湯飲み碗がわずかにみられるようになる。中には図67-12～14の仏飯器のように信仰との関連も伺えるものも出土している。18世紀末葉～19世紀中葉にかけては、肥前・肥前系のものに比べ瀬戸焼の陶器が多くなり、小久慈・大堀相馬・東北産のものがわずかに混じる。器種は近世以降にみられた食膳具に加え、瓦質の焜炉・火鉢といった暖房具や火入・香炉がみられるようになる。また、この時期には図67-16～20のように化粧具である紅皿の出土が目立つ。

出土遺物は、17世紀後葉以来のものが大半を占める。時期ごとに分布をみると、16世紀～17世紀前葉の陶器はA区西側急斜面とB区の沢1周辺及びピット集中区からわずかに出土する。それ以降の陶器は、A・B区のほぼ全域にみられるが、調査区東側であるC・D区の遺構外からはほとんど出土していない。ピット内出土陶器をみると、B区内ピットから16世紀～17世紀前葉のものや19世紀中葉のものがわずかに出土し、C区内ピットからは19世紀中葉～近代のものが多く出土している。遺構外とピット内の陶磁器の出土状況から、C・D区では近代以降に、宅地等の造成とともに削平を受けたと考えられる。

その他、陶錐1点と用途不明磁器製品が1点出土している。21は俵形となり全体に釉掛けされる。重量は227.2gで、時期は不明だが、近世以降のものであると考えられる。22は卵形を呈し、胴下部～下端にかけて調整痕がみられる。重量は151.5gである。全体的に灰色となり、表面に焼成前に付着したと考えられる砂がみられたため、磁器製品として扱ったが、時期・用途等の詳細は不明である。
(澤田)

第7章 時期不明の遺構

第1節 積穴建物跡

2軒検出された。調査当初1軒と考えていたが、S I 15A・Bの重複する2軒の遺構であることが確認された。以下S I 15A・Bについて併せて記述する。

第15号竪穴建物跡A・B(図68)

〔位置・確認〕BY-33グリッドを中心に位置し、第VI層調査中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] S I 15Aが古く、S I 15Bが新しい。

【平面形・規模】平面形は共に方形に近いものと考えられるが、造構の周囲には現代の基礎や配水管があったため、その広がりを追うことは出来なかった。

【堆積土】S I 15Aは2層に分層した。黒褐色土の下層に薄く浅黃橙色土が堆積する。S I 15Bは9層に分層した。黒褐色土を主体とし、下層には6・7層のような黄橙色土と黒褐色土の混合土が薄く堆積する。また、3層付近で落ち込みがみられることから、S I 15Bは複数回建替えが行われた可能性が考えられる。2・3層を掘り込んでいる時期不明の搅乱がみられる。

【壁・床面】全体の形態は不明であるが、残存部からS1 15A・Bは、共に壁が緩やかに外傾しながら立ち上がり、床面がほぼ平坦となると考えられる。

〔柱穴〕S I 15B の床面を中心に43基検出された。ピットの堆積土は、黒褐色土と浅黄橙色土との混合土が主体となる。柱穴配置やS I 15A・B のどちらに伴うものかは不明である。



図68 第15号竪穴建物跡A・B

〔小結〕建替えの可能性も示唆したが、堆積土や平面形から2軒とした。遺物が出土せず、帰属年代は不明であるが、堆積土やピットの検出状況から少なくとも近世以降であると考えられる。(澤田)

第2節 土坑

中居林遺跡の土坑は、ビニール片が出土するなど帰属時期が現代と判明したものを除き全てを調査した。しかしその後の整理作業の段階で、遺物の出土状況、堆積土及び重複関係から近現代以降と判断したものは欠番とした。本節で報告する時期不明の土坑は、共伴する遺物が出土しなかったなどの理由で帰属時期を明確にできなかったものである。以下、個別の記載は行わず概要のみを述べる。個々の計測値などは遺構一覧表を参照されたい。

今回の調査で検出された時期不明の土坑は69基である。これらは調査区全域に分布するが、調査区西側の斜面部(A区)にややまとまりが見られる。検出層位は基本層序の堆積状況によって第Ⅲ層から第ⅩⅠ層まで多岐にわたる。全体の傾向として、A区では第Ⅲ・Ⅳ層で検出されるものが多く、後世に削平を受けたと考えられる調査区東側(B~D区)では第VI層以下で検出されるものが多い。

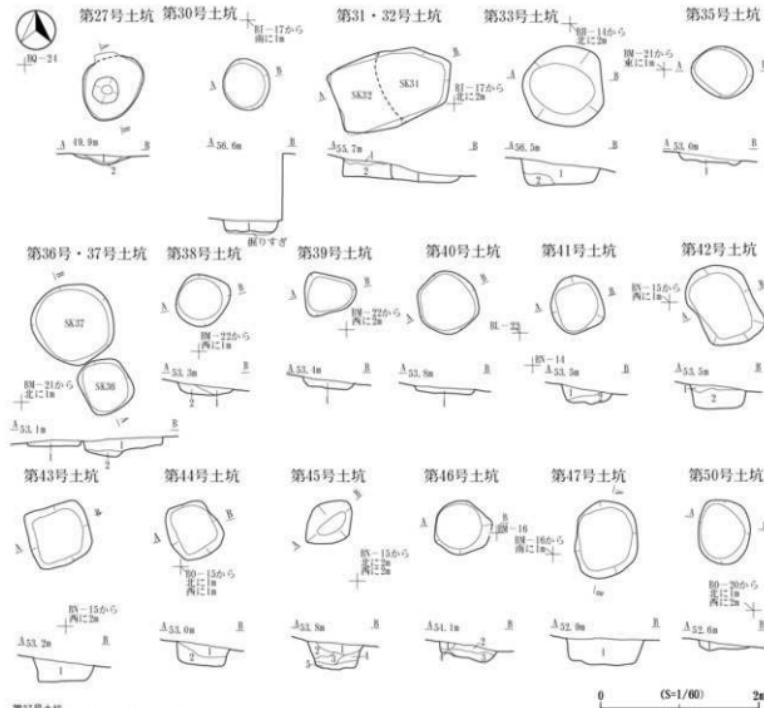
平面形は第3章第2節に準じて分類すると、円形基調のもの45基、方形基調のもの17基、不整形6基、不明1基となる。円形基調のもの内、円形は37基(第30・33・35~38・40・41・46・51A・57・62・71・77・79・87・88・94・99・101・106・109・118・121・123~125・127・130・143・146~148・152・155・164・167号土坑)、橢円形は8基(第27・39・42・47・50・61・90・115号土坑)である。また方形基調のもの内、方形は14基(第32・43・44・51B・56・58・76・89・107・117・128・135・137・172号土坑)、長方形は3基(第110・120・136号土坑)である。この他に不整形が6基(第31・45・85・126・140・141号土坑)、検出範囲がわざかであるため不明のものが1基(第78号土坑)である。

規模は、円形基調のもので長軸43~195cmで平均87cm、短軸41~176cmで平均77cm、深さ12~78cmで平均27cm、方形基調のもので、長軸59~180cmで平均98cm、短軸44~143cmで平均81cm、深さ13~66cmで平均32cmである。

断面形は大半が緩やかに外傾しながら立ち上がるが、第126・135・141・143・147号土坑のようにほぼ垂直に立ち上がるものもある。

底面は平坦なのが多いが、第107・109号土坑のように凹凸がみられるものもある。また、第27号土坑は底面がやくぼみ、第124号土坑の底面からは、直径6~10cm、深さ40~43cmの小ピットが3基検出された。第136号土坑は壁の周囲から直径12~25cm、深さ6~50cmの小ピットが7基検出された。また、第146号土坑の底面直上からは焼土範囲が検出され、その直上からは自然礫がまとまって出土した。

堆積土は、黒色土及び黒褐色土を主体とするもの32基(第30・31~33・35~37・39~41・45・51A・51B・62・71・76~78・85・87~90・94・99・115・117・120・121・124・130・164号土坑)、黒色土及び黒褐色土とロームブロックが混合土の状態を呈するもの26基(第38・42~44・46・47・50・56~58・61・79・101・106・107・109・110・123・125~127・140・143・146・147・167号土坑)、堆積土中に八戸火山灰起源と考えられる白色浮石をブロック状に含むもの10基(第118・128・135~137・141・148・152・155・172号土坑)に大きく分けられる。第27号土坑は土層図を作成できなかった。なお、平面形と堆積土に明確な相関関係は見出せなかった。



第27号土坑
第1層 10YR3/3 黒褐色土 浮石粒(φ1~2mm)微量。
第2層 10YR2/5 黄褐色土 黃褐色土中量。液性あり。

第30号土坑
第1層 10YR2/1 黒色土 中衡浮石微量。

第31号土坑
第1層 10YR1.7/1 黑色土 黑褐色砂質土少量。

第32号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石、黒褐色砂質土微量。

第2層 10YR1.7/1 黑色土 黑褐色砂質土少量。中衡浮石微量。

第33号土坑
第1層 10YR1.7/1 黑色土 中衡浮石少量。 黄褐色0-4mm(φ1~5mm)。

第2層 10YR2/1 黑色土 白色浮石(φ1~2mm)。 黄褐色浮石(φ1~7mm)。 中衡浮石少量。 黄褐色土微量。

第35号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 南部浮石(φ1~3mm)。 中衡浮石微量。

第36号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 南部浮石(φ1~3mm)。 黄褐色浮石(φ1~2mm)微量。

第37号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色砂質土少量。 中衡浮石。 南部浮石(φ1~3mm)微量。

第38号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 南部浮石(φ1~3mm)微量。

第39号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 南部浮石(φ1~3mm)微量。

第40号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第41号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第42号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第43号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第44号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第45号土坑
第1層 10YR2/1 黑褐色土 中衡浮石微量。

第46号土坑
第1層 10YR2/1 黑褐色土 中衡浮石微量。

第47号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第48号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 南部浮石(φ1~3mm)微量。

第49号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 黑褐色土中量。 中衡浮石微量。

第50号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土 中衡浮石微量。

第42号土坑
第1層 10YR2/3 黑褐色土、浅黄褐色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。
第2層 10YR2/3 黑褐色土と10YR2/1褐色土との混合土。 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第43号土坑
第1層 10YR2/3 黑褐色土と10YR2/1褐色土との混合土。 固白色浮石(φ1~3mm)。 明黄色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第44号土坑
第1層 10YR2/1 褐色土と10YR2/1褐色土との混合土。 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第2層 10YR2/3 黑褐色土と10YR2/1褐色土との混合土。 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第45号土坑
第1層 10YR2/3 黑褐色土。 南部浮石(φ2~5mm)。 中衡浮石微量。

第2層 10YR2/3 黑褐色土。 南部浮石(φ2~3mm)。 中衡浮石微量。

第3層 10YR2/3 黑褐色土。 南部浮石(φ2~3mm)。 中衡浮石微量。

第4層 10YR2/3 黑褐色土。 黑褐色土中量。 南部浮石(φ2~3mm)。 中衡浮石微量。

第5層 10YR2/3 黑褐色土。 黑褐色土中量。 南部浮石(φ2~3mm)。 中衡浮石微量。

第46号土坑
第1層 10YR2/3 黑褐色土。 中衡浮石微量。

第2層 10YR2/3 黑褐色土と10YR2/1褐色土上の混合土。 黄色0-2mm(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第3層 10YR2/2 黑褐色土。 黑褐色土中量。 黄色0-2mm(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

第4層 10YR2/3 黑褐色土。 黄褐色土中量。 黄色0-2mm(φ1~2mm)。 南部浮石(φ2~5mm)。 中衡浮石微量。

第47号土坑
第1層 10YR2/2 黑褐色土と10YR2/1褐色土との混合土。 南部浮石(φ3~10mm)。 中衡浮石微量。

第50号土坑
第1層 10YR2/3 黑褐色土と10YR2/1褐色土の混合土。 中衡浮石。

第2層 10YR3/3 黑褐色土。 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)。 中衡浮石微量。

図69 時期不明の土坑 (1)

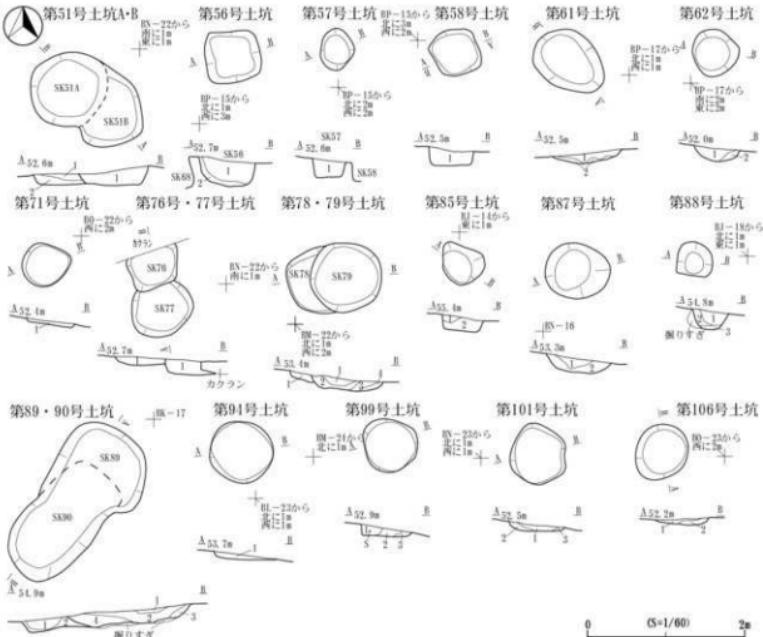


図70 時期不明の土坑（2）

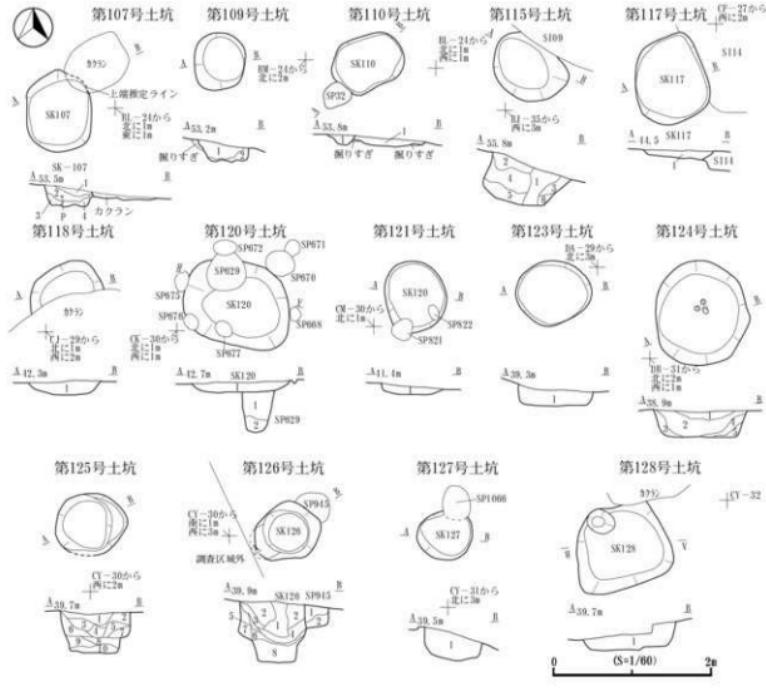
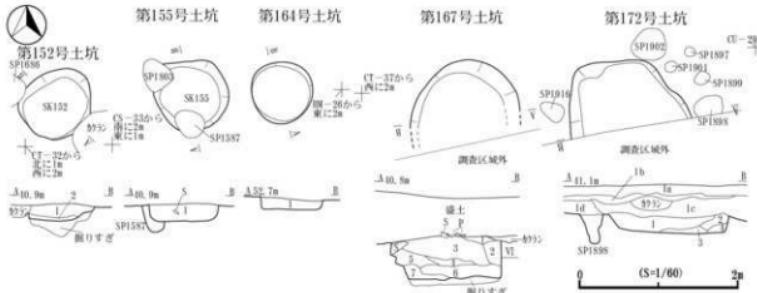




図72 時期不明の土坑（4）



- 第152号土坑**
- 第1層 10YE2/2 黒褐色土、灰白色砂(φ1~3mm)少量、黄褐色砂-粘粒(φ1~10mm)、炭化物(φ1~5mm)微量。
- 第2層 10YE2/2 黒褐色土、褐色砂-粘粒(φ1~20mm)少量、灰白色砂-粘粒(φ1~2mm)微量。
- 第155号土坑**
- 第1層 10YE3/4 灰褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~3mm)少量、灰白色砂-粘粒(φ1~30mm)、炭化物(φ1~5mm)微量、砂混入。
- 第2層 10YE2/2 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~5mm)、灰白色砂-粘粒(φ1~2mm)微量。
- 第164号土坑**
- 第1層 10YE2/2 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~2mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)微量、砂混入。
- 第167号土坑**
- 第1層 10YE2/2 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~2mm)、炭化物(φ1~3mm)微量。
- 第2層 10YE2/2 黒褐色土、褐色砂-粘粒(φ1~2mm)微量、
に付く黄褐色砂-粘粒(φ1~5mm)微量。
- 第3層** 10YE2/3 黒褐色土、褐色砂-粘粒(φ1~2mm)少量、明黄色砂浮石(φ1~8mm)、炭化物(φ1~10mm)微量、砂混入。
- 第4層** 10YE2/2 黒褐色土、褐色砂-粘粒(φ1~7mm)少量、灰白色砂-粘粒(φ1~3mm)微量。
- 第5層** 10YE2/2 黒褐色土、に付く黄褐色砂-粘粒(φ1~2mm)少量、炭化物(φ1~3mm)微量。
- 第6層** 10YE2/3 明黄色土と10YE1/1(黒褐色土の混合土)、明黄色砂浮石(φ1~8mm)少量、
に付く黄褐色砂-粘粒(φ1~5mm)微量。
- 第7層** 10YE2/3 黒褐色土と10YE2/2(黒褐色土の混合土)
に付く、褐色砂-粘粒(φ1~10mm)、灰白色浮石(φ1~5mm)微量。
- 第172号土坑**
- 第1層 10YE2/1 黒褐色土、に付く黄褐色砂-粘粒(φ1~10mm)、灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)、
炭化物(φ1~5mm)微量、砂混入。
- 第2層 10YE2/2 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~10mm)、灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)、
炭化物(φ1~10mm)微量、砂混入。
- 第3層 10YE2/2 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~10mm)、灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)、
炭化物(φ1~5mm)微量。
- 第4層 10YE2/3 黒褐色土、明黄色砂-粘粒(φ1~10mm)、灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)、
炭化物(φ1~5mm)微量。
- 第5層 10YE2/2 黒褐色土と10YE3/2(黒褐色土の混合土)、明黄色砂-粘粒(φ1~10mm)、
灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)微量。
- 第6層 10YE2/3 明黄色土と10YE1/1(黒褐色土の混合土)、明黄色砂浮石(φ1~10mm)、
灰白色砂-粘粒(φ1~20mm)微量。

図73 時期不明の土坑(5)

堆積土が黒色土及び黒褐色土を主体とする一群は、自然堆積のものが多いと考えられる。これらはA区に多く分布するが、一部B・D区にも分布する。

堆積土が混合土の状態を呈する一群は、そのほとんどが人為堆積と考えられる。これらはB区を除き調査区全域に分布する。この内A区で列状に分布する第42~44・56~58号土坑は、ビニール片が出土した現代の土坑と分布、堆積土とともに類似することから、現代のもの可能性がある。

堆積土中に八戸火山灰起源と考えられる白色浮石をブロック状に含む一群も人為堆積の可能性が高い。これらは大規模な削平を受けているC・D区に分布する。C・D区の造構検出面は、ほとんどが八戸火山灰層である。本造構群はこれを掘り込んで構築されていることから、堆積土はその掘り上げ土などが再流入したものと考えられる。また、これらが構築された年代は、掘立柱建物跡及び削平との関係から中世以降である可能性が高い。

遺物は、第32・99・109・136・164号土坑から繩文土器片が出土した。また、第147号土坑から有孔石製品(図39-5)が、第152号土坑から土製紡錘車(図39-4)がそれぞれ出土した。ただし、これらは造構に明確に伴うものではない。

本造構群の用途については不明であるが、D区で検出された第124号土坑は、底面ほぼ中央から3基の小ビットが検出されており、繩文時代の落とし穴の可能性がある。

冒頭でも述べたように、本造構群には明確に伴う遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。ここでは堆積土の状況及び分布範囲から、繩文時代、中・近世、現代の各時期にわたる可能性を指摘するに留める。

(葛城)

第3節 溝跡

時期不明の溝跡は20条検出された。本遺跡の溝跡は、明確に共伴する遺物が出土しないうえ、他遺構との重複が少ない。また後世の削平を受け、検出層位の特定が困難な溝跡も多いことから、時期不明と分類したが、中には近代以降のものも含まれる。以下、各溝跡について述べる。

第1号溝跡（図74）

【位置】 A区中央B J - 30～BK - 30グリッドに位置する。【重複】 沢2と重複するが、新旧関係は不明である。【平面形・規模】 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ340×幅108cmの直線状を呈し、深さ79cmである。【堆積土】 6層に分層される。黒褐色土を主体とする。層中に白色浮石及びロームを含み、人為堆積の様相を呈する。【壁・底面】 残存断面はU字形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ちあがる。底面は丸底状である。【出土遺物】 堆積土中から縄文土器が出土した。

第2号溝跡（図74）

【位置】 A区南西端AW - 12～13グリッドに位置する。【平面形・規模】 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ538×幅73cmの直線状を呈し、深さ35cmである。【堆積土】 2層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。全層に中摺浮石が混入する。【壁・底面】 断面は緩やかな丸底状である。

第3号溝跡（図74）

【位置】 A区東部BT - 22～23グリッドに位置する。【平面形・規模】 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ472×幅41cmの直線状を呈し、深さ76cmである。【堆積土】 2層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。【壁・底面】 断面形は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。【出土遺物】 堆積土中から縄文土器・礫石器が出土した。

第4号溝跡（図74）

【位置】 A区北部B J - 34～BK - 35グリッドに位置する。【平面形・規模】 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ739×幅136cmの直線状を呈し、深さ16cmである。【堆積土】 2層と6層に分層される。検出面上層は削平を受けている。黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。全層に中摺浮石が混入する。【壁・底面】 削平を受け、全容は不明だが、残存断面は緩やかな丸底状である。壁面には小段差がみられる。【出土遺物】 堆積土中から縄文土器・土師器が出土した。

第5号溝跡（図74）

【位置】 A区北西BE - 35～37グリッドに位置する。【平面形・規模】 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ712×幅95cmの直線状を呈し、深さ88cmである。【重複】 第1号溝状土坑と重複し、本遺構のほうが新しい。【堆積土】 3層と4層に分層される。黒色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。【壁・底面】 断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。【出土遺物】 堆積土中から縄文土器・石器（図28-5）が出土した。

第6号溝跡（図75）

【位置】 A区中央BE - 26～BF - 29グリッドに位置する。【平面形・規模】 後世の擾乱によって、全容は不明だが確認長は長さ15.49×幅1.27mの直線状を呈し、深さ97cmである。【堆積土】 3層に分層される。黒色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。全層に南部浮石が混入する。【壁・底面】 斜面上方にあたる

西壁は大きく外傾して立ち上がる。底面は丸底状である。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器(図27-7)・礫石器・寛永通宝(図66-8)・大正銭が出土した。[小結] 出土遺物から近・現代のものと考えられる。

第7号溝跡(図75)

[位置] A区東部B S - 26~28グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ610×幅57cmの直線状を呈し、深さ29cmである。[堆積土] 3層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1・2層に炭化物・焼土粒が混入する。[壁・底面] 残存断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。

第8号溝跡(図76)

[位置] A区北東B S - 35~36グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ789×幅172cmの孤状を呈し、深さ112cmである。[重複] 第10号溝跡と重複し、本遺構が新しい。[堆積土] 5層と3層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1~4層にはT o-bが混入する。[壁・底面] 壁面は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦面と丸底面が共存する。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器(図25-20・27-5)・土師器・石籠(図28-31)・礫石器が出土した。

第9号溝跡(図75)

[位置] A区北東B Q - 32~33グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが、確認長は長さ692×幅84cmの直線状を呈し、深さ36cmである。[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を呈する。[壁・断面] 断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器(図25-12)が出土した。

第10号溝跡(図76)

[位置] A区北東B S - 32~33グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ726×幅64cmの直線状を呈し、深さ13cmである。[重複] 第8号溝跡と重複し、本遺構が古い。[堆積土] 堆積土は単層で、暗褐色土と黒褐色土の混合土を主体とする。中振浮石が混入する。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器・礫石器が出土した。

第11号溝跡(図76)

[位置] A区北東B R - 32~33グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ412×幅60cmの直線状を呈し、深さ15cmである。[堆積土] 堆積土は単層で、暗褐色土を主体とする。中振浮石が混入する。[壁・断面] 断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。

第12号溝跡(図75)

[位置] A区北東B R - 32・33グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ467×幅43cmの直線状を呈し、深さ96cmである。

第13号溝跡(図75)

[位置] B区西部C C - 27~28グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ563×幅99cmの直線状を呈し、深さ55cmである。[堆積土] 8層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。盛土層および1~5層にはガラス片・ビニール片が混入する。[壁・断面] 断面は左右非対称な逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。[小結] 出土

遺物から現代のものと考えられる。

第14号溝跡（図76）

【位置】B区西部C C - 25~27グリッドに位置する。【平面形・規模】遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ13.76×幅0.54mの直線状を呈し、深さ43cmである。【堆積土】4層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1・2・4層には炭化物粒が混入する。【出土遺物】堆積土中から縄文土器が出土した。【小結】第1層を掘り込んで形成されており、近代以降の成立と考えられる。

第15号溝跡（図76）

【位置】B区東南隅C K - 26~C L - 27グリッドに位置する。【平面形・規模】遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ449×幅85cmの弧状を呈し、深さ69cmである。【堆積土】6層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1層には焼土粒・炭化物粒が混入する。【壁・底面】削平を受け全容は不明であるが、残存壁面は中層から上層にかけて大きく外傾し立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【出土遺物】堆積土中から縄文土器・土師器が出土した。【小結】第1層を掘り込み形成されており、近代以降の成立と考えられる。

第17号溝跡（図76）

【位置】B区東部C K - 29グリッドに位置する。【平面形・規模】削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ358×幅45cmの直線状を呈し、深さ11cmである。【堆積土】堆積土は単層で、黒色土と暗褐色土の混合土を主体とする。【壁・底面】残存断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。

第18号溝跡（図76）

【位置】B区東部C H - 28~C L - 28グリッドに位置する。【平面形・規模】削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ12.84×幅1.52mの直線状を呈し、深さ95cmである。

第19号溝跡（図77）

【位置】B区中央C H - 28~C G - 34グリッドに位置する。【平面形・規模】遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ12.26×幅0.51mの直線状を呈し、深さ45cmである。【重複】第20号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

第20号溝跡（図77）

【位置】B区中央C H - 28~C G - 34グリッドに位置する。【平面形・規模】遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ904×幅100cmの直線状を呈し、深さ16cmである。【重複】第19号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

第21号溝跡（図77）

【位置】C区南西隅C O - 27グリッドに位置する。【平面形・規模】遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ157×幅117cm、深さ75cmを計測する。【堆積土】5層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。全層に灰白色浮石が混入する。【壁・底面】残存断面は丸底状を呈し、壁面に小段差がみられる。【出土遺物】縄文土器・獸齒が出土した。
(中村)

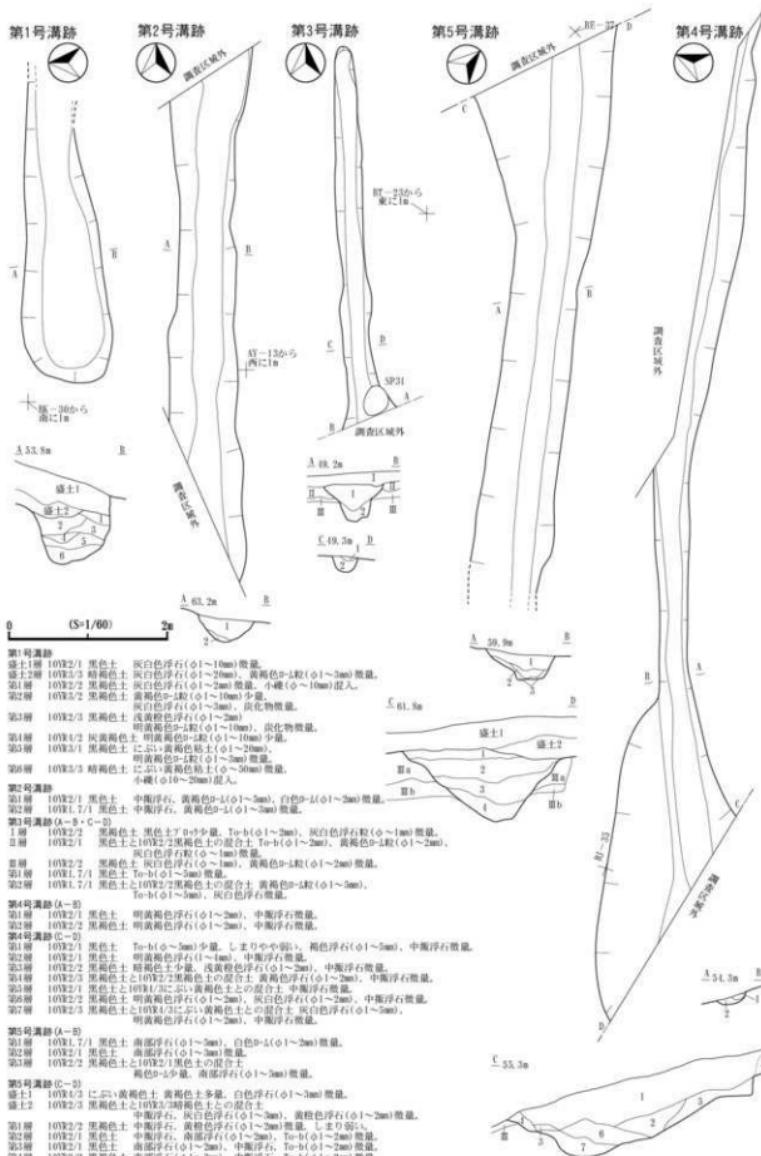


図74 時期不明の溝跡(1)

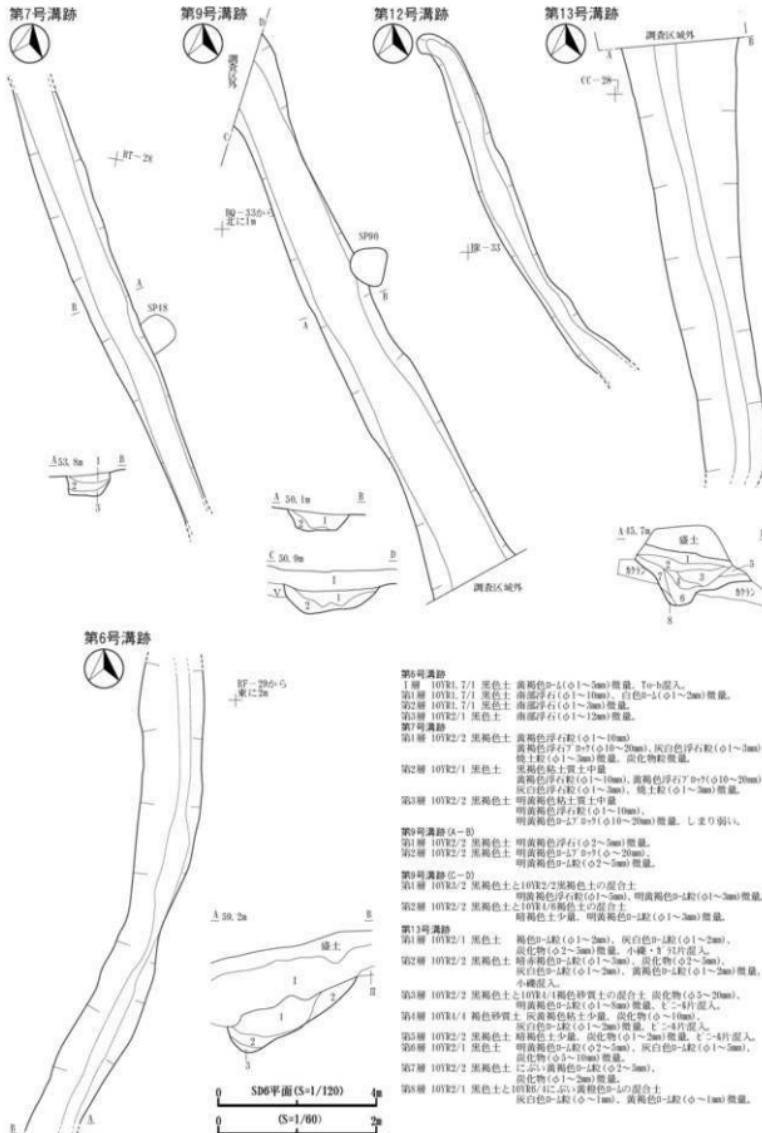
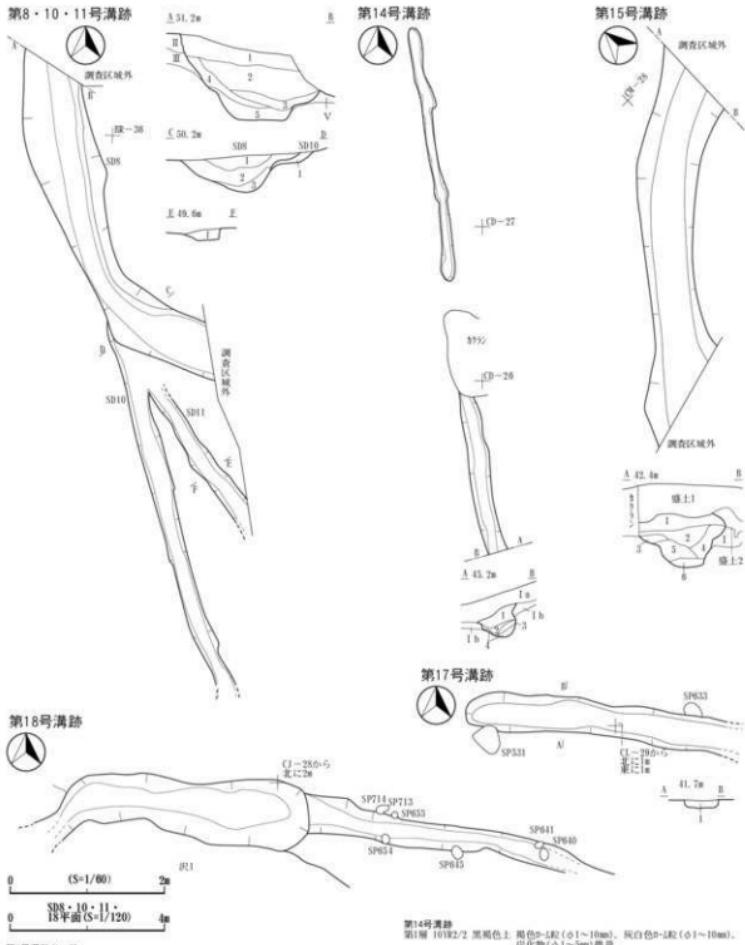


図 75 時期不明の溝跡（2）



第1編 100R2/1

第2層 10R1.7/1 黒色土 明黄褐色D-5粒($\phi 1\sim 2mm$)。To-h($\phi 1\sim 2mm$)、中腹浮石微量。
 しまり石
 第3層 10R2/1 黒色土 明黄褐色D-5粒($\phi 1\sim 2mm$)。中腹浮石。To-h($\phi 1\sim 2mm$)微量。
 第4層 10R1.7/1 黒色土 黒褐色土少量。黄褐色D-5粒($\phi 1\sim 2mm$)。中腹浮石

第5番 10R3/4 墨褐色土と10R2/2黒褐色土の混合土 黄褐色#-1粒(φ1~3mm)微量、第6号漏斗(C-2)

第1層 101R2/3 黑褐色土 黄褐色0-1cm(少しあ)、中深浮石、To-b(少しあ)微量。
第2層 101R2/3 黑褐色土 黄褐色土少量、中深浮石、To-b(少しあ)微量。
第3層 101R2/3 黑褐色土と101R2/3 黑褐色土との混合土、中深浮石微量。しまりあり。

第10号溝跡(C-9)

第1層 101R3/1 細褐色土と101R2/3黒褐色土の混合土 中衡浮石微量。
第11号標識(E-E)

第1层 10R3/4 喀褐色土 褐色土，黑褐色土少量，褐色砾(φ1~3mm)，中腹浮石微量

图 36 晚期形态

図76 時期不^合

第1幅 10) R2/2 黑褐色土，褐色砂粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)，灰白色砂粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)，
炭化物($\phi 1\sim 5\text{cm}$)微量。

第2種 10132/1 黒色土 黄褐色ムラ粒(約1~10mm)、炭化物(約1~3mm)微量。
 第3種 10132/2 黒褐色土と10132/1褐色ムラとの混合肥土 しまり弱い。
 第4種 10132/3 黒色土と10136/6(原鉢苗供試品)との混合肥土 硅酸物(約2~5mm)微量。

第1号 10182/1 黑色土 にぶい歯褐色砂-粘粒(φ1~3mm)、黒褐色土、炭化物(△1~5mm)、燒土鉄微量、鈣石型3

第2層	10182-1	黑色上 灰化物($\phi 1\sim 3mm$)。燒土輕量，帶白灰入。
第3層	10182-1	黑色上 灰白色($\phi 1\sim 3mm$)。燒土($\phi 1\sim 3mm$)微量。 黑褐色上少量。
第4層	10182-1	黑色上 灰白色($\phi 1\sim 3mm$)。燒化物($\phi 2\sim 5mm$)多量。

第3種 10182/1 黑色土 灰白色 \pm 白粒($\phi\sim1mm$)，碳化物($\phi\sim2mm$)微量。
 第3種 10182/2 黑褐色土 黑褐色土 \pm 白粒($\phi\sim10\sim35mm$) 少量。
 第3種 10182/3 黑褐色土 灰白色 \pm 白粒($\phi\sim1mm$) 微量。

第8圖 10182/2 黑褐色上 粉褐色上? ♂♀(♂10~20mm)。
灰黃褐色♂-LT ♂♀(♂10~25mm)微量。

第12号溝跡
第1層 3018C1/1 黒色土と1018D1/褐色土との界面土

第1場 10182.1 黒色土と10183.4褐色紅色土との混合土
に於ける黄褐色のA胞(φ~1mm)微量。

の講義(3)

の溝跡（3）

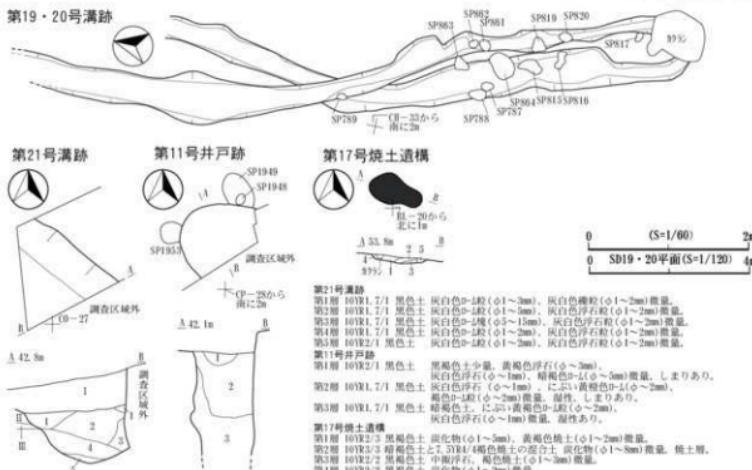


図77 時期不明の溝跡(4)・井戸跡・焼土造構

第4節 井戸跡(図77)

井戸跡は11基検出され、すべてB区中央より東側の平坦部で確認された。堆積土中から明らかに近・現代と判断できる板ガラス片や陶磁器が出土したものについては、欠番として扱い、掲載しない。時期不明の井戸跡は3基であった。以下それらについて概要を述べる。

検出された位置は、B区中央付近CH-32・CG-30グリッドから各1基、C区南西側CO-27グリッドから1基である。第1・4号井戸跡は第X層上面から、第11号井戸跡は第V層からそれぞれ円形の落ち込みとして確認された。計測値については後掲の一覧を参照されたい。

出土遺物は、第1号井戸跡から小久慈焼の小皿が1点(図48-11)、第4号井戸跡から近世の土瓶蓋が1点出土した(図48-12)。図48-12の産地断定は困難だが大堀相馬焼の可能性がある。第1・4号井戸跡は、その出土遺物を近世の遺構内出土遺物として掲載したが(第6章図48参照)、調査の段階で堆積土などから現代までの年代幅があると考えられたため、ここでは時期不明の井戸跡とした。堆積土は黒色土を主体としていると考えられるが(第11号井戸跡)、湧水や壁面崩落の危険から完掘を断念し、第1・4号井戸跡については土層の分層・注記も行わなかった。出土遺物・堆積土から考えて少なくとも19世紀以降のものと考えられるが、詳細な年代については不明である。(澤田)

第5節 焼土造構

第17号焼土造構(図77)

[位置・確認] 調査区西側BL-20グリッドに位置する。第III層を精査中に褐色焼土の不整形の広がりとして確認した。

[平面形・規模] 長軸69cm、短軸37cmの不整橢円形を呈する。

[堆積土] 5層に分層した。1~3層には焼土粒が含まれる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 第III層で検出したため縄文時代のものである可能性が高いが、詳細な年代は不明である。

第8章 理化学的分析

第1節 中居林遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

中居林遺跡は、青森県八戸市大字中居林字中居林地内（北緯40°29'17"、東経141°29'50"）に所在する。測定対象試料は、3号木組造構の杭（08NBN o 1:1AAA-81508）、第16号溝跡に伴う杭列を構成する杭（08NBN o 2:1AAA-81509）、第11号豎穴住居跡出土炭化物（08NBN o. 3:1AAA-90489）、第12号豎穴住居跡出土炭化物（08NBN o. 4:1AAA-90490）、3号木組出土木製品（08NBN o. 5:1AAA-90491）、1号木組造構から採取された木片（08NBN o. 6:1AAA-90492）合計6点である。

2 測定の意義

各造構の年代を推定すると同時に、3号木組造構と隣接する第16号溝跡の年代を明らかにし、両者の年代比較を行う。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA : Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAAAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイルにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9 SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yr BP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yr BP）として遡る年代である。この値は、δ¹³Cによって補正された値である。¹⁴C年代

と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{13}C 濃度の割合である。
- (5) 厳年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。曆年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は、08NBNo1が 4300 ± 30 yr BP、08NBNo2が 330 ± 30 yr BP、08NBNo3が 2810 ± 30 yr BP、08NBNo4が 1170 ± 20 yr BP、08NBNo5が 4260 ± 30 yr BP、08NBNo6が 170 ± 20 yr BPである。08NBNo. 2については、樹皮が残り、その内側の最外年輪を探取したことから、伐採年代を示すと考えられる。試料の炭素含有率は60%程度であり、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題が無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
					$\delta^{13}\text{C}$ (%)(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81508	08NBNo1	遺構: 3号木組 層位: 底面	木片	AAA	-28.76 \pm 0.35	4,300 \pm 30	58.58 \pm 0.23
IAAA-81509	08NBNo2	遺構: SD16 層位: 底面	木片	AAA	-27.23 \pm 0.40	330 \pm 30	95.99 \pm 0.32
IAAA-90489	08NBNo3	遺構: SII1 層位: 床面直上	炭化物	AAA	-25.44 \pm 0.22	2,810 \pm 30	70.48 \pm 0.24
IAAA-90490	08NBNo4	遺構: SII2 層位: 3層	炭化物	AAA	-31.52 \pm 0.27	1,170 \pm 20	86.47 \pm 0.25
IAAA-90491	08NBNo5	遺構: 3号木組 層位: 底面	木片	AAA	-28.48 \pm 0.17	4,260 \pm 30	58.85 \pm 0.22
IAAA-90492	08NBNo6	遺構: 1号木組 層位: 床面直上	木片	AAA	-28.87 \pm 0.26	170 \pm 20	97.90 \pm 0.30

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81508	4,360 \pm 30	58.13 \pm 0.23	4,296 \pm 31	2918BC - 2890BC (68.2%)	3011BC - 2977BC (8.5%) 2972BC - 2966BC (0.9%) 2959BC - 2949BC (1.4%) 2943BC - 2878BC (84.6%)
IAAA-81509	370 \pm 30	95.55 \pm 0.31	328 \pm 26	1512AD - 1531AD (12.0%) 1537AD - 1601AD (43.4%) 1616AD - 1635AD (12.8%)	1481AD - 1643AD (95.4%)

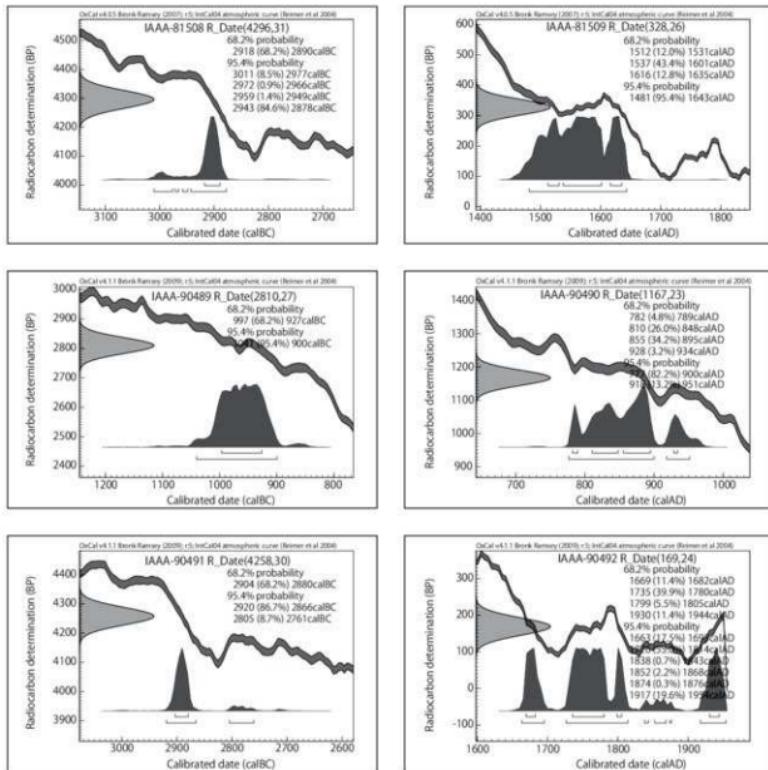
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90489	2,820±30	70.41±0.24	2,810±27	997BC - 927BC (68.2%)	1041BC - 900BC (95.4%)
IAAA-90490	1,280±20	85.32±0.25	1,167±23	782AD - 789AD (4.8%) 810AD - 848AD (26.0%) 855AD - 895AD (34.2%) 928AD - 934AD (3.2%)	777AD - 900AD (82.2%) 918AD - 951AD (13.2%)
IAAA-90491	4,320±30	58.43±0.22	4,258±30	2904BC - 2880BC (68.2%)	2920BC - 2866BC (86.7%) 2805BC - 2761BC (8.7%)
IAAA-90492	230±20	97.12±0.29	169±24	1669AD - 1682AD (11.4%) 1735AD - 1780AD (39.9%) 1799AD - 1805AD (5.5%) 1930AD - 1944AD (11.4%)	1663AD - 1695AD (17.5%) 1726AD - 1814AD (55.0%) 1838AD - 1843AD (0.7%) 1852AD - 1868AD (2.2%) 1874AD - 1876AD (0.3%) 1917AD - 1954AD (19.6%)

[参考値]

試料名	測定機関番号	前処理 試料切 り方	前処理前試 料量(mg)	回収試料 量(mg)	燃耗量 (mg)	精製試料 量(mg)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器)	Libby Age (yrBP)	(yrBP) 丸め込 みなし	曆年較正 1σ (yrcalBP)	曆年較正 2σ (yrcalBP)
08NBn-1	IAAA-81508	AAA 乾燥	124.19	45.73	5.50	3.32	-28.76 ± 0.35	4,300 ± 30	4,296 ± 31	2918BC - 2890BC (68.2%) 2959BC - 2949BC (1.4%) 2943BC - 2870BC (84.6%)	3011BC - 2977BC (8.5%) 2972BC - 2966BC (0.9%) 2959BC - 2949BC (1.4%) 2943BC - 2870BC (84.6%)
08NBn-2	IAAA-81509	AAA 乾燥	32.19	20.02	5.45	3.36	-27.23 ± 0.4	339 ± 39	329 ± 26	1512AD - 1521AD (12.0%) 1527AD - 1601AD (42.4%) 1616AD - 1635AD (12.8%)	1481AD - 1643AD (95.4%)
08NBn-3	IAAA-90489	AAA 乾燥	32.66	23.26	4.58	3.22	-25.44 ± 0.23	7,810 ± 39	7,810 ± 27	997BC - 927BC (68.2%) 1014BC - 900BC (95.4%)	1014BC - 900BC (95.4%)
08NBn-4	IAAA-90490	AAA 乾燥	33.56	26.46	4.73	3.28	-31.52 ± 0.27	1,170 ± 20	1,167 ± 23	773AD - 789AD (4.8%) 810AD - 848AD (26.0%) 855AD - 895AD (34.2%) 928AD - 934AD (3.2%)	777AD - 900AD (82.2%) 918AD - 951AD (13.2%)
08NBn-5	IAAA-90491	AAA 乾燥	38.83	18.97	5.42	3.33	-28.48 ± 0.17	4,260 ± 30	4,258 ± 30	2904BC - 2880BC (68.2%) 2920BC - 2866BC (86.7%) 2805BC - 2761BC (8.7%)	2905BC - 2866BC (86.7%) 2920BC - 2866BC (86.7%) 2805BC - 2761BC (8.7%)
08NBn-6	IAAA-90492	AAA 乾燥	26.70	14.63	5.66	3.37	-28.87 ± 0.26	170 ± 20	169 ± 24	1669AD - 1682AD (11.4%) 1726AD - 1814AD (55.0%) 1799AD - 1805AD (5.5%) 1930AD - 1944AD (11.4%)	1663AD - 1695AD (17.5%) 1726AD - 1814AD (55.0%) 1838AD - 1843AD (0.7%) 1852AD - 1868AD (2.2%) 1874AD - 1876AD (0.3%) 1917AD - 1954AD (19.6%)

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. *Radiocarbon* 19, 355–363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the Ox Cal Program. *Radiocarbon* 37 (2), 425–430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43 (2A), 355–363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43 (2A), 3810–389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration. 0–26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029–1058



第2節 中居林遺跡出土の植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 つばき まさる やす たかし 代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡の名称 : 中居林遺跡（青森県遺跡番号203281）

遺跡の所在地 : 八戸市大字中居林字中居林36-15外

発掘調査期間 : 平成20年4月23日～同年10月28日

調査面積 : 9.400m²

調査の担当機関 : 青森県埋蔵文化財調査センター

発掘担当者 : 葛城和穂、澤田恭平

遺跡の地形と立地 : 中居林遺跡は新井田川と松館川の合流点から西方に約2km離れた新井田川左岸の段丘崖上に立地し、標高は約40～65mである。

出土遺構と出土遺物の詳細については本文を参照されたい。

2. 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、弥生時代の竪穴住居跡（SI3）の床面に50cmメッシュのグリッドを設定し、それらのグリッドから土壌を採取してフローテーション法で処理を行った。その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。これらの資料を実体顕微鏡で観察し撮影を行なった。検出された植物種子の出土表は表1に示しておく。

3. 竪穴住居跡（SI3）から検出された植物種子

イネ *Oryza sativa L.* (図版1-1: SI3-D6から出土)

床面のD6から1粒出土。果実は長楕円形で腹面の下部に胚があり、側面にやや隆起した縦の稜線がある。このような特徴からイネと判断される。計測値はL4.80×W2.70×T1.75 (mm)

アカザ属 *Chenopodium L.* (図版1-2: SI3-E1から出土)

床面 D7, E1から酸化した状態で出土。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある(写真資料の左側)。このような特徴からアカザと判断される。これまで扱った各時期の遺跡から検出されたアカザ属種子には、炭化されないで検出される場合が非常に多い。このような状況は、アカザ属の種子構造上発達するチカラ層の関係で残存することが考えられる。また、サンプリング時などに起こる混入の可能性もあったと考えられる。計測値はL1.30×W1.25×T0.65(mm)

エノキグサ属 *Acalypha Linn.* (図版1-3: SI3-E1から出土)

床面 D0, D1, D2, E2, F5, 6以外のグリッドから酸化した状態で出土。種子は卵形。頂端円形で下端が尖る。このような特徴からエノキグサ *Acalypha australis L.* と判断される。計測値はL1.65×W1.15(mm)

タデ科 POLYGONACEAE (図版1-4: S13-E1から出土)

床面 D7, E1, F5, 6から酸化した状態で出土。瘦果は扁平広卵形で先が尖る。黒褐色で全面に縞模様がある。このような特徴からタニソバ *Polygonum nepalensis* と判断される。計測値はL2.10×W1.60×T0.85(mm)

ミズキ属 *Cornus* L. (図版1-5: S13-E6から出土)

床面 E6から出土。核は偏球形で浅い縦溝があり先に穴がある。出土種子は破片の一部であったが、核表面に縦溝が観察され、この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値は破片のため計測はしていない。

その他に資料のダメージが大きく分類できなかったものを不明として扱った。

4. 若干のコメント

中居林遺跡から得られた資料は、栽培植物のイネ1粒のほかにアカザ属、エノキグサ属、タデ科、ミズキ属が出土。その中でイネとミズキ属以外の種子はすべて酸化した状態で出土している。

今回、出土種子は極端に少なかった。通常であれば、堅果類の碎片などが散見されるがそれも確認できなかった。サンプリングを行った住居跡は焼失家屋でその床面の炭化遺物の採取を行っている。通常、床直あるいは床面は、堅穴住居新築時の層準を示す場合が多い。ある程度、時間が経過した後の炭化遺物の多く含まれる生活面が的確に捉えられていない場合は、炭化植物遺体の抽出が極端に少ない。焼失家屋の場合、通常の堅穴住居跡と異なった炭化遺物の堆積を示すので、サンプリングの際にはその詳細な観察が必要であろう。

ここで、酸化状態で出土する種子について触れてみたい。これまでに各時期の遺跡から炭化せず酸化(胚乳は分解されて種皮だけが残って出土する状態)を示すものが多数出土している。後世の混入である可能性を考慮して札幌市埋蔵文化財センターが同層準から出土した酸化状態のタラノキ属の年代測定を行ったことがある(吉崎・椿坂 1998)。得られた測定値は、炭化種子の測定結果とほぼ同一であった。したがって、種子の性質によって炭化の過程を得ないで残存するものもあることが確認されている。また、これまでのデータからは各時期の遺跡から出土する栽培植物は炭化を示すが、野生植物の草本類、木本類は酸化状態を示すものが多い。こうした現象は当該植物の利用方法の差に関係するのではないかと考えている。

引用文献

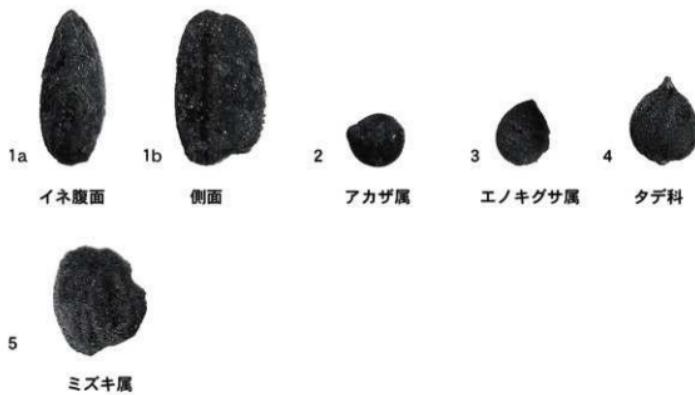
吉崎昌一・椿坂恭代

1998:「札幌市N30遺跡から出土した植物遺体」『N30遺跡』164-171, 225-22 札幌市文化財調査報告書58 札幌市教育委員会

表1 八戸市 中居林遺跡植物種子出土表

資料NO	遺構名	グリッド	層位	遺構の時期	イネ (粒)	アカザ属 (粒)	エノキグサ属 (粒)	タデ科 (粒)	ミズキ属 (片)	不明 (片)
5	S13	D0	床直	弥生時代中期						5
6	S13	D1	床直	〃						2
8	S13	D2	床直	〃						
18	S13	D5	床直	〃			2			
21	S13	D6	床直	〃	1		6			1
23	S13	D7	床直	〃		1	4	1		1
25	S13	E1	床直	〃		1	6	1		2
28	S13	E2	床直	〃						4
31	S13	E4	床直	〃			4			3
33	S13	E5	床直	〃			1			
36	S13	E6	床直	〃			2		1	
40	S13	E7	床直	〃			1			1
42	S13	F1	床直	〃			2			
43	S13	F2	床直	〃			1			
47	S13	F4	床直	〃			5			
49	S13	F5	床直	〃				1		
52	S13	F6	床直	〃				3		1
54	S13	F7	床直	〃			2			
56	S13	G4	床直	〃			6			2
60	S13	G5	床直	〃			1			1
63	S13	G6	床直	〃			6			

酸化した状態の種子



図版1

第3節 中居林遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は青森県中居林遺跡から出土した工具1点、服飾具6点、食事具1点、容器21点、土木具9点、祭祀具1点、用途不明品7点の合計46点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹2種、広葉樹8種)の表と樹種ごとの顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属【二葉松類】(*Pinus* sp.)

(遺物N o. 18, 20, 23, 24, 32, 42)

(写真N o. 24)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属【二葉松類】はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属(*Thujopsis* sp.)

(遺物N o. 1, 5, 12, 22, 25, 26, 28, 29, 31, 43, 44)

(写真N o. 28)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) ブナ科ブナ属(*Fagus* sp.)

(遺物N o. 3, 4, 6, 7, 11, 13, 14, 16, 17, 19)

(写真N o. 6)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μm)がほぼ平等に散在する。年輪の内側か

ら外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはつきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*)

(遺物N o. 27)

(写真N o. 27)

環孔材である。木口では大道管($\sim 380\mu\text{m}$)が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物N o. 8, 10, 15, 21B, 33～41, 45, 46)

(写真N o. 33)

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大道管($\sim 500\mu\text{m}$)が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短管型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木纖維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

6) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物N o. 9)

(写真N o. 9)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管($\sim 270\mu\text{m}$)が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形容細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組

織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

7) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.)

(遺物N o. 21A)

(写真N o. 21A)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 110\mu\text{m}$) が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は單穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 700\mu\text{m}$ となっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) マンサク科イスノキ属イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

(遺物N o. 2)

(写真N o. 2)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 50\mu\text{m}$) がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物(チロース)がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ で多数分布している。イスノキは本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

9) カエデ科カエデ属 (*Acer* sp.)

(遺物N o. 30B)

(写真N o. 30B)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 100\mu\text{m}$) が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は單穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ からなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

10) ミズキ科ミズキ属 (*Cornus* sp.)

(遺物N o. 30A)

(写真N o. 30A)

散孔材である。木口では中庸の道管 ($\sim 130\mu\text{m}$) が単独あるいは2～4個放射方向に複合して

分布する。道管の大きさは年輪中央部で大きくなる傾向がある。年輪界は波状である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に多数の壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~4細胞列、高さ~1mmである。ミズキ属はミズキ、ヤマボウシ等があり北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
 島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」京都大学木質科学研究所(1999)
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社(1979)
 深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆ Nikon DS-Fi1

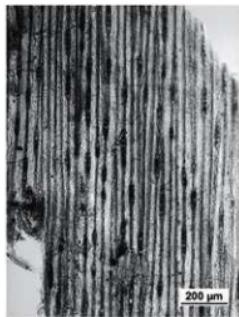
青森県中居林遺跡出土木製品同定表

No.	番号	品名	樹種
1	1	曲物	ヒノキ科アスナロ属
2	2	櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
3	3	楓	ブナ科ブナ属
4	4	楓	ブナ科ブナ属
5	5	曲物	ヒノキ科アスナロ属
6	6	楓	ブナ科ブナ属
7	7	楓	ブナ科ブナ属
8	8	下駄	ブナ科クリ属クリ
9	9	下駄	ニレ科ヤケキ属ヤケキ
10	10	丸木材	ブナ科クリ属クリ
11	11	楓	ブナ科ブナ属
12	12	底板	ヒノキ科アスナロ属
13	13	楓	ブナ科ブナ属
14	14	楓	ブナ科ブナ属
15	15	下駄歯	ブナ科クリ属クリ
16	17	楓	ブナ科ブナ属
17	18	曲物	ブナ科ブナ属
18	19	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕
19	20	楓	ブナ科ブナ属
20	21	下駄	マツ科マツ属〔二葉松類〕
21	23	A 下駄(台)	モクレン科モクレン属
B	" (造)		ブナ科クリ属クリ
22	24	底板	ヒノキ科アスナロ属
23	25	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕

No.	番号	品名	樹種
24	26	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕
25	27	不明	ヒノキ科アスナロ属
26	28	曲物	ヒノキ科アスナロ属
27	29	刀形	ブナ科コナラ属コナラ亜属 コナラ節
28	30	把手	ヒノキ科アスナロ属
29	31	曲物	ヒノキ科アスナロ属
30	40	A 木櫛(舟) B " (柄)	ミズキ科ミズキ属 カエデ科カエデ属
31	41	不明	ヒノキ科アスナロ属
32	52	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
33	53	不明	ブナ科クリ属クリ
34	54	不明	ブナ科クリ属クリ
35	59	杭	ブナ科クリ属クリ
36	60	杭	ブナ科クリ属クリ
37	61	杭	ブナ科クリ属クリ
38	62	杭	ブナ科クリ属クリ
39	63	丸木材	ブナ科クリ属クリ
40	64	杭	ブナ科クリ属クリ
41	68	容器	ブナ科クリ属クリ
42	69	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
43	70	曲物	ヒノキ科アスナロ属
44	71	箸	ヒノキ科アスナロ属
45	101	容器	ブナ科クリ属クリ
46	100	容器	ブナ科クリ属クリ



No-24 マツ科マツ属〔二葉松類〕



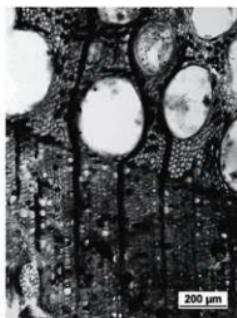
No-28 ヒノキ科アスナロ属



No-6 ブナ科ブナ属



No-27 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



No-33 ブナ科クリ属クリ



No-9 ニレ科ケヤキ属ケヤキ



木口
No-21A モクレン科モクレン属



柾目



板目



木口
No-2 マンサク科イスノキ属イスノキ



柾目



板目



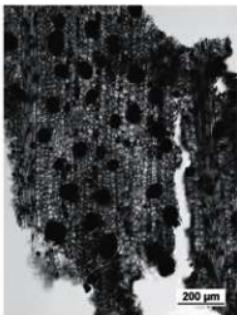
木口
No-30B カエデ科カエデ属



柾目



板目



木口

No-30A ミズキ科ミズキ属



桿目



板目

第4節 中居林遺跡の掘立柱建物跡

高 島 成 侑

はじめに

ここでは、掘立柱建物跡の検出に当り、特に考慮したこととを述べ、その掘立柱建物跡の平面構成や柱間寸法などの概要を記し、その建物跡の造立年代の推定を行い、それらの用途について述べている。それほど広くない調査区域において、建物跡が割と詰まつた形で検出されたことは驚きであった。

この稿をなすにあたり、八戸市教育委員会の故佐々木浩一氏には、現場と一緒に歩き、図面を見ながら、多大なご助力と協力を頂いた。感謝の言葉も無い。また、現場を担当された皆様には、図面提供のほか、遺物調査の結果報告など、細かなことまでご教示をいただいた。ここに感謝の意を申し上げたい。

1、掘立柱建物跡の検出

現場を見て、SB 01などはすぐに建物跡が検出できるほど、明瞭な遺構であった。しかし図面にしていただいてから、多少手間取ったところもあった。SB 04では、周囲の底跡がどこまで続くのかとか、東側にもう一間伸びないのかなどを考えたが、ここまで建物跡とした。SB 07では、もう二間ほど東へ伸びたところに柱穴跡が確認されたが、途中の柱穴跡が定かではなくここまでとした。

SB 08では梁間の寸法が、東側と西側では北側二間分を見ると異なっている。それは中央の柱筋で2.0尺のズレが生じせしめたためである。東側から伸びる桁がここまで来ており、西側の部屋の方は床の間などの関係から、奥を8.0尺と広くしたのであろう。また、東端一間の出が4.0尺であり、「きりよけ」などとよばれる下屋が下りていたことを考えた。

2、主な掘立柱建物跡

ここでは梁間二間以上の規模の大きな建物跡を取上げて、その平面構成や柱間寸法などについての概要を述べる。

2-1、B区

SB 01掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間四間のもので、平面構成は南と東西に底跡が付き、中に三間四方の部屋があり、その中央に一間四方の部屋がある形の建物跡である。一見して五間堂にみえる仏堂形式を示している。しかし、南側の沢跡に極めて近いところにあり、入口や法要の際の使い方に問題がある。柱間寸法は、桁行では西側から6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺(=32.5尺=9.850m)と並び、梁間では北側から7.5尺+7.5尺+7.5尺+6.5尺(=29.0尺=8.790m)であり、6.5尺が多用された時期の造立と考えられる。さらにまた、梁間二用いられている7.5尺に注目すると、北側から三間を身舎として南側に一間の底跡を付けた形も考えられるが、ここでは仏堂ということにしておく。

SB 02掘立柱建物跡は、桁行四間に梁間三間のもので、⁶身舎を北側に広く取り、南側に一間の底が付く形である。寸法は桁行では西側から7.5尺+6.5尺+7.0尺+6.5尺(=27.5尺=8.330m)と取り、梁間では北側から7.0尺+7.0尺+6.5尺(20.5尺=6.210m)としている。やはり、6.5尺が用いられており、ほかに7.0尺がある。

SB 03掘立柱建物跡は、三間四方の建物跡であり、寸法は東西方向では7.0+7.0+7.0尺(=21.0尺=6.360m)となり、南北方向では7.0+7.5+7.0尺(21.5尺=6.510m)となって、南北が0.5尺だけ長くなっている。平面から見ると倉庫跡のようなものであるが、7.0尺と7.5尺だけが使われており、この遺跡のなかでは古

いものであろう。

SB 04掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間四間の建物跡である。北側一面に一間の庇跡があり、その南側に二間四方の部屋を置いて二方向に庇跡を付け、さらに、二間に三間の部屋を取っている。少し妙な平面形式を示している。柱間寸法は、桁行では西側から $6.5+6.0+6.5+6.5+6.5$ 尺($=32.0$ 尺 $=9.700$ m)となり、梁間では北側から $6.0+7.5+7.5+5.5$ 尺($=26.5$ 尺 $=8.030$ m)となっている。身舎の梁間二間は7.5尺をとり、桁行には6.5尺が多用されているが、ところどころに、6.0尺や5.5尺という寸法がみられる。

SB 05掘立柱建物跡は桁行五間に梁間二間の倉庫跡などの建物跡である。寸法は桁行では北側から6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺($=32.5$ 尺 $=9.850$ m)となり、梁間では西側から7.0尺+7.0尺($=14.0$ 尺 $=4.240$ m)となっている。ともに寸法がそろった建物跡であり、年代の推定もできた。

SB 06掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間三間で、倉庫跡のようなものの西側に蔵前というか庇跡が付いた形であろう。寸法は桁行では北側から7.0尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+5.5尺($=30.5$ 尺 $=9.240$ m)となり、梁間では西側から6.0尺+7.0尺+7.0尺($=20.0$ 尺 $=6.060$ m)である。身舎梁間二間は7.0尺等間であり、桁行には6.0尺や5.5尺が混じっている。

2-2、C区

SB 08掘立柱建物跡は、桁行七間に梁間四間のもので、東側に4.0尺のものが付いた形であり、近世末期の大きな住宅のような建物跡である。寸法は桁行では西側から7.0尺+7.5尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+8.0尺+4.0尺($=50.5$ 尺 $=15.300$ m)であり、梁間は北側から西側で8.0尺+6.0尺+8.0尺+8.0尺となり、東側では6.0尺+8.0尺+8.0尺+8.0尺($=30.0$ 尺 $=9.090$ m)となっている。

SB 09掘立柱建物跡は、桁行六間に梁間二間のもので、なかに間仕切があって二室に区分切られている。寸法は桁行では西側から5.5尺+5.5尺+7.0尺+7.0尺+5.5尺+8.5尺($=39.0$ 尺 $=11.820$ m)となり、梁間では北側から8.0尺+8.0尺($=16.0$ 尺 $=4.850$ m)となる。この地域にある中世の建物としては、割と大きなものであった。

SB 10掘立柱建物跡は、桁行三間に梁間二間のものである。柱間寸法は桁行では西側から7.0尺+5.5尺+6.0尺($=18.5$ 尺 $=5.600$ m)を取り、梁間では北側から5.0尺+5.0尺($=10.0$ 尺 $=3.030$ m)となっている。かなり小規模なものである。

2-4、D区

この地区では梁間二間以上のものは無かった。

3. その年代と用途

3-1、掘立柱建物跡の年代について

これまでに述べた掘立柱建物跡について、その建築年代を推定することを試みたい。建築史学の方面から、これらの遺構の建築年代を推定することについては、平面構成の考察と、そこに用いられている柱間寸法を調べて、その値の大小によって行われるのが普通である。この遺跡で検出された掘立柱建物跡は、そのほとんどが住宅系の建物跡と認められ、ここでは、住宅建築に関わる基準寸法によって推定してみたい。

表1は、各遺構に使用されている寸法から、その年代を考察したものである。

3-2、掘立柱建物跡の用途について

SB 01は、先に述べたように、16世紀後半ころの「仏堂」の平面を示している。この時期の遺跡に宗教関係の施設があったということも不思議であるが、現在でも傍に天満宮が在るところから、なんらかの施

表一1 柱間寸法から見た推定年代表

造構名	使われている1間の寸法	使用寸法と推定年代
SB01 挖立柱建物跡	7.5, 6.5尺	身合梁間は7.5尺の等間をつかっているが、6.5尺が数多く使われているところから、16世紀後半とみる。
SB02 挖立柱建物跡	7.5, 7.0, 6.5尺	身合梁間が7.0尺の等間であるが、これも6.5尺から、16世紀後半とする。
SB03 挖立柱建物跡	8.0, 7.5, 7.0, 6.5尺	8.5尺や7.5尺もあるが、1カ所6.5尺があり、15世紀後半か。
SB04 挖立柱建物跡	7.5, 6.5, 6.0, 5.5尺	身合梁間が7.0尺の等間であるが、6.5, 6.0, 5.5尺があるところから、17世紀後半とした。
SB05 挖立柱建物跡	7.0, 6.5尺	身合は7.0尺の等間であるが、6.5尺があるところから、16世紀後半とした。
SB06 挖立柱建物跡	7.0, 6.5, 6.0尺	身合は7.0尺の等間であるが、6.5, 6.0尺があるところから、17世紀前半とした。
SB08 挖立柱建物跡	8.0, 7.5, 7.0, 6.0尺	梁間に6.0尺が用いられるが8.0尺が多く用いられているところから、19世紀前半とした。
SB09 挖立柱建物跡	8.5, 8.0, 7.0, 6.5, 5.5尺	6.5, 5.5尺があるところから、17世紀後半とする。
SB10 挖立柱建物跡	7.0, 6.0, 5.5, 5.0尺	6.0, 5.5, 5.0尺があるところから、19世紀後半とする。

*6.5尺としたものなかには、6.6尺も6.5尺も6.3尺も含まれている。その辺を区別するためには、現場で何度も測定を繰り返し、考察しなければならず、今回は省略してある。

設が在ったかもしれない。SB02は集落内の施設であるかもしれないし、SB03は倉庫跡と見られる。SB04は、「土間部分」があり「居住部分」があって、17世紀後半ころの富裕者の住宅であった可能性もある。SB05は倉庫跡であり、SB06も同様の倉庫跡に「蔵前」が取付いた平面であろう。SB08は19世紀前半ころのものであり、「土間部分」があり「居住部分」の部屋数も多くあって、かなり大規模な住宅跡と見ることができよう。SB10は住宅跡あるいは共同の作業所跡などが想定されるものである。

むすび

出土遺物の年代は、中世末から近世、19世紀ころまでのものと伺った。その頃の八戸市内にこのような集落跡が在ることは驚きであった。八戸に根城南部氏が居たところからのものか、興味のある問題が含まれており、これからも検討を続けたいものである。

参考文献

浅川滋男・箱崎和久編『埋もれた中近世の住まい—奈良国立文化財研究所シンポジウム報告—』2001、同成社

茅野嘉雄他『米山(2)遺跡VI』2009、青森県教育委員会、青森県埋蔵文化財調査報告書第473集
高島成佑「米山(2)遺跡の掘立柱建物跡」2009、同上報告書所収

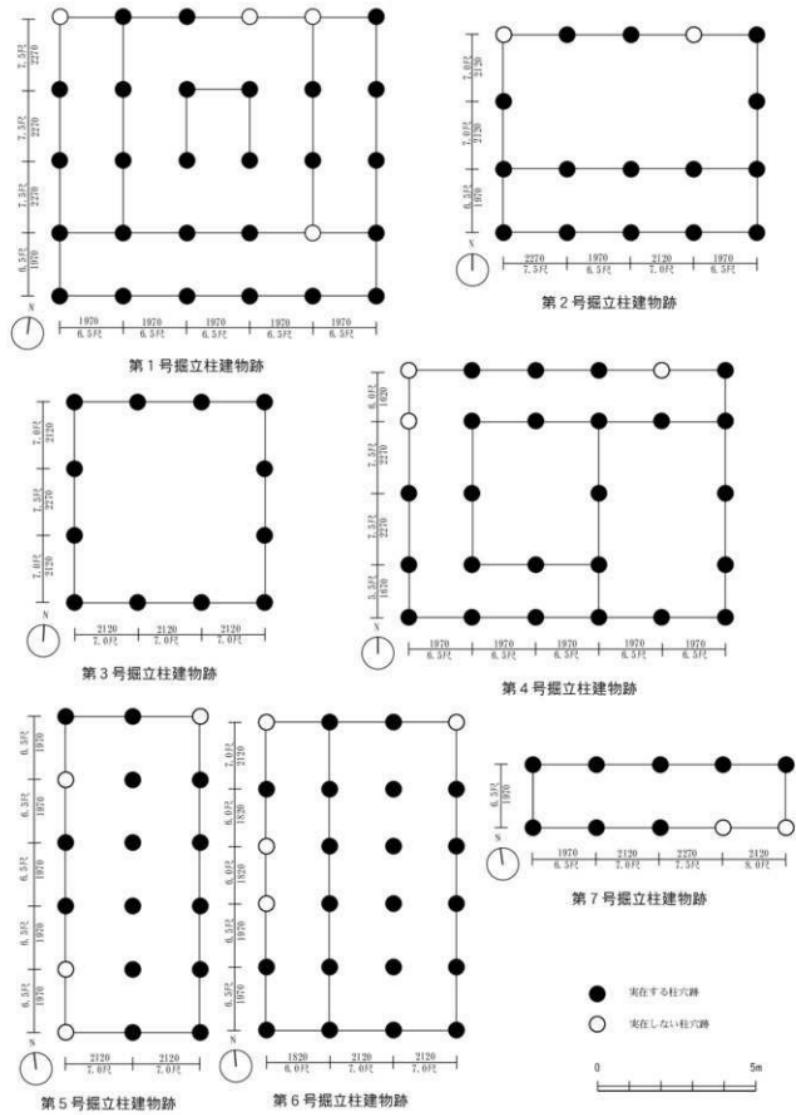


図1 B区検出堀立柱建物跡模式図

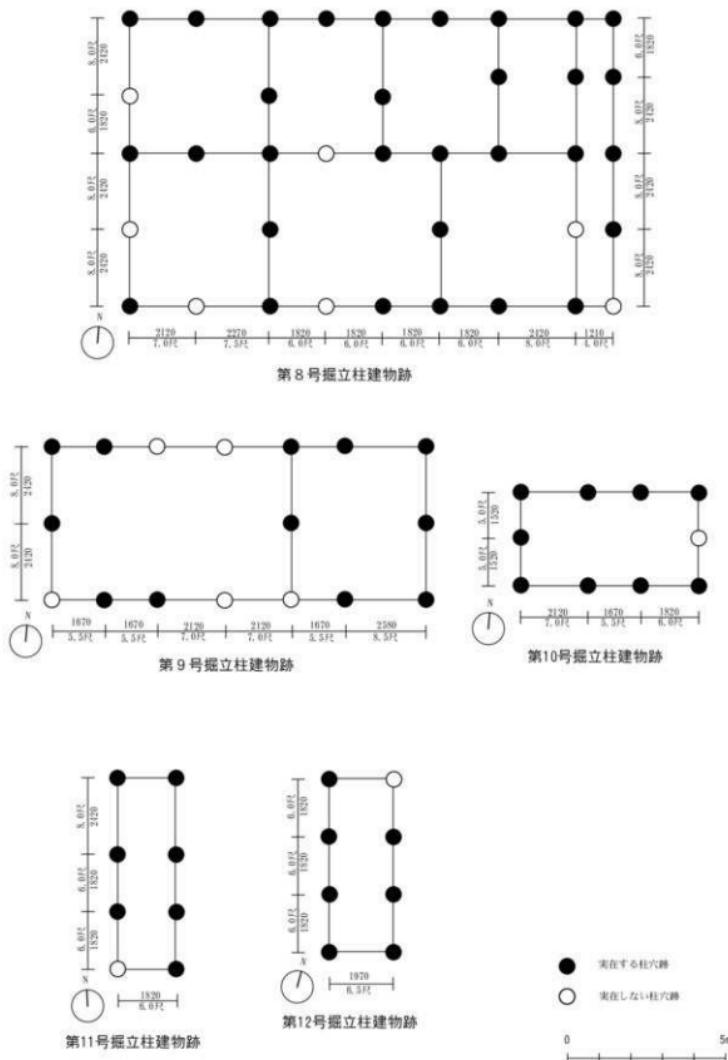


图 2 C・D 区検出堀立柱建物跡模式図

第5節 中居林遺跡出土漆器の塗膜構造調査

株吉田生物研究所

1. はじめに

青森県に所在する中居林遺跡から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料 調査した資料は、表1に示す中～近世の漆器5点である。

表1 調査資料

*:樹種については別稿の樹種同定報告書を参照のこと。

No.	保存処理	No.	品名	樹種*	出土遺構	概要
1	3	漆器楕	ブナ属	SD16	内外両面とも黒色の無文楕。内面の口縁近くの一部に、黒色の漆膜の付着が見られる。	
2	6	漆器楕	ブナ属	沢1	内外両面とも赤色で、高台内は黒色の漆が堆布され、その上に赤色漆で巻絞り模様が施されている楕。	
3	11	漆器楕	ブナ属	SD16	内外両面とも赤色で、口縁部は黒色の楕。高台内は黒色の漆が施され、その上に赤色漆で紋様が施されている。	
4	14	漆器楕	ブナ属	SD16	内外両面とも赤色で、高台内には黒色地に赤色漆で紋様が施された楕。	
5	20	漆器楕	ブナ属	沢1	内面は赤色で外側は黒色地に赤色と黄色の漆で紋様が施された楕。	

3. 調査方法 表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエボキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4. 断面観察結果 塗膜断面の観察結果を表2に示す。

表2 断面観察結果表

No.	器種	部位	写真 No.	塗膜構造(下層から)		
				下地		漆膜構造
				膠着剤	混和材	
1	楕	内面	1, 2	漆	炭化物	補修: 透明漆2層 オリジナル: 透明漆1層／赤色漆1層 ベンガラ
		外面	3	漆	炭化物	補修: 透明漆2層 オリジナル: 透明漆2層
2	楕	内面	4	糊液	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		外面	5	糊液	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		高台内	6	糊液	木炭粉	透明漆1層
3	楕	内面	7	糊液	木炭粉	赤色漆1層／透明漆1層 ベンガラ
		外面	8	糊液	木炭粉	赤色漆1層／透明漆1層 ベンガラ
		口縁	9	糊液	木炭粉	赤色漆1層／透明漆1層 ベンガラ
		高台内	10	糊液	木炭粉	透明漆1層
4	楕	内面	11	糊液	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		外面	12	糊液	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		高台内	13	糊液	木炭粉	透明漆1層
5	楕	内面	14	糊液	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		外面(赤色部)	15	糊液	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層 ベンガラ
		外面(黄色部)	16	糊液	木炭粉	透明漆1層／黄色漆1層 石黄

塗膜構造：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。1点（N o. 1）には、オリジナルの塗装と後世の補修の塗装とが重なる様子が観察された。N o. 1外側のオリジナル塗装の上部は黒褐色を呈している（写真3）。これは紫外線劣化によるもので、その面が長時間外気にさらされていたことが分かる。よってしばらくの使用期間が続いていると判断される。他の4点には、オリジナルの塗装のみが観察された。

下地：黄褐色の漆に炭化物の粉末を混和した漆下地1点（N o. 1）と、濃褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地4点とが認められた。

漆層：装飾の文様部での漆層の塗り重ね以外で、地色の漆の塗り重ねは2点（N o. 1, 3）に認められた。それ以外の3点の地色は単層であった。

N o. 1内外両面ともに、さらにオリジナルと補修ともに2層ずつの塗り重ねが認められた。どの層も厚みがあり、上面も平滑である。塗膜構造で先述したが、内面の補修最上部、外側のオリジナル・補修最上部の透明漆層は、黒褐色に変色して断面V字形の溝すらも認められる。

N o. 3には赤色漆層の上に、顔料を混和しない透明漆層が重ねられる、という塗り重ねがみられた。内外面の大部分では、この表面の透明漆の層厚は薄い（写真7, 8）が、口縁部には下層の赤色漆層と同程度の層厚の透明漆が重ねられているため、一見すると黒色に見える。

加飾：顔料を混和した漆で、地色の上に文様を施す、漆絵の技法が1点（N o. 5）に認められた。

N o. 5の外側には、赤色漆と黄色漆による漆絵が施されている。断面では、地色の透明漆層の上に赤色漆層と黄色漆層がそれぞれ観察された（写真15, 16）。

顔料：赤色漆（N o. 1内面、N o. 2外側、N o. 3内外面、N o. 4外側、N o. 5外側）と黄色漆（N o. 5外側）には、顔料が観察された。赤色顔料は、その透明の度合いや形状、夾雜物の混在などについて、資料による違いが認められたが、すべての赤色漆層にはベンガラが混和されていた。

N o. 5外側の黄色漆層には、透明度の高い黄色い石黄粒子が観察された。

5. 摘要 中居林遺跡から出土した5点の漆椀について塗膜構造調査を行った。

1点には補修が認められた。内外両面ともに漆下地に2層の漆層が認められたオリジナルの塗装の上に、直に透明漆2層が塗り重ねられていた。現在では一見すると内外両面とも黒色の無文椀であるが、内面のオリジナルは赤色であったことが判明した。また、この椀の下地には、木炭粉ではなく何らかの炭化物が混和されていた。

4点の椀の下地は、炭粉渋下地であった。

地色の漆の塗り重ねが先述の1点とともにもう1点認められた。高台内以外の、体部内外面に赤色漆を塗布し、その上から透明漆を椀全体に塗布したものであろう。特に口縁周囲には透明漆を厚く塗り、一見すると黒色に見受けられる。

漆にベンガラを混和した赤色漆と、漆に石黄を混和した黄色漆による漆絵が認められた。

地色の赤色漆には、すべてにベンガラが混和されていた。

漆椀の素地も併せると、今回調査を行った漆椀はすべてブナ属であった。中近世の漆椀では、大量生産による普及品にブナ属を利用することが多い。塗膜構造調査の結果からは、漆下地が施され、さらに補修してまで使用されたものが1点、炭粉渋下地の上に赤色漆層と透明漆が塗り重ねられていたものが1点認められた。これら2点は、炭粉渋下地の上に地色の漆が単層のみ施された、他の資料よりも丁寧な製作工程を経ているといえよう。

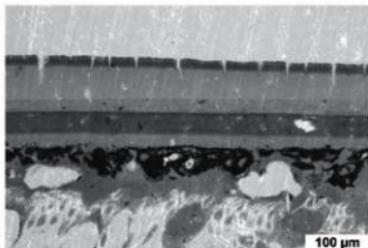


写真1 N o. 1 内面の断面写真

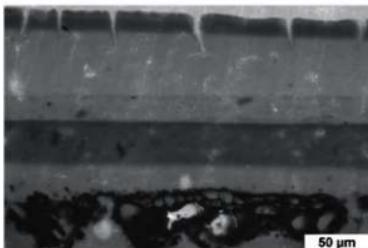


写真2 N o. 1 内面の断面写真



写真3 N o. 1 外面の断面写真

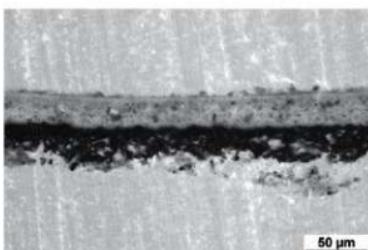


写真4 N o. 2 内面の断面写真

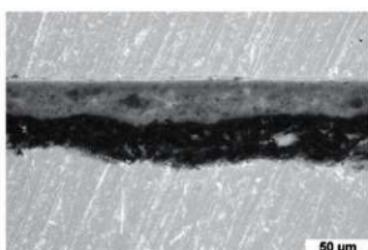


写真5 N o. 2 外面の断面写真

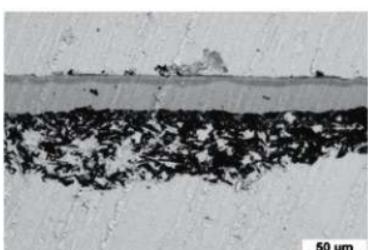


写真6 N o. 2 高台内の断面写真

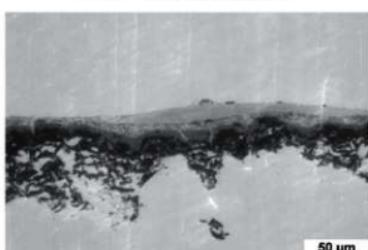


写真7 N o. 3 内面の断面写真

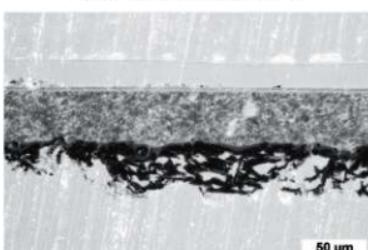


写真8 N o. 3 外面の断面写真

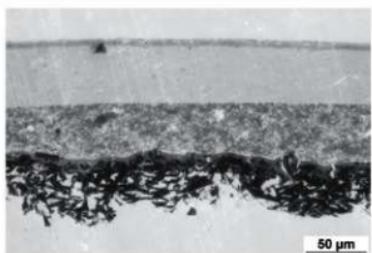


写真9 N o. 3 口縁の断面写真

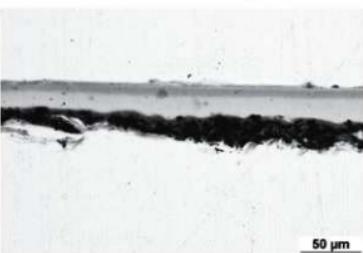


写真10 N o. 3 高台内の断面写真

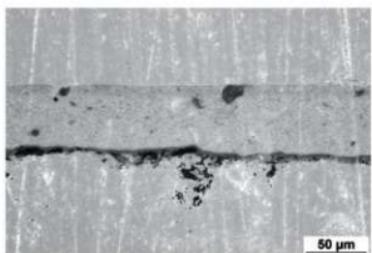


写真11 N o. 4 内面の断面写真

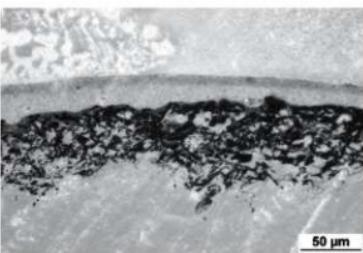


写真12 N o. 4 外面の断面写真

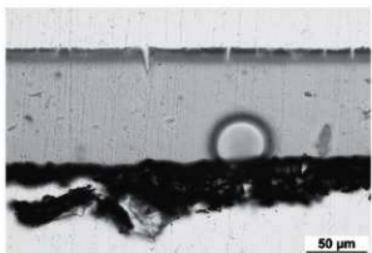


写真13 N o. 4 高台内の断面写真

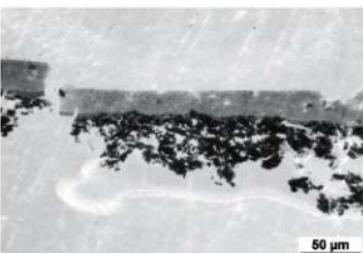


写真14 N o. 5 内面の断面写真

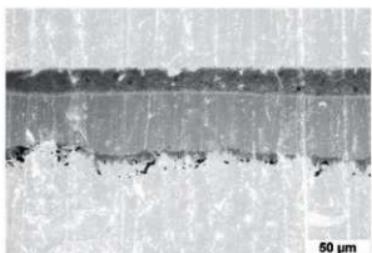


写真15 N o. 5 外面（赤色部）の断面写真

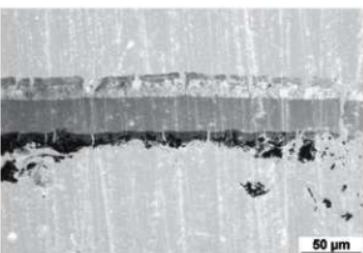


写真16 N o. 5 外面（黄色部）の断面写真

第6節 中居林遺跡の火山灰について

弘前大学理工学部地球環境学科 柴 正敏

八戸市中居林遺跡より採集された火山灰サンプル (SI 13フク土2試料及びBI-27基本層序14試料、計16試料) について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井、2003)。

ガラスの形態及び共存鉱物(表1)、ならびに軽石粒子の発泡度・色(特に褐色ガラスや苦鉄質ガラスの有無)、粒径より、SI 13試料番号1は十和田aテフラ(To-a)及び試料番号2は白頭山苦小牧テフラ(B-T m)に帰属される。前者は多量のオブシディアン及び石英斑晶の存在、後者はアルカリ長石及びエジンオージャイトの存在で特徴付けられる。

BI-27の14試料中13試料においてホルンブレンド(針状)及び発泡の良い軽石型ガラスが認められることより、十和田八戸テフラ(To-H)が混入・再堆積しているものと考えられる。試料番号3(III a 層)には、淘汰の良い軽石粒(径~2mm)が認められることより、十和田中摺テフラ(To-Cu)を含むものと考えられる。試料番号5(I Va 層)は、発泡度の異なるスponジ状軽石ガラスが認められることより、十和田南部テフラ(To-N b)を含んでいる可能性が高い。試料番号5(I Va 層)、6(I Vb 層)及び7(V 層)は、暗褐色のスコリアガラス(苦鉄質ガラス)が多く認められることより、十和田二の倉テフラ(To-N k)を含んでいる。

参考文献

- 青木かおり・町田 洋 2006 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成— K_2O – TiO_2 図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239–258.
- Hayakawa, Y. 1985 Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vo 1.60, 507–592.
- Machida, H. 1999 Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194–201.
- 町田 洋・新井房夫 2003 新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—。東京大学出版会、pp. 336.
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 2000 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11–19.
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 2001 十和田火山、降下軽石の化学組成変化 一宇樽部の一露頭を例として—。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11–17.
- 柴 正敏・佐々木 実 2006 十和田火山噴出物のガラス組成変化。月刊地球、第28巻、第5号、322–325.

表1 第13号堅穴住居跡火山灰

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	SI13	覆土上層	火山ガラス($pm > bw$)、褐色ガラス(多い)、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-a	軽石粒子(径1~3mm)を含む
2	SI13	覆土上層	火山ガラス(pm , bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm	

pm: 軽石型ガラス、bw: バブルウォール型ガラス、To-a: 十和田aテフラ、B-Tm: 白頭山苦小牧テフラ

表2 基本層序火山灰

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	BI-27 I		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
2	BI-27 II		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
3	BI-27 IIIa		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-Cu、 To-II(再堆積)	淘汰の良い軽石粒子
4	BI-27 IIIb		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	十和田系	
5	BI-27 IVa		火山ガラス(pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、ホルンブレンド(少量)、鉄鉱	To-Nb、To-Nk、 To-II(再堆積)	
6	BI-27 IVb		火山ガラス(pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、ホルンブレンド(少量)、鉄鉱	To-Nk、 To-II(再堆積)	
7	BI-27 V		火山ガラス(pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、ホルンブレンド(少量)、鉄鉱	To-Nk、 To-II(再堆積)	
8	BI-27 VI		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
9	BI-27 VII		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
10	BI-27 VIII		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	軽石粒子を含む
11	BI-27 IX		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
12	BI-27 X		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
13	BI-27 XI		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	
14	BI-27 XII		火山ガラス($pm > bw$)、斜長石、ホルンブレンド(針状)、斜方輝石、单斜輝石、石英、鉄鉱	To-II(再堆積)	

To-Cu: 十和田中嶽テフラ、To-Nb: 十和田南部テフラ、To-Nk: 十和田二の倉テフラ、To-II: 十和田八戸テフラ

第9章　まとめ

調査の結果、中居林遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。ここでは各時代の遺構・遺物を概観し、まとめてみる。

縄文時代の検出遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑26基、溝状土坑1基、木組遺構1基である。これらは木組遺構を除き、調査区西側の標高53~60mの斜面上に位置する。

竪穴住居跡は、平面形が長軸3m前後の円形及び楕円形であるが、一部が失われているなどして不明なものもある。炉の形態は地床炉、土器埋設炉が見られるが、炉が検出されなかったものもある。これらの年代は、出土遺物などから縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられ、中でも後期初頭にまとまりがみられる。当該期の住居跡は平成19年度調査でも検出されているが、今回の調査の結果、集落の範囲がさらに東側に広がることが明らかとなった。

土坑も竪穴住居跡と同様にB Uラインから西側の斜面部に分布する。これらの大半は用途不明であるが、第81・113・114・133号土坑のように、底面に小ピットを持つものは落とし穴と考えられる。遺物は出土しなかったが、これらは堆積土中に中振浮石を含まず、基本層序第III層堆積以前に埋没したと考えられることから、縄文時代早期末から前期初頭にかけてのものと考えられる。同様の遺構は西側に隣接する糠塚小沢遺跡でも検出されており、当該期における土地利用の一端が明らかとなった。その他の土坑については出土遺物から縄文時代中期後葉～後期前葉と考えられる。遺物が出土しなかった土坑についてもおおよそ縄文時代中期から後期のものと考えられる。

沢1から検出された第3号木組遺構は、本県では検出例の少ない遺構として注目される。遺構は4本の杭とL字状に設置された木枠から成る。木枠は長方形の二辺のみの検出であったが、杭が4本検出されたことを考えると、本来は全周していた可能性が高い。また、本遺構から検出された杭、木枠及び本遺構に伴うと考えられる木材で樹種同定を実施したものは全てクリであった。木枠が全周せず用途を特定するのは困難であるが、本遺構に伴って出土した堅果類の果皮や木製容器の未製品から、水さらし場や貯蔵場といった用途が想定される。また、本遺構に明確に伴う土器は出土しなかったが、本遺構の杭及び木製容器を用いた年代測定では、それぞれ 4300 ± 30 yr BP、 4260 ± 30 yr BPとの結果が得られている。このことから本遺構は縄文時代中期後葉のものと考えられる。今回の調査で当該期の竪穴住居跡は検出されなかったが、木組遺構が単独で存在したとは考えにくい。また、沢1の底面からは縄文時代中期後葉の土器片が出土していることからも、中世以降に大規模な削平を受けたと考えられるB～D区も含め、周辺に当該期の集落の存在が想定される。沢1の礫層からは、縄文時代中期後葉～後期初頭までの土器片が出土した。このことと木組遺構の年代から、少なくとも縄文時代中期後葉には沢が形成されていたと考えられる。その後、中世末から近世初頭にかけて沢1が埋没し、後述する第16号溝跡が構築されたと考えられる。

出土遺物では、縄文時代前～晚期の土器、石器、土・石製品が調査区西側のA区を中心とした区域から出土した。沢1から出土したものを除けば、縄文時代の遺構の分布とほぼ重なり、B区以東からはほとんど出土しなかった。出土土器は縄文時代後期初頭から前葉のものが主体となる。石器では、大石平型石籠（図28～31）が出土した。これは、つまみ部を持ち先端部が丸みを帯びるもので、縄文時代後期前葉に出土例が多く、本遺跡出土の石籠も同様の時期のものである可能性が高い。

最後に縄文時代の各時期における遺構の変遷を、過去二度の調査成果も含めまとめる以下のようなになる。

縄文時代早期末葉から前期初頭にかけて、底面に小ビットを持つ落とし穴と考えられる土坑が調査区西側の尾根を挟んで東西両斜面に構築され、狩猟場として利用された。沢の形成時期については不明であるが、礫層出土遺物及び木組遺構の年代から、少なくとも縄文時代中期後葉には沢として機能していた。この頃には木組遺構も構築され、水場を利用した生活が営まれていた。また縄文時代中期から後期にかけて、フ拉斯コ状土坑を含む多数の土坑が東西両斜面に構築された。縄文時代後期初頭には東側斜面に竪穴住居跡、土坑などが構築され、集落として最も盛行した。縄文時代晩期の遺構は検出されなかつたが、晩期中～後葉の土器片が遺構外から数点出土した。

以上のように、本遺跡では縄文時代早期末葉から晩期に至るまで断続的に集落及び狩猟場として利用されていたことが明らかとなった。

弥生時代の検出遺構は、弥生時代中期の第3号竪穴住居跡1軒である。本遺構の大半は平成19年度に調査されており、今回調査した範囲は前回調査時には未買収区域だった箇所である。また、遺構外からも弥生土器が出土したがその量はわずかである。

古代の検出遺構は、竪穴住居跡4軒である。これらは縄文時代の遺構と同様に、調査区西側の斜面を中心に分布する。第13号竪穴住居跡を除き、全体形が不明なものが多く、カマドや柱穴配置など住居構造を明らかにするには至らなかった。これらの年代は、出土遺物及び炭化物を用いた年代測定結果からおよそ8～11世紀代と考えられる。住居跡の検出数と年代幅から、古代を通じて小規模な集落が断続的に営まれていたと考えられる。

古代の出土遺物は遺構内外を問わずに出土しているが、その量は多くない。これらの年代は、その特徴から7世紀中葉～11世紀代までと年代幅がみられる。この内7世紀中葉のものと考えられる一群(図58～9～11・13・14)は、沢1の堆積土上層からまとまって出土しており、周辺に当該期の集落が存在したと考えられる。

縄文時代から古代にかけての遺構と遺物の分布は、A区を中心とする調査区西側にまとまり、B区以東にはほとんど見られない。これは、中・近世に行われたと考えられる大規模な削平に起因すると考えられる。従って、これまで述べた集落の様相が、本来のそれとは必ずしも一致しない可能性も考えられる。

中・近世の検出遺構は、掘立柱建物跡12棟、土坑5基、溝跡1条、用途不明遺構1基である。また、1850基検出されたビット群の大半も中・近世のものと考えられる。これらの分布は、斜面が緩斜化するB区北部からD区北部の範囲に集中する。このことから、当該期の居住城は、B区以東を主体としていたと考えられる。また、B区北部、南西の一部を除くC区全域、D区北部では、基本層序第Ⅱ層以下の欠落が確認された。この範囲では、東西20～25m幅の平場が複数存在し、掘立柱建物跡はこの平場範囲に収まるように検出された。基本層序の欠落は、本区域に掘立柱建物を建設する際に行われた大規模な削平に起因すると考えられる。またこの削平が行われた時期は、掘立柱建物跡と出土遺物の年代から、15世紀後半以降と考えられる。

中・近世の掘立柱建物跡の検出地点は、B区北半の平場とC～D区北部の平場の二ヶ所に集中する。B区北半に位置する一群(第1～7号掘立柱建物跡)の主要柱間寸法は7.0～6.0尺であり、成立年

代は15世紀後半から17世紀前半と推定される。C～D区北部に位置する一群（第8～12号掘立柱建物跡）の主要柱間寸法は6.5～6.0尺であり、成立年代は17世紀後半以降と推定される。従って、居住域の主体はB区北半の平場からC～D区北部の平場へと東進したと考えられる。

B区に位置する第1号掘立柱建物跡の間取りは、一重宝形造三間堂の様相を呈する。三間堂は中世前期に成立した寺院本堂の平面形式であり、後世に至っても普遍的に用いられた。なお、寺院ないしその関連施設に限定した出土が予想される僧具（袈裟や横被等）や梵音具（鶴口や魚鼓等）は出土しなかった。

本遺跡検出の建物は、規模や造作において突出した存在ではない。新井田古館跡や田向遺跡など、同時代の周辺集落の建物群と比して、建家面積も小さく、間取りも単純である。前述した第1号掘立柱建物跡の内部構成も、当時の本堂建築の中では簡易なものに属する。本遺跡から2km南に位置する八戸市川中居には1581（天正9）年造立の市重要文化財清水寺観音堂が現存する。県内最古の木造建築である同観音堂も、第1号掘立柱建物跡同様の一重宝形造三間堂である。同観音堂は外陣が半間後退する複雑な内部構成と架構を持つが、第1号掘立柱建物跡に同等以上の架構を窺わせる痕跡はない。それ以外の建物も含め、本遺跡内の建物の造作は総じて簡便であったようだ。

前述した一段ごとの平場範囲に収まるように建物が計画されるという事実は、建物の設計者が平場を一種の区画単位（屋敷割？）と認識していた可能性を示すものでもある。B区で検出された沢1の北岸には、CHライン付近を境界とし、50cm程度の高低差を持つ二段の平場が存在する。平場縁辺部には検出位置から区画溝としての用途が想定される浅い溝跡（第19・20号溝跡）が検出されたほか、調査前段階にはこれに並行する植栽列が確認されるなど、造成以降複数の区画施設が存在し、境界概念を意識的に視覚化させていたようだ。平場間の段差は調査前段階でも目視できた。現行の宅地区画もまたこの中世末由来の平場範囲を一単位として形成されるなど、区画意識は現在においても踏襲されている。

今回の調査範囲は現在の中居林集落の西端部にあたる。中世末に調査区中央B区で成立した居住域の主体が、近世末には調査区東端D区にまで東進していたことと合わせると、今回の調査で明らかにされた中世末由来の居住域が、現在の中居林集落の原集落であった可能性も考えられる。

沢1は、出土遺物などから少なくとも縄文時代中期後葉から利用されているが、中世末から近世初頭の段階で埋没したと考えられる。埋没後、何らかの理由で沢1は再開削され、第16号溝跡として近世を通じて利用された。なお、第16号溝跡から検出された杭列と第1・2号木組造構の用途は、水流調節や土留めなどを目的とする水利施設であった可能性が高い。

今回の調査で出土した木製品は自然木を含め101点である。これらは、縄文時代中期後葉のものと考えられる第3号木組造構から出土した22点を除き、沢1・2、第16号溝跡、及び沢1に隣接するピットから出土した。この内沢1から出土したものは、本来第16号溝跡に伴うものであった可能性が高い。またこれらの年代は、共伴する陶磁器の年代から中世末から近世にかけてのものと考えられる。器種は、挽物、底板、曲物、下駄、下駄箇、把手、鍵、櫛、箸、刀形、木槌、杭である。この他に器種不明のものも出土した。

挽物の樹種は全てブナ属であったが、塗膜分析の結果、図59-2は下地に漆が用いられ、補修のために塗り直されていることが判明した。また、図59-9も下地の上に赤色漆と透明漆が重ね塗り

されており、両者とも他に比べて丁寧な製作工程を経ている。また、櫛には関東以西に分布するイスノキが用いられており、この櫛が搬入品であることを示す。

今回の調査で出土した陶磁器の総破片数は461点である。同一個体及びその可能性が高いものや、近・現代と考えられる224点を除き、その個体数を計上した。計上した個体数237点について、数量的な分析を行うことで中・近世における陶磁器の様相を提示したい。なお、出土した陶磁器の大半は個体同定が困難な小破片である。そのため、本来の個体数は今回算出したものより変動する可能性がある。各器種を形態から用途別に分類した。それぞれ杯・皿・鉢・碗類は食膳具、擂鉢は調理具、壺・甕類は貯蔵具、焜炉・火鉢は暖房具、紅皿は化粧道具、仏飯器は仏具として扱った。茶入の他、碗・壺・甕類の中でも天目碗や茶壺といった茶の湯と関連が伺えるものは茶道具として扱った。火入・香炉はその他に分類し、小破片で器種・用途の判断が困難なものには不明とした。

おおまかな時期ごとにみると15世紀末葉～17世紀前葉のものが36点(15.2%)、17世紀中葉～18世紀前葉のものが43点(18.1%)、18世紀中葉～19世紀前葉のものが48点(20.3%)、19世紀中葉～近代のものが63点(26.6%)、時期不明のものが47点(19.8%)であった。なお、破片によって時期区分が困難なものは、各世紀一括とした。そのため便宜上、各世紀の中葉以降としたものの中にも前葉に含まれる可能性があるものもみられる。

15世紀末葉～17世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、中国産14点、瀬戸・美濃産10点、肥前産6点、信楽焼4点、越前焼2点となる。磁器は中国産の小皿、中碗で国産のものはみられない。陶器は瀬戸・美濃産の小皿、肩衝茶入、天目碗や肥前産・越前焼の擂鉢、信楽焼の壺といった国産のもので占められる。用途別では、食膳具が22点、茶道具が7点、調理具が7点となる。

17世紀中葉～18世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、肥前産39点、瀬戸・美濃産4点となる。国産の中でも肥前産のものが大半を占める。磁器は肥前産の小杯・小皿である。陶器は肥前産の大皿、中皿、小皿、大碗、中碗、壺・甕、火入・香炉、擂鉢や、瀬戸・美濃産の大皿、大鉢である。磁器・陶器の比率をみると、陶器の比率が高く、瀬戸・美濃陶器に加え、京焼風や呉器手とよばれる肥前産陶器が目立つようになる。用途別では、食膳具が31点、貯蔵具が6点、調理具が2点、その他が2点、不明のものが2点である。

18世紀中葉～19世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、肥前産34点、瀬戸・美濃産9点、堺産1点、大堀相馬焼4点となる。肥前産が大半を占め、瀬戸・美濃産に加え泉州堺でつくられた関西系のものや大堀相馬焼が混じる。磁器は、肥前産の大皿、中皿、小皿、なます皿、鉢、蓋物、碗、湯飲み碗、仏飯器や、瀬戸・美濃産の小杯、小碗である。陶器は肥前産の小皿、鉢、徳利、擂鉢や、瀬戸・美濃産の小碗、碗・徳利のほか、堺産の擂鉢、大堀相馬焼の小碗、湯飲み碗である。肥前産の磁器の出土量が大半を占め、全体的に磁器の比率が増加する。瀬戸・美濃産にも磁器が混じりはじめる。用途別では、食膳具が43点、調理具が2点、仏具が3点である。湯飲み碗など喫茶との関連が伺えるものもみられるが、用途の分類が困難なためここでは食膳具として扱った。

19世紀中葉～近代では、産地ごとの出土破片点数は、瀬戸産25点、肥前系12点、肥前産5点、大堀相馬焼2点、小久慈焼2点、東北産2点、不明のもの15点である。磁器は瀬戸・美濃産の大碗、中碗、小碗や肥前産の中皿、鉢、碗蓋、肥前系の小杯、小皿、紅皿、小碗、碗、中碗、東北産の中碗、産地不明の小皿である。陶器は瀬戸・美濃産の擂鉢、徳利、肥前産の徳利、大堀相馬焼の土瓶、小碗、小

久慈焼の小皿、小碗、產地不明の土瓶、土瓶蓋、火入・香炉である。また、瓦質の焜爐・火鉢もみられる。用途別にみると、食膳具が49点、調理具が3点、暖房具が2点、化粧道具が6点、その他が1点、不明のものが2点である。

本遺跡から出土した陶磁器は、肥前産、瀬戸・美濃産のものが多数を占める。それぞれの陶磁器について年代別にみると以下の傾向がみられる。唐津焼や伊万里焼といった肥前産陶磁器は、17世紀中葉から19世紀前葉には出土陶磁器の大半を占める。染付磁器が多い中、17世紀中葉～18世紀前葉には京焼風陶器などがみられるようになる。その後、19世紀中葉になると、出土量は減少し、肥前産の製作技法の流れを汲む肥前系陶磁器が目立つようになる。瀬戸・美濃産陶器は、肥前産陶磁器ほど出土傾向に変化はみられないものの、17世紀中葉以降、年代が下るにつれ増加する傾向にある。18世紀後葉以降、瀬戸・美濃産陶器は次第に減少し、19世紀以降本格的に生産されるようになった瀬戸産磁器が目立ちはじめる。

用途別にみると、中・近世では一貫して食膳具の占める比率が多く、全体の61.2%を占める。生活雑器がその大半を占める食膳具の中には、17世紀前葉のものと考えられる中国産の皿や17世紀の瀬戸・美濃産の大

鉢、18世紀の肥前産大皿などがみられる。中国産の皿については、接合関係や文様から少なくとも複数個体がセットで搬入された可能性が

高い。中国産磁器の生産窯について詳しく言及しないが、素地や呉須などから漳洲窯産である可能性が考えられる。肥前産の大皿には焼継がみられ、当時希少品であった大皿を修理し、使用していたことが伺える。ほかにも、15世紀末葉から16世紀にかけての天目碗や肩衝茶入、茶壺などの茶道具がみられる。これら奢侈品・希少品が出土することから、本遺跡の人々の生活水準は、中・近世を通じていわゆる庶民のものよりも高かったことが想定される。

その他特筆する近世遺物として、信仰のあり方を想起させる仏壇、化粧具である紅皿、漁労に用いられた陶錘、喫煙と関連がある煙管が出土している。今回食膳具として扱ったものの中には徳利や湯飲み碗などがみられることから、茶の湯の大衆化などの影響を受け、飲酒・喫茶の風習が存在していたことが伺える。集落の生業や生活者の階層を特定できる遺物は出土しなかつたが、これら出土遺物から、近世以降多様な習俗が本遺跡の生活者の中に浸透していたのであろう。

今回の調査では、上述のように縄文時代から中・近世にかけての集落の様相とその変遷及びそこで生活していた人々の生活様式の一端を明らかにすることができた。一方で、墓域を含む近世における集落の全体像など明らかにできなかった点も多い。今後の良好な資料の増加によって、当該地域における各時代の様相がより具体的に復元できると考える。

(縄文時代～古代・木製品 葛城、中・近世遺構 中村、陶磁器 澤田)

（引用・参考文献）

- 青森県教育委員会 1974『青森県の民家 I 概要・南部』青森県民家緊急調査報告書
- 青森県教育委員会 1984『浜通遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第80集
- 青森県教育委員会 1985『大石平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1986『大石平遺跡 II』青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
- 青森県教育委員会 1987『大石平遺跡 III』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 青森県教育委員会 1999『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 2003『岩渡小谷(3)・(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第352集
- 青森県教育委員会 2004『岩渡小谷(4)遺跡 II』青森県埋蔵文化財調査報告書第371集
- 青森県教育委員会 2005『通日木遺跡・ふぐべ(3)遺跡・ふぐべ(4)遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
- 青森県教育委員会 2006『近野遺跡 IX』青森県埋蔵文化財調査報告書第418集
- 青森県教育委員会 2008『坪毛沢(1)遺跡 II・柴山(1)遺跡 II・大坊頭遺跡・赤平(1)遺跡・
赤平(2)遺跡 II』青森県埋蔵文化財調査報告書第449集
- 青森県教育委員会 2008『長久保(2)遺跡 II・中居林遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第454集
- 青森県教育委員会 2009『長久保(2)遺跡 III・糠塚小沢遺跡 II・中居林遺跡 II』
青森県埋蔵文化財調査報告書第470集
- 青森県教育委員会 2009『前川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第475集
- 八戸市教育委員会 1998『八戸城跡 I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 八戸市教育委員会 2002『新井田古館遺跡 II』八戸市埋蔵文化財調査報告書第94集
- 八戸市教育委員会 2004『田向遺跡 I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第105集
- 八戸市教育委員会 2005『是川中居遺跡 4』八戸市内遺跡発掘調査報告書20』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第107集
- 八戸市教育委員会 2007『八幡遺跡 発掘調査報告書IV』八戸市埋蔵文化財調査報告書第115集
- 八戸市教育委員会 2009『田向遺跡 II』八戸市埋蔵文化財調査報告書第122集
- 弘前市教育委員会 2009『史跡津軽氏城跡 堀越城跡発掘調査報告書 X』
- 平賀町教育委員会 1999『大光寺新城跡遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第24集
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27集
- 石田茂作監修 1984『新版仏教考古学講座 第五巻 仏具』雄山閣
- 宇部則保 2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマンー市川金丸先生古稀記念献呈
論文集一』市川金丸先生古稀を祝う会
- 榎本剛治 2008「十腰内 I 式土器」『総覧 繩文土器』小林達雄編 総覧繩文土器刊行会
- 大橋康二・西田宏子監修 1988『古伊万里 日本のこころ 63』別冊太陽 平凡社
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小保内裕之 2003『信仰の道具』『青森県史 資料編 考古 4 中世・近世』
- 小保内裕之 2004「八戸市松ヶ崎遺跡出土の繩文時代中期後半の土器について」『第2回 東北・
北海道の繩文時代中期後葉の諸問題 資料集』海峡土器編年研究会

- 葛西勲 2006『統・再葬土器棺墓の研究—切断蓋付土器と子供の再葬を考える—』
再葬土器棺墓の研究刊行会
- 可児通宏 2008『縄文の施文原体と文様』『総覧 縄文土器』
小林達雄編 総覧縄文土器刊行会
- 草野和夫 1993『東北民家史研究』中央公論美術出版
- 工藤清泰 2003『中世の陶磁器と変遷』『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 工藤竹久 2005『青森県の弥生土器』『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 櫻木晋一 2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
- 下中直人 2000『増補 やきもの事典』平凡社
- 鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 関根達人 2003『近世の陶磁器とその変遷』『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 関根達人・西沢宏子 2007『十三湊遺跡の近世陶磁器』『津軽十三湊遺跡—中世前期港湾施設の調査 第157次調査ほか—』中央大学文学部日本史学研究室埋蔵文化財調査報告書第1集
- 高島成侑・三浦忠司 1983『南部八戸の城下町 むかしのはちのへを偲んで』伊吉書院
- 高橋與右衛門 1989『掘立柱建物跡の間尺と時代性—民家の間尺と比較して—』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 紀要IX』
- 竹田聰洲 1994『葬史と宗史 竹田聰洲著作集第七巻』国書刊行会
- 成田滋彦 1989『入江・十腰内土器様式』『縄文土器大観 4 後期・晚期・統縄文』小学館
- 成田滋彦 2003『十腰内I式土器とは』『第1回 東北・北海道の十腰内I式再検討資料集』海峡土器編年研究会
- 星雅之・茅野嘉雄 2006『十和田中振テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相』『植生史研究特別第2号 三内丸山遺跡の生態系史』日本植生史学会
- 藤沼邦彦・関根達人 2008『亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）』『総覧 縄文土器』小林達雄編 総覧縄文土器刊行会
- 四柳嘉章 2006『漆I』法政大学出版局
- 四柳嘉章 2006『漆II』法政大学出版局

懸空住居跡

図版号	遺構 多分	グリッド	確認済	平面形	開口部幅高(cm) 側面×前側×後側	底床横(m)	出土遺物	時期	備考
国31	3	BB-C-11+12	■	楕円形	(148) × 49 × 79	07.30	調文土器	先秦	合計 長902×厚600×高13.6cm
国37	6	BB-L-19	■	円形	282 × 279 × 83	4.5	調文土器	調文	
国38	7	BB-W-34	IV	楕円形	300 × 216 × 40	4.5	調文土器, 刺片石器	調文	
国39	8	BB-W-34	IV	楕円形	282 × 190 × 52	5.80	調文土器	調文	
国40	9	BB-W-35	IV	楕円形	282 × 190 × 69	5.47	調文土器, 刺片石器, 磨石器	調文	SK115<
国43	10	BB-27+28	IV	楕円形	(261) × 300 × 29	10.50	調文土器, 刺片石器, 磨石器	調文	
国44	11	BB-W-26	II	楕円形	(283) × 95 × 49	15.2	調文土器, 磨石器	調文	
国54	12	BB-W-35	II	方形?	(260) × (136) × 53	15.40	調文土器, 上輪器	古代	
国55+56	13	BB-26+27	■	方形?	466 × 439 × 75	(19.5)	調文土器, 上輪器, 刺片石器, 磨石器	古代	
国58	14	CE-26+27	V	方形?	(199) × (175) × 37	53.2	調文土器, 上輪器	古代	
国59	15	BY-32+33	V	方形?	不明	磨石器	不明		
少番	16	矢条							SK131に変更
国58	17	BB-24+25	IV	方形?	258 × (12) × 33	(5.1)	上輪器, 上製品	古代	

上坑・下窓 中央棟出敷48基の内、整列時に複数のものと判断したものの復元上図ではないと判断したものは矢番とした。

図版号	遺構 番号	グリッド	確認済	平面形	隠れ底床高(cm) 長軸×短軸×高さ	直積	出土遺物	時期	備考
国59	27	RQ-23	V	楕円形	89 × 79 × 14			不明	
国15	28	BB-28	IV	円形	96 × 79 × 44		調文土器	調文	
国59	30	BB-1+16	■	圓形	65 × 59 × 19		調文土器	不明	
国59	31	BB-17	■	不規形	(91) × (98) × 24	SK32<	上輪器	不明	
国59	32	BB-17	■	方形	(91) × (59) × 30	SK31>	調文土器	不明	
国59	33	BB-W-14	■	円形	108 × 103 × 15			不明	
国59	35	BB-20+21	■	円形	71 × 63 × 16			不明	
国59	36	BB-21	■	円形	68 × 60 × 13			不明	
国59	37	BB-21	■	円形	102 × 95 × 29			不明	
国59	38	BB-22	■	円形	64 × 60 × 15			不明	
国59	39	BB-22	■	椭圆形	63 × 57 × 17			不明	
国59	40	BB-22	■	円形	77 × 74 × 15			不明	
国59	41	BB-W-14	IV	円形	69 × 64 × 31			不明	
国59	42	BB-14+15	IV	椭圆形	107 × 73 × 31			不明	
国59	43	BB-15	IV	方形	28 × 75 × 32			不明	
国59	44	BB-15	IV	方形	71 × 63 × 31			不明	
国59	45	BB-15	IV	不規形	20 × 53 × 31			不明	
国59	46	BB-15+16	■	円形	66 × 60 × 30			不明	
国59	47	BB-15+16	■	椭圆形	67 × 69 × 34			不明	
国59	48	BB-15	■	椭圆形	72 × 66 × 17			不明	
国59	49	BB-W-21	■	円形	(96) × (63) × 26	SK318<		不明	
国59	50	BB-W-21	■	方形?	(96) × (60) × 26	SK314>		不明	
国59	53	BB-14	IV	椭圆形	104 × 86 × 16			調文	
国59	54	BS-14	IV	椭圆形	116 × 62 × 24			調文	
国59	55	BB-15	IV	円形	87 × 63 × 64			調文	地溝り
国59	56	BB-15	IV	円形	69 × 64 × 40			不明	
国59	57	BB-15	IV	円形	95 × 43 × 26			不明	
国59	58	BB-15	IV	円形	60 × 56 × 25			不明	
国59	59	BB-14+15	IV	円形	113 × 103 × 37			調文	
国59	60	BB-15	IV	円形	101 × 92 × 49			調文	
国59	61	BB-17	■	椭圆形	96 × 72 × 17			不明	
国59	62	BB-16	IV	円形	37 × 53 × 25			不明	
国59	63	BB-15	■	円形	94 × 93 × 50			調文	
国59	64	BB-16	IV	円形	103 × 98 × 11			調文	
国59	66	BB-15	IV	椭圆形	115 × 98 × 39			調文	
国59	69	BB-15	IV	円形	119 × 104 × 55			調文	
国70	71	BB-21	■	円形	54 × 53 × 15			不明	
国59	72	BB-15	IV	円形	109 × 102 × 34			調文	
国70	76	BB-21	■	方形?	39 × 44 × 23	SK76<		不明	
国70	77	BB-21	■	円形	(79) × (71) × 16	SK76>		不明	
国70	78	BB-22	■	不規形	(72) × (26) × 14	SK79>		不明	
国70	79	BB-22	■	円形	90 × 89 × 17	SK78<		不明	
国59	81	BB-16	IV	円形	155 × 154 × 95			調文	底面ごとにビット
国59	84	BB-15	IV	円形	111 × 106 × 47			調文	
国70	85	BB-15	■	不規形	82 × 75 × 28			不明	
国70	87	BB-16	IV	円形	52 × 70 × 17			不明	
国70	88	BB-16	IV	円形	43 × 41 × 29			不明	
国70	89	BB-16	■	円形	(113) × (106) × 31	SK89>		不明	
国70	90	BB-16	■	椭圆形	(161) × (90) × 24	SK89<		不明	
国59	91	BB-17+22	V	円形	121 × 113 × 40			調文	
国70	94	BB-23	■	円形	29 × 26 × 12			調文	
国59	96	BB-28	IV	円形	96 × 85 × 61			調文	
国70	99	BB-24	■	円形	72 × 65 × 16			調文	
国70	101	BB-N-23	■	円形	71 × 70 × 17			調文	
国59	103	BB-22	■	不規形	112 × 89 × 74			調文	
国70	106	BB-22+23	■	円形	74 × 64 × 13			調文	
国71	107	BB-24	■	円形	98 × 89 × 28			調文	
国71	109	BB-24	■	円形	73 × 69 × 29			調文	
国71	110	BB-24	■	円形	91 × 65 × 14			調文	
国59	111	BB-23	■	円形	(48) × 50 × 20	SK112>		調文	
国59	112	BB-23	■	円形	75 × 62 × 19	SK111<		調文	
国59	113	BB-O-28	IV	円形	161 × 158 × 96			調文	底面ごとにビット
国59	114	BB-O-24	V	円形	92 × 96 × 54			調文	底面ごとにビット
国71	115	BB-35	IV	椭圆形	(97) × (96) × 68	ST9>		不明	
国59	116	BB-27	IV	不規形	126 × 93 × 49			調文	
国71	117	CE-26	V	方形	108 × 91 × 13			不明	
国71	118	C1-29	X	円形	(91) × (97) × 26			不明	
国71	120	C1+8-30	X	長方形	133 × 105 × 66			不明	

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
図71	121	OB-30	IX	円形	88×87×深さ2			不明	
図71	123	CV-29	VII	円形	89×79×24			不明	
図71	124	BD-B-35	VII	円形	130×114×35			不明	軽薄な小ピット
図71	125	CV-30	VII	円形	90×97×55			不明	
図71	126	CV-29	VII	円形	81×71×84			不明	
図71	127	CV-Y-21-32	VII	円形	69×82×46			不明	
図71	128	CV-31	VII	方形	137×121×41			不明	
図72	130	CV-31	VII	円形	195×176×41			不明	
図16	131	BQ-35	IV	円形	135×130×122		調文土器、利弓石器、礫石器	調文	
図16	132	BH-28	IV	橢円形	169×177×81			調文	
図17	133	BD-E-25	IV	円形	123×147×89			調文	底面に小ピット
図72	135	CD-33	IX	方形	67×67×46			不明	
図72	136	CQ-30+31	IX	方形	180×143×25		調文土器	不明	
図72	137	CP-30	IX	方形	76×70×46			不明	
図67	138	CQ-30	IX	橢円形	118×97×42		調文土器、陶器器、土師器	近世	19c 中
図72	140	CS-30	X I	円形	113×100×20	SK141<		不明	
図72	141	CS-30	X I	円形	66×78×47	SK140>		不明	
図72	143	CS-32	X I	円形	71×66×53			不明	
図47	145	BF-F-23+24	III	円形	(135)×(130)×113		古鉄、錫管	近世	古登京の可能性有
図72	146	CS-33	X I	円形	150×142×37			不明	
図72	147	CG-33+34	X I	円形	90×90×(65)×28		石製品、礫石器	不明	
図72	148	CT-33	VII	円形	79×79×36			不明	
図73	152	CS-32	X I	円形	59×97×23		上製品	不明	
図73	155	CS-32	X I	円形	91×98×22			不明	
図47	160	OD-33	X I	円形	68×68×61		調文器	近世	19c
図73	164	BB-25+26	IV	橢円形	77×26×16		調文土器	不明	
図73	165	BB-26	IV	橢円形	159×127×92			調文	
図73	166	CF-26+27	VII	円形	(100)×(97)×21			不明	
図47	170	CS-28+29	X	方形	(320)×(141)×23	SK171<		近世	
図47	171	CS-28+29	X	扇形	(320)×(98)×23	SK170>	調文器	近世	19c
図73	172	CT-28	X	方形?	156×86×20			不明	

遺状土器一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
図17	1	HE-35+36	IV	横状	300×23×60	SB05>	調文土器	調文	

遺物一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
図74	1	BJ-30+BK-30	VI	直線状	(530)×108×79	SK2	調文土器	不明	
図74	2	AB-12+AB-13	III	直線状	(530)×72×35			不明	
図74	3	BT-22+BT-23	VI	直線状	(472)×74×46		調文土器、礫石器	不明	
図74	4	BJ-34+BK-35	III	直線状	(720)×136×16		調文土器、土師器	不明	
図74	5	BE-35+BE-37	IV	直線状	(712)×95×39	SK1<	調文土器、土師器	不明	
図76	6	BE-26+BE-29	IV	直線状	(1549)×127×92		調文土器、礫石器	不明	
図75	7	BS-26+BS-28	IV	直線状	(610)×53×29			不明	
図76	8	BS-35+BS-36	III	弧状	789×172×112	SD101<	調文土器、土師器、礫石器	不明	
図75	9	BQ-32+BD-23	VII	直線状	(692)×84×36		調文土器	不明	
図76	10	BS-32+BD-33	V	直線状	726×64×13	SD08>	調文土器、礫石器	不明	
図76	11	BR-32+BR-33	V	直線状	(412)×60×15			不明	
図75	12	BR-32+BR-33	V	直線状	967×43×96			不明	
図75	13	CC-27+OC-28	X	直線状	(563)×99×55			不明	
図76	14	CC-25+CC-27	X	直線状	(1376)×54×43		調文土器	不明	
図76	15	CK-26+CL-22	IX	弧状	(1449)×85×69		調文土器、土師器	不明	
図49+53	16	CE-26+CE-27	X	直線状	(874)×499×143		調文土器、土師器、石製品、木製品、礫石器	近世	
図76	17	CK-29+CK-29	X	直線状	(358)×45×11			不明	
図76	18	CH-28+CL-28	X	直線状	(1284)×152×95			不明	
図77	19	CH-28+CL-28	X	直線状	1228×51×45			不明	
図77	20	CH-28+CL-28	X	直線状	964×100×16			不明	
図77	21	CO-27	IV	不規	(157)×117×175		調文土器	不明	

丹戸跡一覧
空塙横穴式柱孔の内、現代のものと判別したものを記す。

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
-	1	CH-32	IX	円形	96×9×不明		調文土器、脚部器	不明(近世?)	
-	4	CG-30	IX	円形	199×180×不明		調文土器、脚部器	不明(近世?)	
図77	11	CO-27	V	円形	84×97×不明		調文土器	不明(近世?)	

地上遺構一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
図77	17	BL-20	III	不齊円形	69×37×13			不明	
用金不齊圓形一覧									
図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(cm)	重複	出土遺物	時期	備考
図49+52	武1	OB-L-26~20	IX	直線状	SD409×779×114	SD15+16+18+	調文土器、石器、土師器、鐵製品、木製品、礫石器	調文~近世	
図54	武2	OB-L-29+30	VI	直線状	SD2209×479×224	SD1	調文土器、石器、土師器、土器、木製品	調文~近世?	

調査文書類表

番号	出土 位置	層位	器種	保存部位	特徴		型式・時期	備考
					外側	内側		
國7-1	S16	3層 堆積上	深鉢	口縁部 ～底部	単脚L脚横回	ナデ 輪埴底	後期後葉～後期	D径30.0cm、器高34.7cm、底径9.4cm、口縁部に捺付孔2個、内縫接合、P1. ～31・34～36・49個、内縫接合、P1. ～64
國7-2	S16	堆積上	深鉢	口縁部	復脚L脚横回	ナデ	後期	
國8-1	S17	床面直上・ \pm 1層 埴積上	深鉢	口縁部	単脚L脚横回、滑擦文	ナデ	茎花式～大木10式並行	捺付孔1個、P2
國8-2	S17	堆積上	深鉢	口縁部	単脚第5類(無脚)、口質面部取り	ナデ	後期初期	
國8-3	S17	堆積上	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	後期	口縁部肥厚
國8-4	S17	堆積上	鉢	口縁部	ミガキ(横回)、横回(横回)、口縁部に段段	ナデ	後期初期	
國8-5	S17	堆積上	鉢	口縁部	横回(横回)、口縁部面取り、單脚孔2	ナデ	後期初期	
國8-6	S17	床面直上	鉢	口縁部	横回(横回)、口質面部取り	ナデ	後期初期	外縫に捺付孔、P19
國8-7	S17	堆積上	深鉢	口縁部	無脚横回	ナデ	後期	P3
國8-8	S17	堆積上	深鉢	口縁部	単脚L脚横回	ナデ	後期	P17
國8-9	S17	堆積上・床面直上	深鉢	脚部	単脚L脚横回・縱回	ナデ	中期後葉～末葉	外縫に捺付孔、南端部に微彎混入、P. 19・35
國8-10	S17	堆積上	深鉢	脚部	単脚L脚横回	ナデ	中期後葉～後期初期	P11
國8-11	S17	床面直上	鉢	脚部	単脚L脚横回(多条)、滑擦文	ナデ	円錐内1式	P18
國8-12	S17	床面直上	鉢	脚部	単脚L脚横回(多条)、滑擦文	ナデ	後期中葉	内縫に保付孔、P25
國8-13	S17	\pm 1層堆積上	深鉢	脚部	単脚L脚横回	ナデ	後期初期	外縫に捺付孔、余縫に中葉混入
國8-14	S17	堆積上	鉢	底部	単脚L脚横回	ミガキ →ナデ	後期	底径7.9cm
國9-1	S18	堆積上・ Ⅰ・Ⅱ層	鉢	脚部	ミガキ、沈擦文、穿孔1個	ミガキ	後期初期	銅足最大径17.3cm
國11-1	S19	床面直上・堆積上・ Ⅱ・Ⅲ層	深鉢	底部	単脚L脚縱回(一部缺歯)	ナデ	後期初期～中期	D径21.6cm、器高26.4cm、底径8.7cm、 外縫部よりP163～167、 169・170・172～175・183・185
國11-2	S19	3層・床面直上・ Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	口縁部 ～脚部	皮吹口縁、捺付孔、ナデ、単脚L脚縱回	ナデ 輪埴底	後期初期	南端部對凹混入、P34
國11-3	S19	堆積上・ Ⅱ・Ⅲ層	深鉢	脚部	皮吹口縫、捲筋(崩れ例)、兩端に輪狀 突起が付く構造装飾、ミガキ	ナデ	後期初期	南端部對凹混入、P34
國11-4	S19	堆積上	鉢	口縁部	捲筋、口縫部面取り、ナデ	ナデ	後期初期	P47
國11-5	S19	堆積上・下層	深鉢	口縁部	皮吹口縫、沈擦文、脚部捲筋、ミガキ	ミガキ	十瓣内1式	P73
國11-6	S19	SK1・堆積上	深鉢	口縁部	単脚L脚縱回	ナデ	中期後葉～後期初期	D径29.4cm、口縫部底に捺付孔1個、外縫接合、南端部對凹混入
國11-7	S19	SK1・堆積上	深鉢	口縁部	単脚L脚、無脚(異名)縱回、折り返し 口縫	ナデ	中期後葉～後期初期	南端部對凹混入
國11-8	S19	堆積下層・堆積 上・床面・SK1 ・2・3層 堆積上	深鉢	脚部	速造捲筋文、沈擦、無脚L脚縫回	ナデ	後期初期	P57・66・118・123～125・128・ 129・131～133・142～147・149
國11-9	S19	床面直上	深鉢	脚部	捲筋文、單脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期初期	
國11-10	S19	床面直上	深鉢	脚部	捲筋文、ナデ	ナデ	中期後葉～後期初期	南端部對凹混入、P151
國11-11	S19	3層・堆積上	深鉢	脚部	捲筋文に上唇木紋装饰	ナデ	後期初期	
國11-12	S19	SK1・堆積上	深鉢	脚部	捲筋文、ナデ	ナデ	後期初期	P60
國12-1	S19	3・6層・堆積上 堆積上・下層 Ⅱ・Ⅲ層	深鉢	脚部	無脚(一部缺歯)	ナデ	中期後葉～後期	板縫に2・3脚部外縫接合、内縫部に 捺付孔、外縫接合、P10・17・19・ 21・36・38・39・44・46・96・97・ 99・108・109・180
國12-2	S19	3層・堆積上・下層	深鉢	脚部	明脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期	板縫10.6cm、内縫に捺付孔、外縫接 合、P76・139・161・171
國12-3	S19	2層・堆積上・下層 床面・SK1・堆積上	深鉢	脚部	単脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期	
國12-4	S19	3層・堆積上・下層 SK1・堆積上	深鉢?	脚部	捲筋文、ナデ	ナデ	茎花式～大木10式並行	P64・135
國12-5	S19	5層	深鉢	脚部	単脚L脚縫回(多条)	ナデ	中期後葉～後期	南端部對凹混入、外縫接合、P115
國13-1	S10	床面直上	鉢	口縁部	満透文、沈擦文、ナデ	ナデ	茎花式～大木10式並行 →P11	(ミチヨ)上唇カ、南端部對凹混入、 ナデ
國13-2	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、半脚L脚縫回、口引出面取り	ミガキ	後期初期	口徑(28.3cm)、内縫割離
國13-3	S10	床面直上	深鉢	脚部	半脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期	南端部對凹混入、P16
國13-4	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、沈擦文、半脚L脚縫回	ナデ	茎花式～大木10式並行	山形多量混入
國13-5	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、沈擦文、半脚L脚縫回、捲筋回	ナデ	中期後葉～後期	山形多量混入
國13-6	S10	確認面・堆積上・ Ⅱ・Ⅲ層堆積上	深鉢?	脚部	捲筋文、ナデ、口引出面取り、單脚L脚縫回、 横回	ナデ	後期初期	口徑(28.3cm)、内縫割離
國13-7	S10	1層	深鉢	口縁部	介縫文に上縫、無脚L脚縫回	ナデ	後期初期	南端部對凹混入
國13-8	S10	確認面	深鉢?	脚部	単脚L脚縫回(横回)	ナデ	中期後葉～後期初期	外縫接合
國13-9	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文	ナデ	中期後葉～後期初期	
國13-10	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文	ナデ	中期後葉～後期初期	
國13-11	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、沈擦文、脚部捲筋、單脚L脚縫回、 横回	ナデ	後期初期	
國13-12	S10	床面直上	深鉢	脚部	口縫回文、半脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期初期	P9・10
國13-13	S10	確認面	深鉢?	脚部	半脚L脚縫回(多条)	ナデ	中期後葉～後期初期	外縫接合
國13-14	S10	床面直上	鉢	脚部	介縫文、沈擦文、ミガキ	ミガキ	十瓣内1式	外縫接合、南端部對凹混入
國13-15	S10	1層・確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、無脚L脚縫回、横回、ナデ	ナデ	後期初期	
國13-16	S10	確認面	深鉢?	脚部	口縫回文、ナデ	ナデ	中期後葉～後期初期	
國13-17	S10	1層・確認面、床 面直上	深鉢	脚部	単脚L脚縫回	ナデ	中期後葉～後期	直径(31.0cm)、外縫に捺付孔、南端 部對凹混入、P6・26・29

図番号	出土位置	層位	器種	推存部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	里面		
図13-18	S110	磚認面・底面・堆積土	深鉢	底部 口縁部 ～胴部	单唇口縁部 B突起、單脚柱横回(一部結び?)	ナゲ	中期後葉～後期	直径8.3cm、内外面に環付着、被熱により赤変
図14-1	S111	理政炉・炉体	深鉢	口縁部 ～胴部	B突起、單脚柱横回(一部結び?)	ナゲ	後期中葉～後期	口径23.9cm、内外面に環付着、被熱により赤変
図14-2	S111	1層	深鉢	口縁部 ～胴部	单唇口縁部	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着、南端骨針痕量混入
図15-1	S28	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着
図15-2	S660	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着
図15-3	S91	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着、外縁結合
図15-5	S96	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部、横環底	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着、外縁結合
図16-6	S96	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	横環底	ナゲ	後期初期	
図17-2	S96	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	横環底	ナゲ	中期後葉～後期	内面に環付着
図18-9	SK131	2層・堆積土	深鉢	口縁部 ～底部	口縁部取り、口縁部に無文格、千眼で 19mm、外縁に火炎文4単脚	ナゲ	最光式～大10式並行	口径21.3cm、内外面に環付着、被熱により赤変
図18-10	SK131	確認面	鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部	ミガラ	中期後葉～後期	内面に環付着
図18-11	SK131	堆積土	深鉢	口縁部 ～底部	有口直し口縁、单脚柱横回	ナゲ	中期後葉～後期	外縁結合
図18-12	SK131	確認面	鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部、火炎文、ガヨキ	ナゲ	中期後葉～後期	内面赤変
図18-13	SK131	堆積土	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部、ガヨキ	ナゲ	中期後葉～後期	内面環付着
図18-14	SK131	確認面・I・II層	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部(底取)	ナゲ	中期後葉～後期初期	内面に環付着、火炎文
図18-15	SK131	2層・堆積土・確認面	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	中期後葉～後期初期	内面に環付着、火炎文
図18-16	SK131	堆積土	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	後期か	口径5.5cm、外表面により剥離、内外面に環付着
図18-17	SV1	堆積土	深鉢	胴部 ～底部	火炎文、横斜溝、单脚柱横回	ナゲ	後期か	口径17.8cm、深さ24.5cm、底厚8.4cm、内面被熱により上り剥離、内外面に環付着
図22-1	遺構	RF-21・RF-22・II層・外縁	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部、火炎文、始末第1種(单脚 LF-1型)	ナゲ	円錐上端d式	内面に環付着、口縁部に補強孔3個
図22-2	遺構	RF-24・RF-25・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	口状突起(單脚柱底取)、單脚柱横回、 火炎文、ガヨキ	ナゲ	円錐下端d式	内面に環付着
図22-3	遺構外	BD-30・黒帯	深鉢	口縁部	珠狀口縁部、单脚柱(单脚LF-1型)	ナゲ	円錐上端b式	確認骨針痕量混入
図22-4	遺構外	BI-22・II層	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部	ナゲ	円錐上端d式	
図22-5	SP109	堆積土	深鉢	口縁部 ～底部	火炎文、周沿火炎、单脚柱横回	ナゲ	最光式～大10式並行	内外面赤変
図22-6	遺構外	RF-13・II層・田端	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部(朝天型)、单脚柱横回	ナゲ	後期初期	内外面赤変
図22-7	遺構外	BI-29・I層	深鉢	口縁部 ～底部	口状突起(单脚柱底取)、陈善文、ナゲ	ナゲ	後期初期	
図22-8	遺構外	BD-27・黒帯	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部、火炎文、ナゲ	ナゲ	後期初期	
図22-9	遺構外	BD-29・カクラン	深鉢	口縁部 ～底部	珠狀口縁部、单脚柱(单脚LF-1型)?、ガヨキ状 火炎文	ナゲ	後期初期	
図22-10	遺構外	BI-34・堆積土上層	深鉢?	胴部 ～底部	单唇口縁部、火炎文、沈善文	ナゲ	後期初期	
図22-11	遺構外	BI-35・II層	深鉢・L	口縁部 ～底部	珠狀口縁部、珠狀底取(单脚LF-1型)、火炎文、沈善文	ナゲ	後期初期	内面骨針痕量混入
図22-12	遺構外	BD-31・黒帯	深鉢	胴部 ～底部	单唇口縁部、单脚柱横回	ナゲ	後期初期	外縁結合
図22-13	遺構外	RF-10・12・BK-12 II・黒帯	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、押け出し口縁、口部微凹取、 消防栓文、单脚LF-1型部、横環、ナゲ	ナゲ	後期初期	口径30.3cm
図22-14	遺構外	RF-18・II層	深鉢・L	口縁部 ～底部	珠狀口縁部、火炎文、周沿火炎	ナゲ	後期初期	内面環付着、外縁結合
図22-15	遺構外	RC-25・III層	深鉢	口縁部 ～底部	周沿火炎文、单脚柱横回、横環	ナゲ	後期初期	内面環付着、外縁結合
図22-16	遺構外	RC-29・カクラン	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、珠狀底取、横環	ナゲ	後期初期	内面環付着、外縁結合
図22-17	遺構外	BD-23・II層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、横環、沈善文、单脚柱横回	ナゲ	後期初期	
図22-18	遺構外	RF-35・II層	深鉢	口縁部 ～底部	单唇口縁部、压縮火炎、横環、沈善文	ナゲ	後期初期	
図22-19	遺構外	BL-34・II層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、压縮火炎、横環、沈善文、ナゲ	ナゲ	後期初期	内面骨針痕量混入
図22-20	遺構外	BL-26・II層	鉢?	口縁部 ～底部	口状突起(单脚柱底取)、横環、沈善文	ナゲ→ ミガラ	後期	内外面環付着、南端骨針混入
図22-21	遺構外	BL-26・II層	深鉢	口縁部 ～底部	珠狀口縁部、单脚柱横回	ナゲ	後期初期	内面環付着、外縁結合
図22-22	遺構外	BF-26・26・27、 RF-26・27・II層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、口縁部横環、沈善文、ナゲ	ナゲ	十幅内I式	口径20.1cm、深さ28.4cm、底厚 3.8cm、外表面被熱、被熱により赤變、剥離
図22-23	遺構外	RF-35・II層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、横環、沈善文	ナゲ	後期初期	
図22-24	遺構外	RF-34・カクラン	鉢?	口縁部 ～底部	皮状口縁部、压縮火炎、沈善文	ナゲ	十幅内I式	内外面環付着、外縁結合
図22-25	遺構外	BL-9・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	横環文、ナゲ	ナゲ	十幅内I式	口径7.5cm、器高6.8cm、底厚3.8cm
図22-26	遺構外	RF-29・カクラン	鉢?	口縁部 ～底部	压縮火炎、火炎文、沈善文	ナゲ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-27	遺構外	RF-33・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	珠狀口縁部、压縮火炎、沈善文、ナゲ	ナゲ	十幅内I式	口径15.6cm、底厚8.8cm、底厚 3.8cm、内面骨針痕量混入
図22-28	遺構外	RF-35・II層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-29	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、单脚柱横回、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-30	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	皮状口縁部、单脚柱横回、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-31	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-32	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-33	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-34	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-35	遺構外	RF-35・II・III層	深鉢	口縁部 ～底部	沈善文、ミガキ	ミガキ	十幅内I式	内面骨針痕量混入
図22-36	遺構外	RF-31・II層	鉢?	口縁部 ～底部	沈善文	ナゲ	後期	口径(5.6)cm、器高5.9cm、底厚2.6cm、 ミニチュア器

図面番号	埋土位置	層位	器種	現存部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
0024-17	遺構外	BL-16 II層	鉢	口縁部・底部	指紋压痕	指紋压痕	後期	口径8.9cm、器高7.3cm、底径4.6cm、手堅化
0025-1	遺構外	BL-21, BL-21, BL-22 I・II層	壺	腹部	沈殿文、ミガキ	ケズリ→ナダ	十輪内 I式	
0025-2	遺構外	BL-21・22 II層	壺	腹部	指紋文、ミガキ	ナダ	十輪内 I式	跡の可能性もあり
0025-3	遺構外	カクラン	陶鉢	指紋文、單唇(上唇凹)		後期中葉～後葉		
0025-4	遺構外	BL-15 II層	壺	口縁部	指紋文、單唇(上唇凹)	ケズリ	十輪内 I式	
0025-5	遺構外	鉢	口縁部	ナダ、輪底凹	ナダ	後葉	口径1.3cm、ミニチュア器か	
0025-6	遺構外	BL-18 II層	壺	腹部	指紋文、ミガキ	ケズリ	十輪内 I式	切削痕
0025-7	遺構外	BL-28 カクラン	壺	腹部	沈殿文、ミガキ	ケズリ	十輪内 I式	外輪接合
0025-8	遺構外	BL-35 II層	陶鉢	口縁部	口唇部取起・指紋黒文、平行文、單唇(上唇凹) (空巣)	ナダ	十輪内 II式	内外面に保付窓
0025-9	遺構外	BL-22 II層	陶鉢	口縁部	大型外脛(内腹側込み)、薄唇、單唇(上唇凹)	ナダ	十輪内 II式	外輪被熱により赤変、南端骨付痕切入
0025-10	遺構外	BL-19 II層	鉢	口縁部	口唇部取起・沈殿、瓶状突起、沈殿文、刻剥跡、ミガキ			
0025-11	遺構外	BL-14, BL-15 I・II層	壺	腹部	ケズリ→ナダ	ケズリ	後期	脚部最大径(7.8)cm
0025-12	遺構外	BL-12 II層	鉢	口縁部	口唇部取起・沈殿文、單唇(上唇凹)	ナダ	前期中葉	
0025-13	遺構外	BL-12 II層	陶鉢	口縁部	口唇部取起・沈殿、ナダ	ナダ	前期中葉	南端骨付痕切入
0025-14	5112	鉢	腹部	單唇(上唇凹)、沈殿文	ナダ	前期	P1	
0025-15	SK109	堆積土	鉢	腹部	沈殿文	ナダ	十輪内 I式	
0025-16	遺構外	BL-20 II層	鉢・浅鉢	口縁部	山吹文取起、三叉文	ミニ文	大輪C 2式・A式	
0025-17	遺構外	BL-30 II層	甕・鉢	底部	下部に段差、ミガキ	ミガキ	後期中葉～後葉	長頸瓶の可能性あり
0025-18	遺構外	BL-13 II層	壺	腹部	手子、單唇(上唇凹)	ナダ	大輪A式	
0025-19	遺構外	BL-32 II・III層	陶鉢	口縁部	口唇部や面取り、單唇(上唇凹)	ナダ	中期後葉～末葉	脚部最大径(9.0)cm、外輪接合
0025-20	SK48	BL-35 堆積土	陶鉢	口縁部	粘土第2種? (無端) 薄唇	ナダ	中期後葉～末葉	口径21.10cm、外輪剥離、外輪接合、南端骨付痕切入
0025-21	遺構外	BL-26 II層	陶鉢	单唇(上唇凹)	单唇(上唇凹)、粘土第2種? (無端) (空巣)	ナダ	中期後葉～末葉初期	内面保付窓、赤変度高い、外輪接合
0025-22	遺構外	BL-27 カクラン	陶鉢	单唇(上唇凹)	单唇(上唇凹)、粘土第2種? (無端) (空巣)	ナダ	中期後葉～末葉	内面保付窓、外輪接合
0025-23	遺構外	BL-26 II・III層	陶鉢	口縁部	引り出し口縁、口唇部面取り、單唇(上唇凹)	ナダ	中期後葉～後葉	南端骨付痕切入
0026-1	遺構外	BL-13 II・III層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹)	ナダ	後期中葉～後葉	
0026-2	遺構外	BL-35, BL-34 III層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹)、横脚、脚部(縦脚)	ナダ	後期中葉～後葉	口径23.3cm、器高33.9cm、底径10.1cm、外輪保付窓、外輪接合
0026-3	遺構外	BL-28 カクラン	陶鉢	口縁部	口唇部や面取り、單唇(上唇凹) (風呂文)	ナダ	中期後葉～後葉	南端骨付痕切入、外輪保付窓
0026-4	遺構外	BL-34・36 II層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹)	ナダ	後期	補修孔1個、内外面保付窓
0026-5	遺構外	BL-12 III層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹) (多条・結節) 薄唇	ナダ	前期南葉	鐵錆斑点、施文によってS字状を呈する。白厚心。
0026-6	遺構外	BL-13, BL-13 III層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹) (多条) (無端) 薄唇	ナダ	後期中葉～後葉	口径19.7cm
0026-7	遺構外	BL-24 II層	陶鉢	口縁部	無端(上唇凹)	ナダ	後葉	南端骨付痕切入
0026-8	遺構外	BL-13 II層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹)、单唇(上唇凹) (結節)	ナダ	円筒下唇式	鐵錆・南端骨付窓、補修孔1個、施文によってS字状を呈する。
0026-9	遺構外	BL-18 II層	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹) (結節)	ナダ	円筒下唇式	鐵錆斑点、施文によってS字状を呈する。
0026-10	遺構外	BL-18 II層	鉢	口縁部	引り出し口縁、口唇部面取り、單唇(上唇凹) (多条)	ナダ	後期初期	
0026-11	遺構外	BL-26, BL-26, BL-27, BL-26, BL-27 II層	陶鉢	口縁部	引り出し口縁、口唇部面取り、單唇(上唇凹)	ナダ	後期初期	
0026-12	遺構外	BL-18 III層	鉢	口縁部	口縫込込み、單唇(上唇凹)	ナダ	後葉	
0026-13	遺構外	カクラン	陶鉢	口縁部	引り出し口縁、單唇(上唇凹)	ナダ	中期～後葉	南端骨付痕切入
0027-1	遺構外	BL-25 カクラン	陶鉢	口縁部	单唇(上唇凹) + 单唇(上唇凹) (付加垂)	ナダ	後期	底径12.3cm、内外面に保付窓、外輪接合
0027-2	遺構外	BL-15 II・III層	陶鉢	底部	格子文(沈殿文)	ナダ	十輪内 I式	外輪接合
0027-3	遺構外	BL-13 III層	陶鉢	底部	粗筋1 A脚 (無端) + 单唇(上唇凹)	ナダ	前期	鐵錆斑点
0027-4	9795	堆積土	陶鉢	底部	单唇(上唇凹) 横脚	ナダ	後期	南端骨付痕切入
0027-5	遺構外	BL-29 II層	陶鉢	底部	粗筋1 A脚 (無端)	ナダ	後葉	白厚心
0027-6	遺構外	BL-29 堆積土	陶鉢	底部	单唇(上唇凹)	ナダ	中期～後葉	南端骨付痕切入、補修孔1個
0027-7	506	堆積土	陶鉢	底部	粗筋1 A脚 (無端)	ナダ	後葉	
0027-8	遺構外	BL-35 II層	陶鉢	底部	单唇(上唇凹)	ナダ	後葉か	底径7.9cm、内面保付窓、外輪被熱により赤変
0027-9	遺構外	BL-35 II層	陶鉢	底部	单唇(上唇凹)、底部にケズリ痕	ナダ・底部ケズリ痕	底径19.2cm、外輪被熱により赤変	
0027-10	遺構外	BL-18 II層	深鉢・鉢	底部	单唇(上唇凹) (多条) 横脚、底部に経目痕	ナダ	後期	底径5.4cm、外輪接合
0027-11	SE4	堆積土	陶鉢	底部	粗筋1 A脚 (無端)	ナダ	前期	底径17.6cm、鐵錆斑点
0027-12	遺構外	BL-35 III層	深鉢・鉢	底部	单唇(上唇凹)	ナダ・輪底痕	底径5.4cm、外輪被熱により赤変	
0055-1	試1	CE-29 堆積土	陶鉢	底部	疊層、無端側傾	ナダ	円筒上唇式	鐵錆斑点

図番号	出土位置	層位	器種	残存部位	特徴			型式・時期	備考
					外面		内面		
B665-5	武2	RW-31 基積土	深鉢	口縁部 単脚L型縫合	石鍋	庄賀貞造	24.6 19.3	3.8 1.3	ナデ ⁷
B665-6	武2	RG-26 基積土	深鉢	口縁部 無脚L型縫合	石鍋	庄賀貞造	27.5 13.4	6.6 2.5	ナデ ⁷
B665-7	武2	RH-31 複層土層	深鉢	口縁部 単脚L型縫合・横回	石鍋	庄賀貞造	(24.6) 13.5	5.4 0.9	ナデ ⁷ 輪積痕
B665-8	武2	RH-31 堆積土	深鉢	底部 単脚L型(多角) 縫合、底部に網代痕、ケズリ	石鍋	庄賀貞造	(39.8) 10.7	4.6 0.5	ナデ ⁷
									中期後葉～後期初頭 海鶴骨片量多く、外輪接合
									近世(10.2)cm、海鶴骨片量多く

剖面石器觀表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	石材	計測値(mm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
IR-15	-	S17	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	24.6	9.3	3.8 1.3	52
IR-16	-	S19内S1	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	48.3	9.9	2.9 0.3	
IR-17	-	S19	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	27.5	13.4	6.6 2.5	
IR-18	-	S19	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(24.6) 13.5	5.4 0.9		
IR-19	-	S109 ⁷ (?) ⁷	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(39.8) 10.7	4.6 0.5		
IR-20	-	S110	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	28.5	17.7	10.9 4.2	
IR-21	-	S116	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	30.9	12.1	6.2 1.6	
IR-22	-	S131	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(27.9) 9.6	3.1 0.8		7.07年村着
IR-23	-	S131	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(29.8) 10.2	3.9 0.8		
IR-24	-	-	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	20.4	13.5	2.6 0.3	
IR-25	-	BR-11	日層	石鍋	庄賀貞造	38.2	10.4	3.8 1.2		
IR-26	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	28.5	18.1	5.7 2.4		
IR-27	-	BR-16	日層	石鍋	庄賀貞造	29.6	16.4	6.4 2.1		
IR-28	-	S05	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	22.1	17.2	4.6 1.5	
IR-29	-	BR-14	日層	石鍋	庄賀貞造	24.4	14.6	6.1 1.7		
IR-30	-	BR-14	日層	石鍋	庄賀貞造	22.4	15.3	4.3 1.1		
IR-31	-	BR-15	日層	石鍋	庄賀貞造	25.5	15.0	5.8 1.6		
IR-32	-	BR-12	日層	石鍋	庄賀貞造	28.3	10.2	3.8 1.1		
IR-33	-	BR-12	日層	石鍋	庄賀貞造	(21.5) 9.3	4.2 0.5			
IR-34	-	BR-21	日層	石鍋	庄賀貞造	29.1	13.9	4.6 1.4		
IR-35	-	BR-21	日層	石鍋	庄賀貞造	33.0	14.0	4.0 1.5		
IR-36	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	(23.6) 13.0	6.5 1.1			
IR-37	-	BR-14	日層	石鍋	庄賀貞造	25.9	12.4	5.8 1.3		
IR-38	-	BR-22	日層	石鍋	庄賀貞造	34.1	15.6	4.9 2.0		
IR-39	-	BR-34	日層	石鍋	庄賀貞造	33.0	14.7	4.2 1.2		7.07年村着
IR-40	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	(22.8) 8.6	3.4 0.4			
IR-41	-	BR-32	日層	石鍋	庄賀貞造	22.8	13.4	4.0 2.4		
IR-42	-	CA-24	カラクラン	石鍋	庄賀貞造	28.9	13.5	3.3 0.7		
IR-43	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	(34.5) 14.1	8.1 3.0			
IR-44	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	(26.9) 10.7	3.2 0.5			
IR-45	-	SP1476	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(44.2) 15.7	5.3 0.6		
IR-46	-	S113	-	堆積土上層	石鍋	庄賀貞造	67.3	14.1	6.0 3.9	
IR-47	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	23.7	10.3	4.5 0.7		
IR-48	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	(18.6) 14.4	7.0 1.5			
IR-49	-	BR-24	カラクラン	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-50	-	BR-29	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-51	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		7.07年村着
IR-52	-	BR-29	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-53	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-54	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-55	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-56	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-57	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-58	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-59	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-60	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-61	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-62	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-63	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-64	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-65	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-66	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-67	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-68	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-69	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-70	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-71	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-72	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-73	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-74	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-75	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-76	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-77	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-78	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-79	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-80	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-81	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-82	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-83	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-84	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-85	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-86	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-87	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-88	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-89	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-90	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-91	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-92	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-93	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-94	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-95	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-96	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-97	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-98	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-99	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-100	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-101	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-102	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-103	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-104	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-105	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-106	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-107	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-108	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-109	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-110	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-111	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-112	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-113	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-114	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-115	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-116	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-117	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-118	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-119	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-120	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		
IR-121	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	63.3	29.7	12.0 11.6		
IR-122	-	BR-27	日層	石鍋	庄賀貞造	76.2	25.6	11.1 14.8		
IR-123	-	BR-28	日層	石鍋	庄賀貞造	57.3	60.0	13.8 32.8		
IR-124	-	BR-19	日層	石鍋	庄賀貞造	59.4	42.3	16.1 14.6		
IR-125	-	BR-24	日層	石鍋	庄賀貞造	67.6	26.8	14.7 26.8		
IR-126	-	S8R	-	堆積土	石鍋	庄賀貞造	(38.0) 28.0	8.0 10.6		
IR-127	-	BR-13	日層	石鍋	庄賀貞造	43.4	19.7	5.3 3.5		
IR-128	-	BR-26	上層	石鍋	庄賀貞造	18.6	14.4	7.2 3.1		

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
SE0-2	遺構外	BH-14	日堀	磨石	安山岩	(14.2)	8.0	5.3	665.3	
SE0-3		—	表張	磨石	安山岩	14.0	7.0	5.3	800.0	
SE0-4	遺構外	BH-33	田堀	磨石	砂岩	12.3	7.0	4.0	472.5	
SE0-5	遺構外	BH-12	1層	磨石	砂岩	(9.7)	6.6	5.1	340.2	
SE0-6	遺構外	BH-10	日堀	磨石	安山岩	(8.4)	6.2	4.2	221.2	
SE0-7	遺構外	—	表張	磨石	安山岩	10.4	7.6	4.5	526.7	
SE0-8	遺構外	(BH-30)	カクラン	磨石	安山岩	10.2	9.1	4.6	640.7	
SE0-9	遺構外	BH-22	田堀	石冠	安山岩	(10.2)	8.3	5.7	650.7	
SE0-10	—	—	表張	磨石	安山岩	(10.2)	8.3	5.7	650.7	
SE0-11	SD16	CI-26	流面土上	石籠	礫状石	(9.7)	(9.0)	11.4	768.1	
SE0-12	SD16	CI-27	流面土上	石籠	閃緑岩	10.9	7.6	5.5	581.0	
SE0-13	PC2	BH-31	縦槽	磨石	粗粒玄武岩	(11.5)	8.9	4.7	886.2	
SE0-14	PC2	BH-32	堆積土	砂岩	砂岩	8.3	6.7	5.8	372.1	

鏡・瓦・筒瓦類

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
SE2-10	519	—	堆積土下層	蘭状土器製品	—	5.4	(1.3)	19.0	BI 無題、台形の可能性有
SE2-11	遺構外	BH-33	II層	縞彫土器製品	(9.7)	(3.2)	(3.0)	10.7	
SE0-3	PC1	CI-28	堆積土	円錐状土器製品	5.1	4.2	0.9	12.7	
SE0-4	PC1	OK-1-27	堆積土	円錐状土器製品	5.1	4.7	1.2	29.1	
SE0-5	PC2	BH-29	堆積土上層	円錐状土器製品	—	—	—	30.7	SIKON、單形BLR

鏡・瓦・筒瓦類

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
SE0-5	SIK0	CH-27	堆積土	円錐状土器製品	5.7	5.6	1.0	39.2	
SE0-6	SIK0	CH-27	堆積土	円錐状土器製品	5.3	5.1	1.1	32.9	
SE0-7	SIK0	CH-27	堆積土	円錐状土器製品	4.8	4.5	1.3	30.2	
SE0-8	SIK0	CH-29	堆積土上層	円錐状土器製品	4.2	4.1	3.0	7.5	

生土・泥質陶器類

図番号	出土位置	層位	器種	内部位置	特徴			型式・時期	備考
					外側	内面			
SE2-1	S13	C-11	床面直上・堆積土	甕	完形、单腹(多条)、縞彫文、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	P19-12	13.5cm×16.0cm×8.0cm高
SE2-2	S13	床面直上・床脚・日堀	甕	横縞土器、山吹突起、虎頭、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	14.5cm×16.0cm×8.0cm		
SE2-3	S13	堆積土	甕	山吹突起、虎頭、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有、斜底無し		
SE2-4	S13	堆積土・床面直上	甕	山吹突起、虎頭、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-5	S13	1層	甕	山吹突起、虎頭、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-6	S13	堆積土	甕	山吹突起、虎頭、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-7	S13	堆積土	甕	虎頭	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-8	S13	床面直上	甕	虎頭	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有、外側に虎頭有		
SE2-9	S13	堆積土	甕	口縁部取扱、变形工字文、ミガキ	ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-10	S13	1層	甕	口縁部取扱、彌縫文、ミガキ	ナデ	前期後葉～中期前葉	11.5cm×8.0cm×5.5cm		
SE2-11	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、横縞土器、虎頭、ミガキ	沈澱、虎頭	前期後葉～中期前葉	穿孔33-26cm		
SE2-12	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	沈澱	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-13	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-14	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-15	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	沈澱	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-16	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-17	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-18	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-19	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	沈澱	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-20	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-21	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-22	遺構外	BH-12 II層	甕	口縫部取扱、彌縫文、沈澱	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に虎頭有		
SE2-23	遺構外	BH-29 I層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	外側に虎頭有		
SE2-24	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×16.0cm×8.0cm		
SE2-25	遺構外	BH-11 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-26	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-27	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-28	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-29	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-30	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-31	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-32	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-33	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-34	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-35	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-36	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-37	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-38	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-39	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-40	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-41	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-42	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-43	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-44	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-45	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-46	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-47	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-48	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-49	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-50	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-51	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-52	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-53	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-54	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-55	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-56	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-57	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-58	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-59	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-60	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-61	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-62	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-63	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-64	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-65	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-66	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-67	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-68	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-69	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-70	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-71	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-72	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-73	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-74	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-75	遺構外	BH-12 II層	甕	山吹突起、虎頭、彌縫文	ナデ	中期後葉～中期前葉	13.5cm×17.5cm×8.0cm		
SE2-76	遺構外	BH-12 II層	甕	山					

上部岩相圖表

閑番号	出土位置	グリッド	層位	器種	部位	計測値(cm)			調査概要		備考	
						上径	下径	厚さ	内面	底面		
閑27-1	S113	-	床面	环	口～底部	16.4	7.4	5.5	*3°	*3°	P99・118・122・124・126・127	
閑27-2	S113	-	*3°上面	集	略変形	13.6	6.5	15.2	*3°+*3°+*3°	*3°+*3°	P115・121	
閑37-3	S113	-	床底+*3°堆積土	环	底部	6.2	3.7	10.1	*3°	*3°	P96+149・120+125+130	
閑37-4	S113	-	床底	底盤	-	5.6	(3.2)	*3°	*3°	-	P100・104	
閑37-5	S113	-	床底+*3°堆積土	底盤	-	7.8	(5.8)	*3°	*3°	-	P116・117+128	
閑37-6	S113	-	床底	小型土器	底盤	3.9	(3.3)	*3°	*3°	-	P108	
閑38-1	S117	-	床底	铜鏡	-	(5.9)	15.9	*3°	*3°	-	P1	
閑39-1	遺構外	-	-	底盤	-	(5.1)	*3°+*3°+(5.6)+*3°	*3°	-	-		
閑39-2	遺構内 24 BX-24	雷層	隻	底盤	-	(2.4)	1.7	*3°	*3°	木葉底・*3°		
閑39-3	S119	-	3層	隻	底盤	-	(6.36)	(5.8)	*3°	*3°	木葉底	P119
閑58-9	沢1 C-27	-	堆積土上層	环	略变形	20.8	8	5.6	*3°+*3°	*3°	内里・有段	
閑58-10	沢1 C-27	-	堆積土上層	环	略变形	20.9	3.5	5.5	*3°	*3°	内里・有段・58-13同	
閑58-11	沢1 C-27	-	堆積土上層	环	略变形	11.9	4	7.6	*3°	*3°	内里・有段	
閑58-12	沢1 C-36	-	泥炭层	口縫	口縫部	(10.7)	-	(5.0)	+*3°	+*3°	縮滅している	
閑58-13	沢1 C-27	-	堆積土上層	环	口縫	-	(5.1)	3.1	*3°	*3°	-	58-10と同
閑58-14	沢1 C-27	-	堆積土上層	隻	口縫	-	(7.2)	*3°+*3°	*3°	*3°+*3°	-	
閑58-15	沢1 C-36	-	泥炭层	銅+底盤	-	2.2	(5.7)	*3°	*3°	*3°	輪縮痕・雪母	
閑58-16	沢1 C-27	-	堆積土	隻	底盤	-	3.9	(6.6)	*3°	*3°	-	
閑58-17	沢1 C-28	-	堆積土上層	隻	底盤	-	1.1	(3.6)	*3°	*3°	木葉底	
閑58-18	沢1 C-28	-	堆積土上層	隻	口～側面	17.4	-	(20.4)	*3°+*3°	*3°	-	
閑58-19	沢1 C-28	-	堆積土上層	隻	口縫部	-	10.8	8.1	+*3°	+*3°	-	
閑58-20	沢1 C-28	-	堆積土上層	隻	口縫部	-	(7.5)	5.2	*3°+*3°	*3°	-	
閑58-21	沢1 C-28	-	堆積土上層	台付	台	-	(2.6)	2.9	*3°	*3°	-	
閑58-22	沢1 C-28	-	堆積土上層	台付	底盤	-	(4.8)	3.8	*3°	*3°	台付に貫通孔(2ヶ所)	

古代・中・近世礫石器觀察者

固番号	造構名	グリッド	層位	岩種	石材	計測値(cm)			重量 (g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
337-7	SII13	—	床面	砂岩	砂岩	(19.8)	5.4	4.8	725.9	
339-6	—	BC-28	カクラン	礁石	砂岩	(9.7)	5.5	2.2	188.1	
356-14	沢2	0J-11	堆積土層上部	礁石	砂岩	14.9	7.9	3.4	434.2	
366-1	SP1615	—	堆積土	礁石	頁岩	(8.8)	3.3	3.2	135.5	
366-2	SP120	—	堆積土	礁石	頁灰岩	(6.8)	6.0	4.4	133.1	

鐵製品報廢表

固形号	被检名	グリット	部位	器型	計測値(cm)	量(g)	備考
固形8-18	浜川	CC-29	瓣膜上面	刀子	(13.8) 1.2 0.2	11.4	
固形8-19	浜川	CC-29	瓣膜上面	不明	(16.2) 0.9 0.8	19.1	

木製品觀察表

図番号	出土地位置	グリッド	層位	25種	種種	計測値(cm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
国20-1	3号木組	-	底面	容器	クリ	72.6	21.0	19.0	樹種同定No46
国21-1	3号木組	-	底面	容器	クリ	73.0	42.0	20.5	年代同定0880Bn53 樹種同定No1・45
国22-1	3号木組(松木)	-	底面	杭	クリ	35.6	6.9	5.9	樹種同定No27
国22-2	3号木組(松木)	-	底面	杭	クリ	50.6	9.7	7.1	年代同定0880Bn61 樹種同定No40
国22-3	3号木組(松木)	-	底面	杭	クリ	(43.3)	9.6	7.0	樹種同定No35 22-5と同
国22-4	3号木組(松木)	-	底面	杭	クリ	(21.6)	6.8	3.0	樹種同定No38
国22-5	3号木組(松木)	-	底面	杭	クリ	(21.6)	6.8	5.4	樹種同定No22-3と同
国22-6	3号木組	-	底面	丸木材	クリ	(73.9)	15.7	8.4	樹種同定No39
国22-7	3号木組	-	底面	丸木材	クリ	(37.4)	13.8	13.8	破壊している 樹種同定No10
国59-1	Sd16	O-28	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	111.7 高(4.7) 幅(3.5) 外面-黒漆、内面-黒漆 樹種同定No1
国59-2	Sd16	O-28	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	113.2 高(7.0) 幅(6.0) 外面-黒漆、内面-黒漆 樹種同定No3
国59-3	Sd16	O-28	堆積土上層	桺	ブナ属	-	-	-	111.2 高(5.7) 幅(3.9) 外面-黒漆、内面-黒漆 樹種同定No4
国59-4	Sd16	-	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	11 一致 高(4.9)cm 外面-黒漆、内面-黒漆 樹種同定No7
国59-5	Sd16	O-27	底面土	桺	ブナ属	-	-	-	11 高(6.2) 高(6.2)cm 外面-赤漆、内面-赤漆 樹種同定No13
国59-6	武1	O-28	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	11 高(6.0) 高(6.7)cm 外面-黒漆、内面-赤漆 樹種同定No49
国59-7	Sd16	O-28	堆積土上層	桺	ブナ属	-	-	-	11 高(5.9) 高(5.5)cm 外面-黒漆、内面-赤漆 樹種同定No16 異の可能性有
国59-8	武1	O-28	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	11 高(3.3) 高(4.2)cm 外面-赤漆、内面-赤漆 樹種同定No6 異の可能性有
国59-9	Sd16	-	堆積土	桺	ブナ属	-	-	-	11 高(6.0) 高(3.6)cm 外面-赤漆、内面-赤漆 樹種同定No1 異の可能性有
国59-10	Sd16	O-28	堆積土	アヌスマウリ	10.2	10.0	1.0	樹種同定No2	
国59-11	Sd16	O-28	堆積土	アヌスマウリ	16.0	16.2	1.0	樹種同定No2	
国59-12	武1	O-28	堆積土	アヌスマウリ	(14.4)	20.1	0.9	樹種同定No2	
国59-13	2号木組	-	底面土	山物	アヌスマウリ	36.9	3.8	0.5	樹種同定No43
国59-14	武1	O-28	堆積土	山物	アヌスマウリ	26.9	7.7	1.4	樹種同定No4
国59-15	武1	O-28	堆積土	山物	アヌスマウリ	11.1	2.0	0.1	樹種同定No29
国60-1	Sd16	-	堆積土	下駄	クリ	15.4	6.6	4.9	樹種同定No8
国60-2	武1	O-27	堆積土	下駄	マツ属	14.9	7.2	4.1	樹種同定No20
国60-3	Sd16	O-27	堆積土	下駄	モクレン属	(16.0)	6.2	2.9	樹種同定No21
国60-4	Sd16	-	堆積土	下駄	ヤカヤク	(15.2)	8.5	4.2	樹種同定No6
国60-5	武1	O-29	堆積土	下駄駒	クリ	9.0	14.4	2.0	樹種同定No15
国60-6	武1	O-29	堆積土	下駄駒	クリ	9.1	12.8	2.0	樹種同定No15
国60-7	武1	O-28	堆積土	把手	アヌスマウリ	(21.9)	9.9	1.7	樹種同定No28
国60-8	2号木組	O-29	底面	桺	-	(9.0)	9.0	13.8	
国60-9	Sd16	O-28	堆積土	桺	イヌノキ	4.4	14.3	0.8	樹種同定No1
国60-10	2号木組	-	底面土	箸	アヌスマウリ	24.6	6.0	0.6	樹種同定No44
国60-11	武1	O-28	堆積土	刀形	コラバ	24.4	3.1	0.4	樹種同定No17
国60-12	2号木組	O-29	底面	木棒	ミキウチ	(62.0)	28.1	15.1	折れの2はエユニテ、樹種同定No30

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	断面	計測値(cm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
5001-2	沢1	CF-28	堆積土	不明	アスナロ風	31.2	3.5	0.7	陶物？ 断面同定No.25
5001-3	沢1	CF-28	堆積土	不明	マツ葉	20.0	4.0	2.9	瓦材？ 断面同定No.24
5001-4	沢1	CG-28	堆積土	不明	マツ葉	(19.7)	5.3	3.4	樹種同定No.18
5001-5	沢2	-	堆積土上層	不明	-	69.9	9.0	1.6	
5001-6	S016	-	底面	板	マツ葉	(43.1)	4.8	4.8	年代測定08MN02 断面同定No.32
5001-7	1号木桶	-	底面直上	板	マツ葉	(44.6)	4.7	3.2	年代測定08MN06 断面同定No.42
5001-8	S016	CG-28	堆積土	不明	マツ葉	112.0	4.5	2.5	陶材？ 断面同定No.23
5001-9	S016	-	底面	不明	-	6.6	5.2	1.5	木釘？ 存在

古代土製品叢表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	計測値(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
5002-2	N117	-	床面直上	鉄鋸歯	4.7	4.8	3.0	75.1
5002-4	SK152	-	堆積土	鉄鋸歯	5.4	5.5	2.8	76.3

古代石製品叢表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	計測値(cm)			備考	
					長さ	幅	厚さ		
5003-9	SK147	-	堆積土	有孔石製品	豆鉢	7.6	6.8	1.9	125.6
5003-7	遺構外	BK-19	田畠	石製品	-	2.9	1.2	1.7	6.0

古銅鏡叢表

図番号	出土位置	層位	種類	種別	生産地・初詣年代			計測値(mm)	重量(g)	枚数	備考
					長さ	幅	厚さ				
5004-2	SK145	底面	鬼火通寶(新)	日本	1665年	26	2.7	-	古鏡2		
5004-3	SK145	底面	鬼火通寶(新)	日本	1665年	24	2.3	-	古鏡3		
5004-4	SK145	底面直上	不明	不明	明	24	4.5	2	古鏡1 一枚重ね		
5004-12	S33	堆積土	鬼火通寶(新)	日本	1665年	25	2.8	-			
5004-13	S33	堆積土	鬼火通寶(新)	日本	1665年	25	3.3	-			
5004-14	S33	堆積土	鬼火通寶(新)	日本	1665年	24	1.9	-	小学、青光		
5004-15	S33	堆積土	鬼火通寶(新)	日本	1665年	25	2.6	-			
5005-1	S016	(C-28 底面直上)	洪武通寶 明	洪武通寶	明	1368年	22	1.6	-	1	
5005-2	沢1	CF-29 錫鏡面	洪武通寶	洪武通寶	明	1368年	20	0.8	-	1	
5005-3	S016	底面	永樂通寶 明	永楽通寶	明	1403年	22	1.8	-	1	古鏡2
5005-4	S016	底面	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	23	1.8	-	1	古鏡1
5005-5	S016	(C-28 底面直上)	永楽通寶 明	永楽通寶	明	1403年	24	1.9	1枚重ね鏡?		
5005-6	S016	CF-27 透面	永楽通寶	永楽通寶	明	1403年	22	1.1	-	1	
5005-7	S016	底面	永楽通寶	永楽通寶	明	1403年	22	0.6	-	1	古鏡3
5005-8	S016	底面	永樂通寶?	永楽通寶?	明	1403年	21	0.7	-	1	
5005-9	S016	底面	永樂通寶?	永楽通寶?	明	1403年	21	0.6	-	1	古鏡1
5005-10	2号木桶	底面直上	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	25	2.2	-	1	古鏡2
5005-11	沢1	CF-29 堆積土	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	25	2.5	-	1	古鏡1
5005-12	沢1	CF-29 堆積土	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	22	1.3	-	1	
5005-13	沢1	CF-29 カクラン	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	21	1.3	-	1	
5005-14	2号木桶	底面直上	鬼火通寶(古)	鬼火通寶	日本	1636年	24	1.9	-	1	
5005-15	沢1	CF-29 堆積土	鬼火通寶(古)	鬼火通寶	日本	1636年	25	3.5	-	1	
5005-16	沢1	堆積土	鬼火通寶(古)	鬼火通寶	日本	1636年	25	3.3	-	1	古鏡2
5005-17	沢1	CF-29 堆積土	鬼火通寶(古)	鬼火通寶	日本	1636年	25	2.6	-	1	
5005-18	沢1	CF-30 カクラン	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	25	2.9	-	1	継子
5005-19	沢1	CF-29 カクラン	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	26	3.2	-	1	青光
5005-20	遺構外	BS-24-27, BT-29 1層	大聖元通寶 宋	大聖元通寶	宋	1023年	25	2.5	-	1	
5006-4	遺構外	カクラン	永樂通寶	永楽通寶	明	1403年	25	2.2	-	1	
5006-5	遺構外	見抜	永樂通寶(古)	永楽通寶	日本	1636年	24	1.9	-	1	古鏡1
5006-6	遺構外	見-23 1層	鬼火通寶(古)	鬼火通寶	日本	1636年	25	3.5	-	1	
5006-7	遺構外	BP-18, 19 1層	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1668年?	25	3.2	-	1	
5006-8	遺構外	BP-33 1層	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	29	3.7	-	1	西文鏡
5006-9	S016	堆積土	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	27	3.3	-	1	継字 繁華鏡?
5006-10	遺構外	BP-1905	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	25	2.0	-	1	
5006-11	遺構外	BP-28 1層	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	24	2.2	-	1	継字
5006-12	遺構外	BP-23 1層	鬼火通寶(新)	鬼火通寶	日本	1665年	25	1.7	-	1	
5006-13	遺構外	見抜	寄手通寶	寄手通寶	日本	1678年?	30	7.6	-	1	青(上)；寛(下) : 二
5006-14	SP1364	堆積土	永樂通寶	永樂通寶	日本	1403年	22	2.1	-	1	鉄鏡
5006-15	遺構外	カクラン	永樂通寶	永樂通寶	日本	1403年	24	2.2	-	1	鉄鏡
5006-16	遺構外	カクラン	永樂通寶	永樂通寶	日本	1403年	27	4.3	2		

鎌管鏡叢表

図番号	出土位置	層位	部位	計測値(mm)	重量(g)	年代	備考		
							長さ	幅	厚さ
5008-5	SK145	底面直上	火皿・櫛番	(75)	8.8	18c	既確認生存。セレル		
5008-6	SK145	堆積土	櫛番	(55)	4.4	不期			
5008-26	沢1	底面	火皿・櫛番	74	8.2	18c	既存良好。Fct		
5008-21	沢1	CC-30 底面直上	火皿・櫛番	(40)	4.8	17c			
5008-22	沢1	CF-28 堆積土	櫛番?	40	2.5	6-朝	遺れている		
5008-17	遺構外	(C-29 カクラン)	火皿・櫛番	46	5.0	18c			
5008-18	遺構外	(E-26 カクラン)	火皿	(31)	4.5	19c			
5008-19	遺構外	(G-32 カクラン)	火皿	53	7.9	19c			
5008-20	遺構外	(I-29 カクラン)	櫛番?	80	4.7	18c			

向量微积分表

説明	出力位置	層位	器種	生産地	年代	種類	形態・方法	備考
説明-1	SK138	堆積土	土瓶	大垣市	19c	陶器	壺	
説明-6	SK160	堆積土	中壺	肥前系	19c	陶器	壺付	
説明-9	SK171	3層	なます皿	肥前	18c後	陶器	壺付	くらわんこ陶 肥前見面か
説明-10	SK171	3層 堆積土	小壺	大垣市	18c	陶器		
説明-11	SK1	堆積土	小瓶	小久里	19c	陶器		
説明-12	SK4	堆積土	土瓶蓋	大垣市	19c	陶器		
説明-17	SK5	堆積土	大壺	瀬戸	19c	陶器	壺付	
説明-23	SB16 沢川	CG-27 CH-28 堆積土 神經原	小瓶	中國	17前	陶器	壺付	漆油施墨?
説明-24	SB16	CL-27 沢川底上 堆積土	小瓶	中國	17前	陶器	壺付	漆油施墨?
説明-25	沢川	CH-27 堆積土上層	高級小皿	瀬戸市	16末	陶器		菊手 入室Ⅳ期
説明-26	沢川	CE-29 磁御認定	大平壺	瀬戸	17後～18c	陶器		
説明-27	沢川	CE-29 磁御認定	中壺	肥前	18c	陶器	口吹	高台内附文 4.9cm、「大明年製」
説明-28	沢川	CE-29 墓頂土	天目碗	瀬戸市	15c末～16c初	陶器		大里I期 漆黒
説明-29	SB16	中壺	肥前	肥前	17c	陶器	壺付	P3
説明-30	沢川	CG-28 堆積土	大瓶	肥前	17c	陶器	背負手	
説明-31	沢川	CG-28 堆積土	中壺	肥前	17c後～18c	陶器	背負手	
説明-32	沢川	CG-28 堆積土	大瓶	肥前	17c後～18c	陶器	背負手	
説明-33	沢川	CG-28 堆積土	中壺	肥前	18c	陶器	壺付	
説明-34	沢川	CG-28 堆積土	茶	信楽	16c～17c前?	陶器		
説明-35	SB16	CH-28 堆積土	大瓶	瀬戸市	17c	陶器	背負手	
説明-36	CE-27 堆積土	抹瓶	精削	16c	陶器			
説明-37	CE-28 堆積土	抹瓶	肥前	17c前	陶器			
説明-38	沢川	CG-30 堆積土	抹瓶	肥前	18c後	陶器		
説明-40	SB16	CG-28 堆積土	茶	信楽	16c～17c前?	陶器		
説明-50	SB16	CE-27 堆積土	茶	信楽	16c～17c前?	陶器		
説明-60	CE-29 磁御認定	茶	肥前	17c後～18c	陶器			茶
説明-67	SB16・沢川	CG-28 + CC-30 堆積土・堆積土下層	火入・香炉	肥前	17c	陶器		
説明-68	沢川	CF-28 底直面	茶入	瀬戸市	16c後	陶器		解剖茶入
説明-69	道場外	CG-26 II型	瓶?	中國	16	陶器	青磁	龍虎実業?
説明-70	道場外	BE-13 I型	瓶	肥前	16c後～17c初	陶器	絵唐津	
説明-71	SPF122	堆積土	小瓶	肥前	16c後～17c初	陶器	絵唐津	
説明-72	沢川	CG-27 I型	抹瓶	肥前	18c後	陶器		
説明-73	SPF315	堆積土	小瓶	瀬戸市	16	陶器		
説明-74	SPF134	堆積土	小瓶	瀬戸市	17前	陶器		登場 I期
説明-75	道場外	BD-16 I型	小瓶	肥前	18c後	陶器	壺付 見込瓶の日輪表記	登場 II期
説明-76	道場外	BQ-30 I型	中壺	肥前	17c後～18c初	陶器	壺付	青磁
説明-77	道場外	BQ-33 I型	中壺	肥前	19c	陶器	壺付	高台内附文
説明-78	道場外	BQ-30 II型	中壺	肥前	19c	陶器	壺付	
説明-79	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-80	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-81	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-82	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-83	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-84	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-85	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-86	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-87	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-88	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-89	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-90	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-91	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-92	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-93	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-94	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-95	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-96	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-97	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-98	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-99	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-100	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-101	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-102	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-103	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-104	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-105	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-106	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-107	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-108	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-109	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-110	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-111	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-112	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-113	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-114	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-115	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-116	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-117	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-118	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-119	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-120	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-121	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-122	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-123	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-124	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-125	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-126	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-127	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-128	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-129	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-130	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-131	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-132	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-133	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-134	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-135	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-136	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-137	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-138	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-139	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-140	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-141	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-142	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-143	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-144	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-145	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-146	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-147	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-148	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-149	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-150	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-151	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-152	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-153	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-154	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-155	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-156	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-157	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-158	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-159	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-160	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-161	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-162	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-163	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-164	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-165	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-166	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-167	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-168	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-169	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-170	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-171	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-172	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-173	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-174	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-175	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-176	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-177	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-178	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-179	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-180	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-181	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-182	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-183	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-184	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-185	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-186	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-187	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-188	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-189	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-190	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-191	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-192	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-193	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-194	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-195	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-196	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-197	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	
説明-198	道場外	BE-16 II型	瓶	肥前	18c後	陶器	青磁	



調査区全景（E→）



C・D 区全景（真上から。写真上が南）

写真1 空撮（1）



B区 沢1・ビット群（真上から。写真上が南）



C区 ビット群（真上から。写真上が南）



基本層序 C-D



基本層序 A-B



基本層序 A-B 下層拡大

写真2 空撮（2）・基本層序



作業風景①



作業風景②



作業風景③



作業風景④



作業風景⑤



作業風景⑥



作業風景⑦



作業風景⑧

写真 3 作業風景



第6号竪穴住居跡完掘（E→）



第6号竪穴住居跡土層（E→）



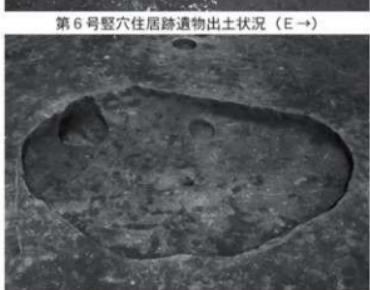
第6号竪穴住居跡土層（S→）



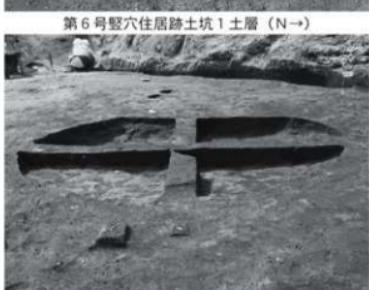
第6号竪穴住居跡遺物出土状況（E→）



第6号竪穴住居跡土坑1土層（N→）



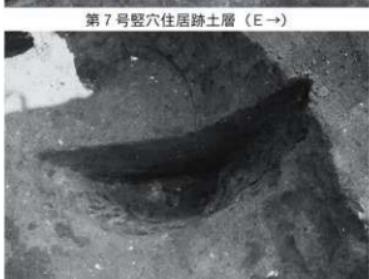
第7号竪穴住居跡完掘（E→）



第7号竪穴住居跡土層（E→）



第7号竪穴住居跡土層（S→）



第7号竪穴住居跡ピット1土層（N→）

写真4 繩文時代の竪穴住居跡（1）



第8号竪穴住居跡完掘（S→）



第8号竪穴住居跡土層（S→）



第8号竪穴住居跡土層（E→）



第9号竪穴住居跡完掘（S→）



第9号竪穴住居跡土坑1土層（S→）



第9号竪穴住居跡土坑2土層（E→）



第9号竪穴住居跡遺物出土状況（S→）



第9号竪穴住居跡炉遺物出土状況（S→）

写真5 繩文時代の竪穴住居跡（2）

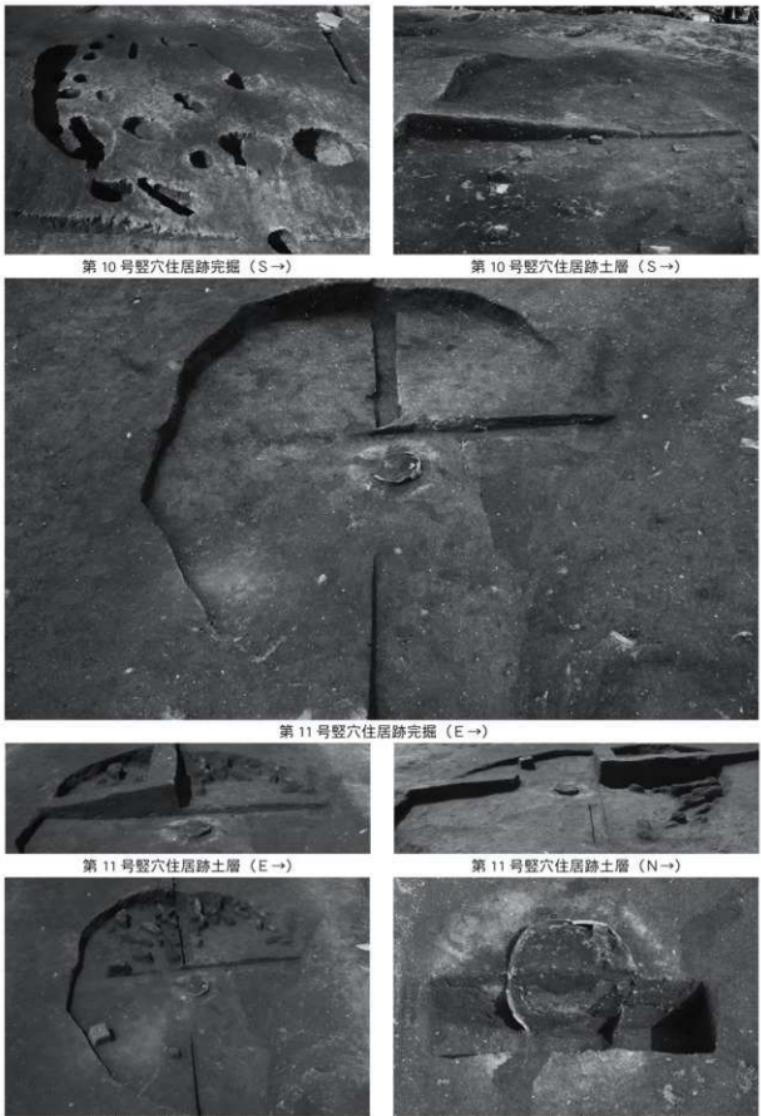


写真6 縄文時代の竪穴住居跡（3）

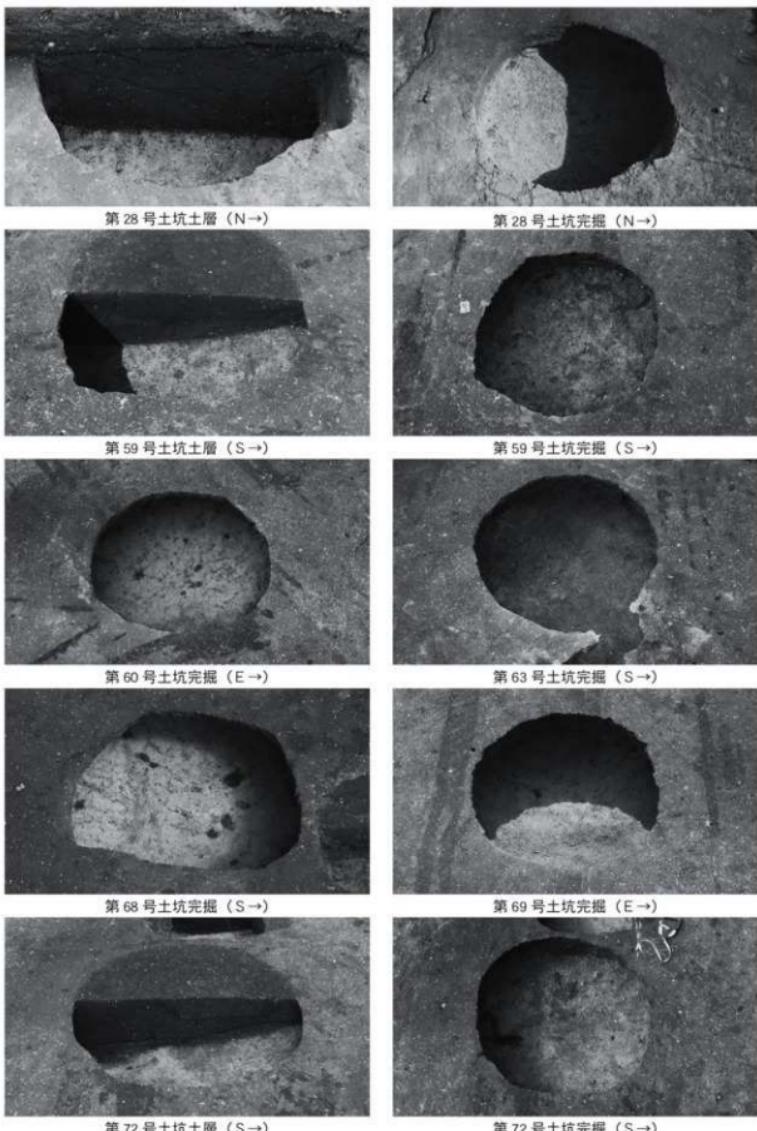


写真7 繩文時代の土坑 (1)

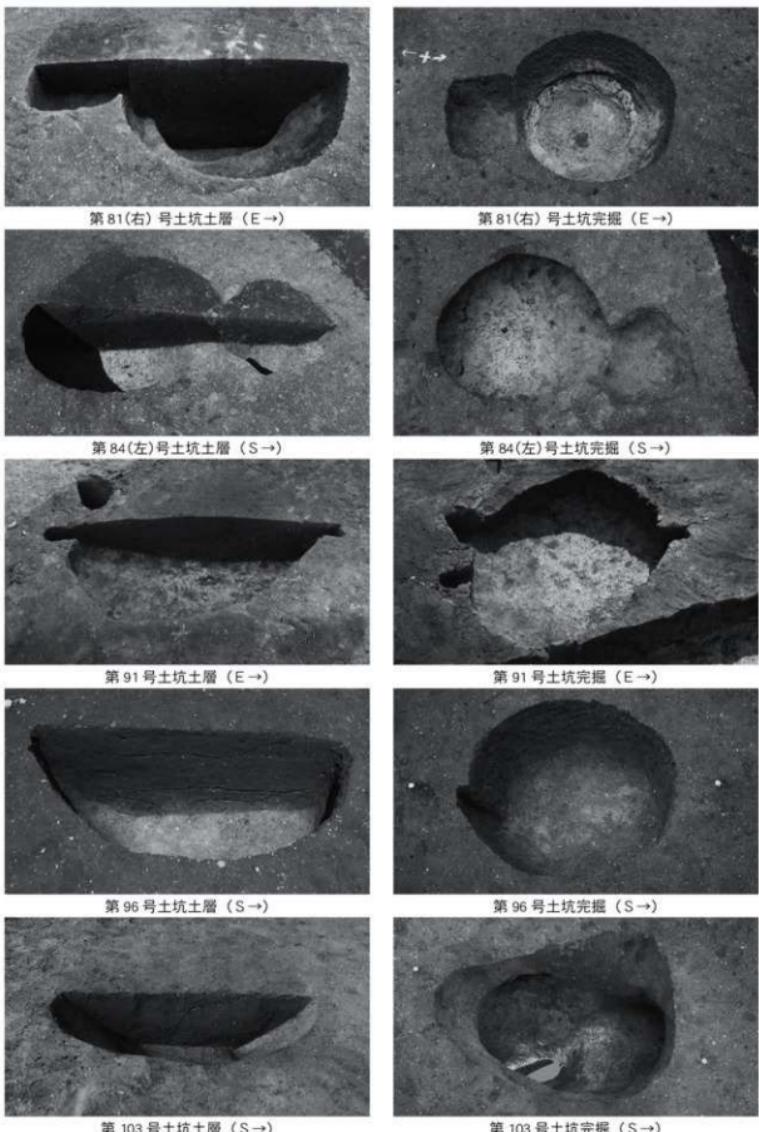


写真8 縄文時代の土坑（2）